ブルー＆グリーンアートプロジェクト2022と地域文化創造の実践的研究
サステナブルデザインと「海を巡るファッションの旅 Step By Step」を事例として

A Practical Study of the Blue & Green Art Project 2022: A Case Study of Sustainable Design and Exhibition "A Fashion Journey Through the Sea :Step By Step"

2020-2022 BGAPシンポジウムアーカイブ付き

水谷　由美子*　山本　成美**　原田　裕作***
MIZUTANI Yumiko* YAMAMOTO Narumi** HARADA Yusaku***

*山口県立大学名誉教授　**山口県立大学大学院国際文化学研究科２年　***山口県立大学国際文化学部４年
*Emerita Professor of Yamaguchi Prefectural University
**Second grade of Graduate School of Yamaguchi Prefectural University
***Fourth grade student of Yamaguchi Prefectural University

要旨

本論は2020年から本年まで実施してきたブルー＆グリーンアートプロジェクトについて、その前提となったアグリアート・フェスティバルにおける活動との関係を踏まえながら、SDGsにコミットしつつ、海と陸をつなげて地域活性化や地域における開発についての活動であるシンポジウムや作品展に焦点を当てたものである。

特に、2022年度に実施したシンポジウムなどに触発されて実施した作品展「海を巡るファッションの旅」における作品について考察を加えた。サステナブルデザインのために、日本の伝統的な服飾及び染織技法である裂織・つづれ、裂編、パッチワーク及び草木染めに取り組んだ。また、廃棄される前に厚生労働省から提供されたマスクやビーチクリーンで取得した漂着物である牡蠣パイプなどのアップサイクルを行なった。

海や陸の環境問題を自分の問題として来場者が感じられるように、裂織のワークショップも開催した。短い期間であったが、今後の活動への礎として表現者側への効果があったとともに、来場者への意識啓発に役立ったと言える。

Abstract

This paper focuses on the Blue & Green Art Project, which has been implemented from 2020 to the present, in relation to the Agri-Art Festival, which was the premise of the project, and its activities on regional revitalization and development.The project focuses on symposiums and exhibitions of artworks, which are activities about regional revitalization and development by connecting the sea and land, while committing to the SDGs.

In particular, the report discusses the works in the exhibition "A Journey of Fashion through the Sea," which was inspired by the symposium held in March 2022. For sustainable design, we will focus on the traditional Japanese clothing and dyeing and weaving techniques. The project focused on traditional Japanese clothing and dyeing techniques such as sakiori, tsuzure, saki-knitting, patchwork, and herb-dyeing for sustainable design.

The project also included the upcycling of masks provided by the Ministry of Health, Labor, and Welfare before they were discarded, as well as oyster pipes and other flotsam collected from beach cleanups.

The project also upcycled masks provided by the Ministry of Health, Labor and Welfare before they were discarded and oyster pipes that had washed ashore from beach cleanups.

A sakiori weaving workshop was also held to help visitors feel the environmental issues of the sea and land as their own problems. The event was short-lived, but we hope that future activities will be more active and it was effective in raising awareness among the visitors as well as the organizers as a foundation for future activities.

キーワード：ブルー＆グリーンアートプロジェクト　シンポジウム　サステナブルファッションデザイン　共感
SDGs　ビーチクリーン　アップサイクル　裂織・つづれ　牡蠣パイプ

Keywords：Blue & Green Art Project Symposium　Sustainable Fashion Design　Empathy　SDGs
Beach Clean　Upcycle Sakiori：Torn Yarn-woven Fabric　Oyster Pipe

サステナブルな地域創生に向けたハンドブック付録リスト

ブルー＆グリーンアートプロジェクト2020-2022　シンポジウム　アーカイブ

Ⅰ（2020）　P.193－　シンポジウム＆ファッションプレゼンテーション「海と陸の結婚」
旧文洋小学校（長門市）登壇：畠山 重篤　小橋 賢児　井上 雄然　坪内 千佳

Ⅱ（2021-1）P.205－　講演会＆山歩き「自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする～
日本の和ハーブ、長門の和ハーブ～」旧文洋小学校（長門市）
登壇：古谷　暢基　平川 美鶴

Ⅲ（2021-2）P.223－　ビーチクリーン＆シンポジウム「海の豊さを周防大島における近未来の
生活デザインに活かす～SDGsから白木半島地区の可能性を探る」
周防大島町橘総合センター（周防大島町）
登壇：新山 玄雄　藤本 正明　内田 博陽　藤本 淨孝

Ⅳ（2021-3）P.240－　シンポジウム＋ミニコンサート＋ファッションプレゼンテーション
「海と陸の過去・現在・未来～和のサステナビリティで世界へ～」
ラポールゆや（長門市）
登壇：中井 徳太郎　葦津 敬之　岩元 美智彦　江原 達也

Ⅴ（2022）　P.257－　シンポジウム＆展覧会「民俗学者『宮本常一』に学ぶ地域創生
～地域循環がある周防大島町のライフデザイン～」
周防大島町橘総合センター（周防大島町）
登壇：新山 玄雄　中井 徳太郎　岩元 美智彦　藤本 淨孝

Ⅰ－Ⅴ　企画運営／コメンテータ・モデレータ：安倍 昭恵・水谷 由美子
協力：柳居 俊学
上記Ⅱ－ⅤはYouTube参照可

1　はじめに

本論はブルー＆グリーンアートプロジェクト2022の活動を事例として、服飾及び染織の分野におけるサステナブルデザインを通じた地域文化創造を目指した実践的研究である。

今日では2030年までに実現を目指して2015年に国連で採択された持続可能な開発目標SDGsが世界的な課題となっており、日本でもこの数年にかなり具体的な活動が実践されてきている。ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会では、2020年からビーチクリーンを実践しながら、海と陸の関係をつなげた開発をすることが地域振興には重要なことだと考え、安倍昭恵共同研究者とともに、プロジェクトを立ち上げて継続的な活動をしてきた。

2020年から2022年度まで実施してきたシンポジウムについてアーカイブをサステナブルな地域創生のための参照資料として文末に掲載する。シンポジウムは、国の政策、地域の行政、企業そして個人などの活動を知り、筆者や学生に何ができるかなどを考える好機であり、服飾デザインへの示唆的体験となった。

特に今年度に関しては、2022年５月22日に周防大島町橘総合センターで実施されたシンポジウムのテーマは「民俗学者『宮本常一』に学ぶ地域創生～地域循環がある周防大島町のライフデザイン～」であった。宮本常一（1907－1981年）は民俗学者の域を超えて、周防大島をはじめ日本全国の地域、特に農山村や漁村などで、実践的な指導を行なった地域振興の先駆的な活動家でもある。

ファッション分野のパネラーとして、日本環境設計株式会社の岩元美智彦会長は世界的なイノベーションを起こしており、その実践内容を紹介した。その中で岩本の「世の中にゴミはない」、また中井徳太郎環境省事務次官の「すべてのゴミは資源である」という発言は刺激的であった。

筆者は、これらの言葉に触発されて、日本の伝統的な裂織の染織技法を若者と実践し、メッセージを地域の人々に発信したいと考えた。また、周防大島（周防大島町）や野島（防府市）という瀬戸内海の島でビーチクリーンを行なった結果、漂着物におけるプラスチックの代表は広島の牡蠣の養殖場から流されてきた牡蠣パイプであった。そこで、今回は裂織（さきおり）、裂編（さきあみ）、パッチワーク（寄布）、牡蠣パイプのアップサイクルなどの、制作者が興味を持つサステナブルな服飾造形技法を活用して、服飾や装飾品などをデザインし制作を行った。

また、今だに新型コロナ禍にあり、日本ではマスクを付けた生活が続いている。2000年に新型コロナ感染症の蔓延が激しくなって来た時に、マスク不足が深刻な状況を迎え、日本政府がマスクを国民全員に配布するプロジェクトを行なった。2022年に残った在庫が希望者に配布されるという応募があり、山口県立大学グローバル部門の栫建次リーダーの取計で600袋（２枚入り）が手に入った。このマスクを解くと１枚のガーゼ布に戻った。それ故に、サステナブルな視点から、１枚ずつに戻されたガーゼ布に草木染めをするなどして、作品を制作した。

さらに、展覧会のメッセージを観客に伝えるもう一つの手段として、裂織のワークショップを行った。目的は社会的な課題をアートで共感できるような機会を創出するためである。

本論では、主に後者の展覧会に焦点を当て、作品の紹介をするとともに、考察を加えたものである。

なお、ブルー＆グリーンアートプロジェクトの基盤となったアグリ･アート･フェスティバルの成果も検証する。

２　アグリアート・フェスティバルからブルー＆グリーンアートプロジェクトへ

共同研究者の安倍昭恵と筆者及び山口県立大学企画デザイン研究室のメンバーは、2013年から2019年まで長門市をフィールドとし、また主に長門市や公益財団法人東芝国際交流財団等の助成を受けて、地域の農業文化振興を目指してアグリアート・フェスティバル及び国際交流事業を開催してきた。

最初は手探りでの開始であった。2011年の東日本大震災後に自給自足の生活の必要性を感じて、安倍昭恵が地元下関市で稲作を開始した。この経験から安倍は若者が農業に興味を持つためには、まずファッションから入ることがいいのではないかというアイデアを提案した。筆者は2005年からルーラルファッションショーに取り組み、農作業着から着想を得た町着を提案していたために、農作業着には親しみがあった。

最初はゴールの設定が難しく、まったくの手探りで開始した。１回目は農業スタイルコレクションと言う名称であった。２回目にジャポニスム振興会の助成を得ることになり、田楽庵主催の田植フェスティバルに山口県立大学と安倍昭恵そしてジャポニスム振興会の副理事長、大谷祥子とそのスタッフなどが一緒に参加した。その出会いから今後継続的に活動を行うことを念頭に、名称を再度決めようと言うことになり、「アグリアート・フェスティバル」が決まった。

その後、この名称で第２回目から７回目までつまり2014年から2019年までの６回を実施した。フェスティバルと命名されたことや、多様なスタッフが企画に参加したことにより、２回目から、シンポジウムとコンサート（ダンスを含む）そしてファッションショーという３部構成が企画の構成スタイルになった。

特にファッションショーでは、若者が農業をしたくなるスタイルを提案することが中心となり、農作着やテーマに関するアート作品が発表された。その中でmompekkoが有限会社ナルナセバとの共同研究で、一貫して商品開発され、販売も行われるなど、人々の日常着に着地されたことは一つの成果であった。

アグリアート・フェスティバルは農業スタイルコレクションを含め７回目に、長門市が取り組む第25回全国棚田（千枚田）サミットとの共同開催を行い終了した。

今まで農業を通じて陸の問題の課題解決について志向してきた。フィールドの中心であった東後畑の棚田では、自然栽培米が育てられ、安定した活動になった。また、上記サミットの時期にNPO法人棚田景観保

存会の活動が活発となり、耕作放棄地の棚田（実際には藪になっていた）が開拓されてハーブ畑に変貌された。

我々が７年間かけて農業文化振興を目指している内に、実際の農業部門では確実な変化と前進が見られたのだ。もちろん、我々の活動においても、棚田での田植えや稲刈りを地域の人々や高校生、さらに行政のメンバーなどと共同で行い、メディアを通じて棚田について発信してきた。

アグリアート・フェスティバルが一定の形を成して終了した。長門市の後畑や向津具半島そして油谷半島などの海に面した地域では、陸の課題は海の問題と繋がっていることが理解された。また、安倍が気仙沼の牡蠣養殖家であり、NPO法人森は海の恋人代表理事である畠山重篤との交流を通じて、海の課題は陸の課題と強く繋がっていることを著者に示唆した。

そこで、2020年から陸と海を繋げて取り組む活動をする組織つまりブルー（海）とグリーン（陸）をアートで繋げて開発するプロジェクトを実施することを目標にした「ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP実行委員会」が立ち上げられた。

以下にこれまでに活動をリストアップしておく。

・2020年９月15日　油谷湾でのビーチクリーンby BGAP ×百姓庵（長門市）
・2020年10月25日　シンポジウム＆ファッションプレゼンテーション「海と陸の結婚」旧文洋小学校（長門市）〈付録Ⅰ（2020）〉
・2021年４月18日　講演会＆山歩き「自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする～日本の和ハーブ、長門の和ハーブ～」旧文洋小学校（長門市）〈付録Ⅱ（2021-１）〉
・2021年６月27日　ビーチクリーン＆シンポジウム「海の豊さを周防大島における近未来の生活デザインに活かす～SDGsから白木半島地区の可能性を探る」周防大島町橘総合センター（周防大島町）〈付録Ⅲ（2021-２）〉
・2021年７月11日　シンポジウム＋ミニコンサート＋ファッションプレゼンテーション「海と陸の過去・現在・未来　～和のサステナビリティで世界へ～」、ラポールゆや（長門市）〈付録Ⅳ（2021-３）〉
・2022年５月22日　シンポジウム＆展覧会「民俗学者『宮本常一』に学ぶ地域創生～地域循環がある周防大島町のライフデザイン」周防大島町橘総合センター（周防大島町）〈付録Ⅴ（2022）〉
・2022年10月23日24日　展覧会「海をめぐるファッションの旅　～Step By Step～」（服飾・染織・アクセサリーの作品展＆裂織『つづれ』のワークショップ）Gallery ラ・セーヌ（山口市）

３「海を巡るファッションの旅　Step By Step」における作品制作の背景

ブルー＆グリーンアートプロジェクト2022におけるシンポジウムは、海や陸の地域課題解決にまで踏み込み、大きな成果を挙げられた民俗学者、宮本常一をテーマに、周防大島町と周防大島郷土大学の協力を得て実施された。

ここでは周防大島郷土大学の新山玄雄理事長による基調講演、続くパネルディスカッションでは、環境省中井徳太郎事務次官、日本環境設計株式会社岩元美智彦会長そして周防大島町藤本淨孝町長、コメンテータとして安倍昭恵共同研究者そして筆者がモデレータを務めた。

ここでは地域の自然や社会の循環に関する具体的な事例などが紹介され、地域循環型社会の必要性が認識された。筆者はパネルディスカッションの中で、特に岩本の「この世にゴミはない」と中井の「すべてのゴミは資源である」という言葉に触発された。世界の産業の中で、アパレル分野が石油産業に次いで環境負荷が高いことが知られている。

持続可能な開発目標SDGsにおいても、「作る責任、使う責任」と大いに関わっている。そこで、日本の伝統的な服飾及び染織技法につづれあるいはつづり（地域により他の名称があるが山口県の呼称として上記２つを挙げる）と呼ばれた裂織の技術に焦点を当てることにした。古着や廃棄前の布などを裂いて糸にして新しい布を織る裂織は、複数の人々が交代しながら一緒に織るという共同作業が可能であることや、織る行為は特に特別な完成度を求めなければ、容易に楽しく織ることができる。また、地球環境負荷に対して、理

解を得て、かつ共感を得やすい方法だと考えたからである。

現在、全国的に裂織をして服飾やラグなどインテリアグッズを制作している人は多い。山口における歴史では、古くなった着物を裂いて糸に撚り、また布を織って、着物に仕立てるということがされていた。全国的にも同様のことが庶民の生活文化の中でされていた。庶民の生活の厳しさが背景にあるが、同時に明治時代の中頃まで布は自家製造されるなど極めて貴重なものであった。

棉を栽培し、実などを取り除き綿にする、そして糸状にして撚りをかけて機織用の糸にする。紺屋が染めて、その糸を織る。無地、あるいは縞柄や絣柄などに織る。無地の場合には反物にしてから染める場合もある。そして着物に仕立てる。

ほとんどの家庭の女性が家族のために、あるいは一部仕事として機織りを行なっていた。布は消耗品ではない。化学繊維が明治時代に入って来る前には、山口県における庶民は主に木綿や麻、そして和紙などを主な素材として着物を作っていた。和紙作りは長州藩や岩国藩で推奨されていた。

着物は古くなったら端切れとして、ドンザあるいはドンダなどの仕事着に継ぎ接ぎされることもあった。浴衣はおむつに使われ、雑巾になり、塵になるまで使われた。

また、子供の着物は下の子供へとお下がりとして着られていた。

こうした日本人の伝統的な布や着物の活用の中に、地域循環型社会の姿が垣間見られる。

現在の衣生活において、衣服は物質的な理由というよりも流行という意味的な理由で使い捨てられていることが多い。定番的な服を長く着るという習慣もあるが、多くは流行の記号的な意味を消費している。

今回の展覧会では上記のような現状を踏まえて、身の回りの布や捨てられる前の布に再度命を吹きかけることを考え、裂織の技法を用いたタペストリーや服飾作品を制作した。さらに、伝統的なパッチワーク（寄布）や裂編の技法を用いた服飾や装飾品も製作している。

また、2020年からビーチクリーンを行なっているが、周防大島（周防大島町）や野島（防府市）などの瀬戸内海側の沿岸部では、広島県の牡蠣養殖場からプラスチックの牡蠣パイプが漂着されている。今回はビーチクリーンで取得した牡蠣パイプを使ったオブジェ、アクセサリー及びドレスを製作し、廃棄されるもののアップサイクル表現を行なった。

以下では作品について紹介する。

４「海を巡るファッションの旅　Step By Step」展における作品

⑴　裂織・つづれ＋染色

１）タペストリー

①　作　品　名：かたわれどき（写真１左）
　　制　　作：大津さくら・葛原琴美（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科２年）

②　作　品　名：海と夕映え（写真２）
　　制　　作：吉松花梨（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科３年）

③　作　品　名：Light（写真３）
　　制　　作：水早杏菜（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科３年）

④　作　品　名：平和を祈るツズレ・タペストリー（写真４）
　　～オーガニックタマネギ × マスクのアップサイクル～
　　制　　作：水谷由美子
　　コンセプト：日本環境設計株式会社の岩元会長は「世の中にゴミはない」という。プラスチックの半永久的リサイクルの手法を化学的にイノベーションした。シンポジウムや北九州のプラント訪問で、何度か聞いた。聞くたびに衝撃を受けている。

私たちは毎日、多くのものを廃棄している現実がある。目的に沿ったものを達成するために、必要のないものを全てゴミとして捨てている。また必要以上のものを購入して家の中は、ものに溢れている。このような状況にあるのは筆者だけではないだろう。

（写真１）かたわれどき

（写真２）海と夕映え

（写真３）Light

（写真４- １）平和を祈るツズレ・タペストリー

（写真４- ２）

昔の人々は身近な草花，野菜や木の皮で布を染めた。衣服や布団カバーなどを継ぎ接ぎして着用した。またいらなくなった着物や布を裂いて織り、新しい布に再生させまた服にした。生活の中に循環があった。ものがないあるいは貧しいからだけではない。自分や家族のために糸を紡ぎ織り着物に仕立ててきた。布には心が宿っていた。ものを大切にする心のありかを顧みたい。

今回の作品は来場者との共同と共創により平和への共感を織り出したいと考えた。本作は住居の近所のレストランで使われるオーガニックタマネギの皮を譲り受け、染色に活かすとともに、廃棄前に厚生労働省から寄贈されたマスクのガーゼ布を材料に制作した。１枚のガーゼでできたマスクをほどき、緯糸として裂織りした。経糸はレース糸を用いた。

会場に来られた方と完成させることをコンセプトにしたため、会期中に会場で完成させた。

結果的には裂織の共同製作者は原田裕作で、藍染めのガーゼ布の提供を合わせて受けた。素材はあらためて言うと、厚生労働省から配布されたマスク、徳地和紙。染色は玉葱染め（水谷による）と藍染め。玉葱の皮はセント・コア山口から提供されたもので、玉葱の栽培は有機栽培をしているYOROZU FARMである。黄色の３枚のパネル（写真４-１の中央）は上から玉葱染めの10分、20分、30分の時間による濃さを示している。

２）服飾デザイン

①　作　品　名：生命～Tsuzure～（写真５-１・２）

制　　作：原田裕作（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科４年）

コンセプト：「裂織」とは、古着を細く裂いて織りあげるアップサイクル手法である。日本では、伝統的に行われ、日本人の「もったいない」の美学を直接的に反映した慣習ともいえる。それを主素材として、身体を包みこむドレスを制作した。

本作品は、「生命」の源である海中の動きに着目し、古着や着物などを藍染したものを用いてグラデーションで表現した。特に青色が映えるように、白の素材と交互に重ね、水が循環する海の様子をイメージしている。

これは裂織をテーマに制作した１つ目の作品であり、織り幅や形に限りがある素材を用いて、それらを重ね合わせたり、脇に布を当てるなどして、身体のラインに沿わせるように試みた。その後の展開としては、裂織の可能性を発展的に考え、ウエストベルトやリボン、ポケットなどに裂織を取り入れたスカートやパンツなどの日常着を制作し、本作品と併せて「クリスマスクリエーション2022 “Empathy”」で発表した。

（写真５- １）生命～ Tsuzure ～

（写真５- ２）

② 作　品　名：Whitecaps（写真６-１・２）
制　　作：石田 彩夏（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科４年）
コンセプト：海岸に打ち寄せる白波をイメージした作品を制作した。素材には厚生労働省より配布された「アベノマスク」をほどいて全身に使用している。白波の荒々しさとマスクの素材感を表現するためにあえて端は切りっぱなしのまま加工し、白波が消えていく様子からスカート部分は控えめに、サーキュラースカートで流れるようなシルエットを意識した。

（写真６- １）Whitecape

（写真６- ２）

③ 作　品　名：The Voice of waves（写真７）
制　　作：田村奈美（染色研究家・山口県立大学大学院国際文化学研究科修了）
コンセプト：染色は藍染めで青に染めている。打ち寄せる波や海の中の波、陽に照らされ、揺らめき光る波間を藍染めの絞り染めで表現した。波の白いしぶきと海の青をそれぞれ染めていない白と藍染めの微妙な色の変化を出している。そして打ち寄せる波をグラデーションにしてスカートや胸元部分に描いている。

３）パッチワーク（寄布）による服飾デザイン
作　品　名：sea girl（写真８）
制　　作：土井奏（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科４年）
コンセプト：製作者が考える人魚姫の少女像をパッチワークを用いて表現。人魚姫は人間になるために声を失うなど、プリンセスという綺麗でかわいいイメージだけではなくネガティヴな要素も持ち合わせている少女であると解釈し、作品に反映させた。パッチワークはキラキラと光が反射している海を、巻き付く毛糸は様々なしがらみや苦悩を現した。
　パッチワークには綿素材の他にキルト生地やレース生地を使い、視覚的なギャップを生み出している。

（写真７）The Voice of waves

（写真８）sea girl

⑶　ペットボトルオブジェ

作　品　名：語る海（写真９）

デ ザ イ ン：山本成美

制　　作：山本成美・大津さくら・葛原琴美・津村実奈・土井奏

コンセプト：2022年５月22日に開催された「民俗学者 宮本常一に学ぶ地域創生～地域循環がある大島町のライフデザイン～」、基調講演にて、中井徳太郎氏（環境省事務次官）によると2050年には魚の量よりも海洋ごみの量が多くなるという。その言葉に海洋プラスチック問題の緊急性を感じ、改善に向けた喫緊に取り組みが必要な問題であると理解した。

（写真９）語る海

今回、代表的なプラスチックごみであるペットボトルを用いた作品を展示することで、来場者に海洋プラスチック問題について訴えかけることを目的に、デザイン・制作に取り組んだ。コンセプトとしては、2050年のプラスチックごみが溢れてしまった海の中を表現し、来場者自身がその中に身を置くことで、2050年の海を体感、それぞれが今できることに取り組むことを促す作品である。そこで、人一人が覆われるようなサイズ感のモビールで、ペットボトルを海中の水泡に見立てることとした。制作には山本を中心に、土井、大津、葛原、津村が参加し、協働により進めた。各々が大量のペットボトルと向き合い、プラスチックごみの活用、海の未来について意見を交わした。

ペットボトルの加工については、ハサミを用いて四角に切断し、周りを熱処理により丸めている。素材の提供は山口県立大学である。

来場者はモビールの下に立ち、揺れるプラスチックの泡

について綺麗ですね」、とコメントいただくことが多かった。ただ、「本当に海がこうなるととても困りますね」など深刻な意見もあった。まさにその通りで、この作品のような海を生まないために活動できる人材を増加させるためのアート活動を今後ともBlue & Green Art Projectでは取り組んでいく。

⑷　漂着物「牡蠣パイプ」による造形、裂編、服飾デザイン

1）ビーチクリーンの実践

ブルー＆グリーンアートプロジェクトではこれまで多様なジャンルの専門家を招いたシンポジウムや、ファッションによる環境へのアプローチをショー形式で世界へ発信する活動を行ってきた。山口県内の海辺でゴミを拾う、ビーチクリーン活動もその一環である。はじめにも述べているが、ビーチクリーン活動として、以下のような内容の活動を行った。

2020年９月15日　長門市（百姓庵工場付近の浜）

2021年６月27日　ブルー＆グリーン アートプロジェクト2021 in 周防大島 ビーチクリーン＆シンポジウム「海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす ～ＳＤGsから白木半島地区の可能性を探る～」

加えて以下の日程でも海辺の清掃活動を実施してきた。

2021年11月13日　「アートで野島の魅力を発見・創造しよう」（防府市野島）

2022年８月26日　野島でビーチクリーン・素材集め

2）漂着物としての牡蠣パイプ

ビーチクリーンの結果、ペットボトルをはじめとするプラスチック製のパッケージや商品のラベル、漁網などの漁業ごみが主に集まった。その中に青や緑の筒状のごみが混ざっており、これは広島牡蠣の養殖の際に使用する通称「牡蠣パイプ」と呼ばれるもので、周防大島や野島の海辺でのみ発見された。瀬戸内海海域での海洋ごみの特徴として、牡蠣養殖で使用されるこのパイプ類の割合は他の海域より高いことが指摘されており（藤枝他 2007）(注1)、それらを実感することとなった。

藤枝（2011）はこのプラスチック製パイプ類を４種類に分類し、漂流漂着の実態調査を行なっている。牡蠣幼生を付着させるために採苗棚に吊り下げられる採苗連のコレクターに間隔を設けられるために使用される直径約13mm、長さ約15mmのポリエチレン製パイプをまめ菅、採苗後、牡蠣育成のため沖合の牡蠣筏に垂下される垂下連のコレクターに間隔を設けるために使用される直径約13mm、長さ約205mmのポリエチレン製パイプ（以下、パイプという）、このパイプが収穫時、鉄線切りによって中央で切断されたもの（以下、損傷パイプという）および垂下連の一番下の部分を止める直径約24mm、厚さ２mmのポリエチレン製ワッシャーである。パイプ類の漂流漂着状況の結果として、台風等による筏の流出による損傷なども原因として挙げられるが、パイプと損傷パイプの収穫時の発生比と漂着密度を比較すると損傷パイプの割合が著しく高くなっており、収穫・選別後の不法投棄による流出が継続している可能性を示唆した(注2)。

我々はこのような身近な海にまつわる環境問題の現状を踏まえ、ビーチクリーン活動の継続と、アートの力で海洋環境問題への訴えを表現すべく、作品制作に取り組んだ。

この度2022年10月23日-24日にギャラリー ラ・セーヌ（山口市）で開催された展覧会「海をめぐるファッションの旅 Step By Step」にて展示をした。牡蠣パイプ類を使用した服飾作品、アクセサリー、小物を例に、その活用方法を紹介する。

どの作品にも共通してパイプ類を洗浄・消毒を施している。手順としては 擦り洗い→切断（まめ菅を除く）→拭き洗い→アルコール液漬け込み→加工 である。

３）牡蠣パイプのアップサイクル

①　生活用品の装飾デザイン

作　品　名：Beach Vase（写真10）

制　　作：津村実奈（山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科 ４年）

コンセプト：砂浜に落ちている色とりどりの牡蠣パイプを、かぎ針編みでビーズのように編み込んで制作したフラワーベース。

（写真10）Beach vase

毛糸を使用するだけでなく、不要になったハギレや古着を切って糸にしたものを素材として編む、「裂き編み」を行った。ベース本体には、空き瓶やペットボトルを使用しており、ペットボトルの切断面は熱を通して丸くすることで安全面を考慮した。牡蠣パイプは、防府市にある野島でビーチクリーンを行った際に拾ったものを使用している。

裂編用の糸にするために使用したハギレや古着は身内や友人から集めており、また花瓶のベースも全て不要になったもので作られているサステナブルな作品である。外側の袋部分は取り外しできるため手入れも容易であり、中にワイヤーを入れることである程度のサイズ調節が可能になっている。今後の可能性として、さらに牡蠣パイプ本体の色を活かした配色実験や、ワイヤーを有効的に使用し、立体的な造形の可能性も検討していきたい。また、毛糸は入れず、全て古着での製作にも挑戦したい。

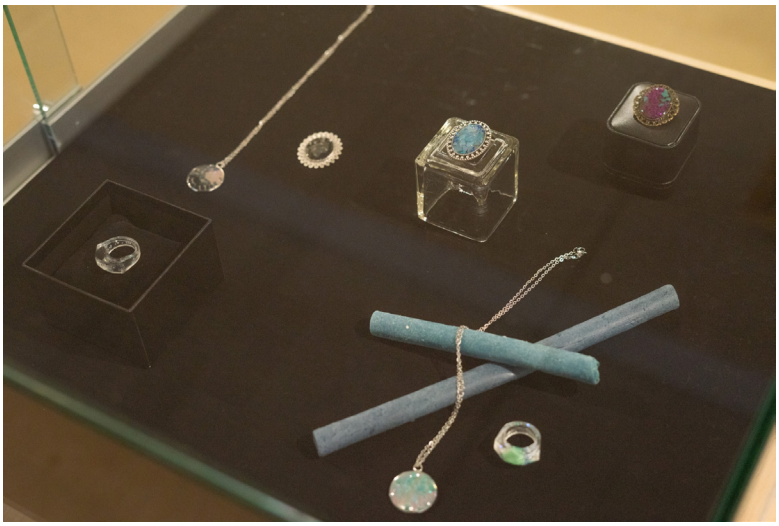
本作品で使用したパイプ類は、まめ菅である。

②アクセサリー

作品名：Jewels of the Sea（写真11）

制作：山本成美（山口県立大学大学院 国際文化学研究科 国際文化学専攻 ２年）

津村実奈（山口県立大学 国際文化学部４年）



（写真11- １）Jewels of the sea

（写真11- ２）

加工したパイプ、損傷パイプを使用したレジンアクセサリー。より身近な生活小物への活用を目指して、アクセサリーの制作をした。制作物は指輪やブローチ、ペンダントやキーホルダーで、年齢や性別にとらわれず使用できることを想定した設定をしている。

パイプのサイズ感や、照射器へかけるタイミングなど何度も試作を重ねた。レジンアクセサリーにすることで、パイプ本来の色味は活かしつつ、傷ついた面をカバーすることができた。また、ホログラムと組み合わせることでまるで宝石のような、重厚感のある仕上がりとなり、パイプのみを使用した作品とはまた違った印象に仕上げることが叶った。

試作品を見た人や、展覧会来場者からは「とても綺麗で販売を視野に入れては」、などと有難いアドバイスを頂いた。ビーチクリーンだけでなくそこから派生したプロジェクトはさまざまな相乗効果により本来のプロジェクト趣旨をより多方面に発信していくことができると考える。今後の牡蠣パイプアクセサリーの可能性として、受け止めたい。

このアクセサリーは2023年１月28日に山口県防府市の小学生とその保護者を対象に行う企画のうちのひとつとしてワークショップ形式で制作を行う予定にしている。身近な海の抱える環境問題について考え、自然と向き合う気持ちが子どもたちに育まれることを期待している。

③　服飾デザイン

作　品　名：Up to You（写真12）

制　　作：山本成美

コンセプト：この作品には、私たち人間の選択・行動によって地球環境の未来が変わってくるというメッセージが込められている。②と同様に、牡蠣パイプ類のうち主にパイプと損傷パイプをドレスフロント部分に装飾的に使用している。海の神秘的な存在である人魚が、一度は人の手で不要になってしまったものたちに新たな価値を与える姿をモチーフにしている。

パイプ、損傷パイプを洗浄・消毒したのち、熱を加えて平らに伸ばし裁断、穴を一箇所に開けている。牡蠣パイプ類の使用にあたって、収集から加工まで、かなりの手間と時間を要したが、来場者からは「このパーツがまさか海洋ごみからなっているとは想像もできなかった、人の手で活かすことも、そうではなくしてしまうことも出来るのですね」というコメントがあった。

この作品は本展覧会での展示と、2022年12月４日に開催された「クリスマス・クリエーション 2022 Empathy」におけるファッションショーでも発表を行なった。その際にサテン生地と手縫いでの装飾の取り付けの強度の問題で、ウォーキングの際に幾つかパーツが落ちてしまった。タイトなデザインであった為に身体との摩擦で玉留めが生地をすり抜けてしまったようだ。縫い方に工夫をして、最終的に着用にも向いたものへとブラッシュアップしていきたい。

（写真12- １）Up to you

（写真12- ２）

(5)　地域の海洋保全に着想を得た服飾デザイン

作　品　名：アロハワンピース＋アロハシャツ（写真13右・左）

テキスタイル＆ファッションデザイン＆制作：水谷由美子

素　　材：コットン・ポリエステル

協力　フォトショップ加工　小橋圭介（山口県立大学国際文化学部准教授）

グラフィック加工&服飾制作　下川まつゑ（山口県立大学国際文化学部実習助手）

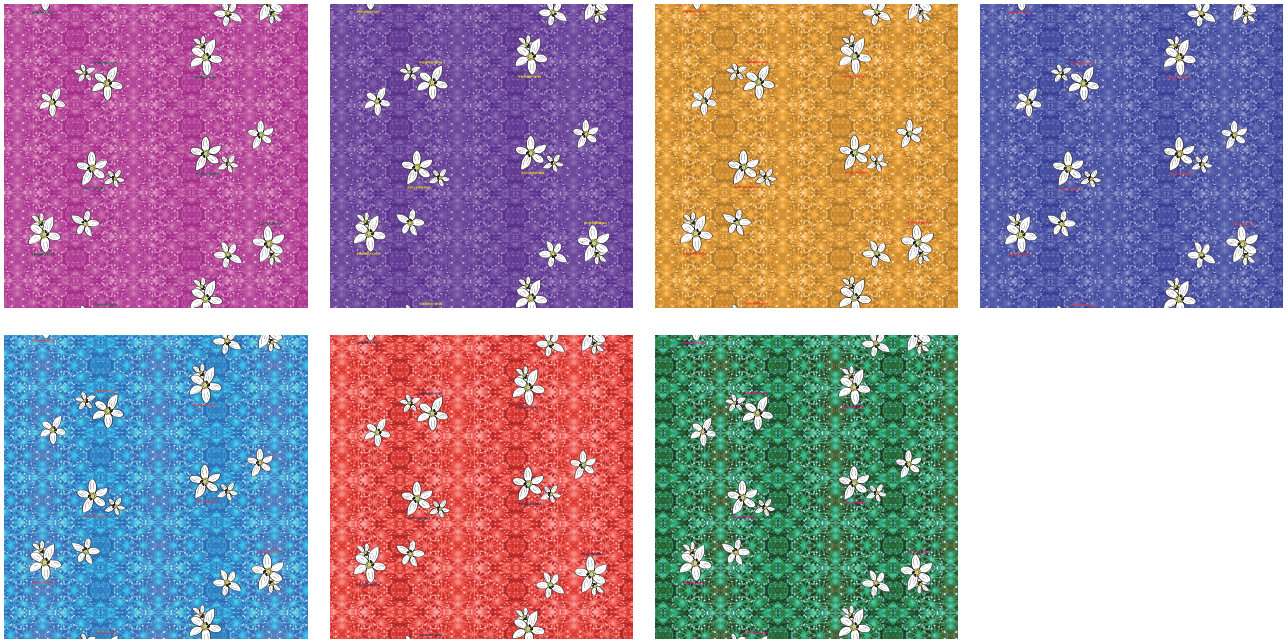
オリジナル画像提供：藤本正明（山口県東部海域にエコツーリズムを推進する会会長）

(写真13)アロハシャツとアロハワンピース

コンセプト：周防大島町と周防大島高校のためのアロハシャツ用（写真右）にデザインしたテキスタイル７色の内の１色、ピンクで制作したワンピース。

テキスタイルについては周防大島を象徴するみかんの白い花びらと地家室（周防大島町）沖の海で世界で最も大きな群生地が見られるニホンアワサンゴをモチーフにデザインした。ニホンアワサンゴは夏には繁殖期で赤い色をしており、冬は美しい緑色になる。このテキスタイルデザインにおいては、地柄は冬のニホンアワサンゴの写真をグラフィック処理しており、硬質でやや機械的な印象を与えるため、みかんの花弁は、手書きで温かい印象を与えるように工夫した。同時に、若者が着るためのアロハ用なので、漫画的なタッチも意識した。

アロハワンピースの服飾デザインについては、制作者用に立体裁断をしてシンプルなシルエットを目指した。また、模様が印象的に映えるように、カットラインをなるべく無くす工夫をした。アロハシャツについては既に記している(注3)ので、参考にしてほしい。７色のアロハシャツは現在新たに商品開発をしており、2023年度には周防大島町にて販売予定である。



(写真14)７色のテキスタイル 左上からピンク、紫、黄、紺、左下から青、赤、緑

5　「海を巡るファッションの旅　Step By Step」展におけるワークショップ

服飾作品の展示会「海を巡るファッションの旅　Step By Step」において、来場者を対象に体験型展示として裂織ワークショップを行った。日本の伝統的なアップサイクル技法である裂織を身近に体験することで、多くの衣服を廃棄処分するという現在の生活スタイルを見直すきっかけとなることを意図した。

（写真15）会場風景

本企画については、原田が全体のマネジメントを行った。フィンランドの国立ラップランド大学に在籍中、北欧で盛んな染織文化に触れ、機織りの指導を受けた。そこで、撚りをかけた糸だけではなく、古布を細く裂いて織り込むという手法があることを知り、帰国後には、萩博物館（萩市）による 特別展示「百年の布 ～美しき襤褸の世界～」を担当した松尾優平学芸員にインタビュー調査を行った。 そして日本の伝統的な服飾文化やその歴史的背景の中で「裂織」の位置づけを知り、日本人のモノを使い続 ける美学の一つとして興味をもった。

当初の計画では、来場者が少しずつ織り進め、最終的に一枚の長い共創作品を制作することを企画していたが、制作した作品を自身の生活の中で役立てられる方が参加者の制作意欲に繋がると考え、コースター（約９cm四方）の製作体験とした。

会場内の一角に機織りフレーム３台と作品制作で余った布を用意し、裂いて緯糸に用いた。経糸は２色のレース糸を、９cmほどの幅で張り、最も単純な平織りの織り方を指導した。参加者は最初は慣れない手つきであったが、徐々に作業がスムーズになり、個々の表現の工夫を楽しむ様子もみられた。具体的には、緯糸の間に細く切った布でフリンジを付けたり、緯糸を重ねる際に強弱をつけ、部分ごとに印象を変えたり、異なる色の布を交互に織りあげるなど。制作するものは小さなテキスタイルではあるが、参加者はその中で様々な工夫を凝らしながら、手作業で織りあげる初めての体験を楽しんでいた。また、古布のアップサイクルを日常空間に取り入れる可能性が伝わったようだ。今後は2023年１月に防府市内で小学生とその保護者を対象に、サステナブルの暮らしを体験することを目的として裂織のワークショップを実施する予定である。

6　まとめ

ブルー＆グリーンアートプロジェクト2022の活動における服飾デザイン部門の発表として開催した展覧会を通して、サステナブルファッションデザインについての作品の事例を紹介した。

制作者は服飾デザインを専門とするものがほとんどで、伝統的な染織技法や構成技術である裂織、裂編、草木染め、寄布及びアクセサリー制作などは、ほとんどが挑戦的な実験であった。それ故に、コンセプトに対して、それを十分に伝えるだけの技術を伴って制作ができたかはわからない。

とはいえ、伝統的な技法に学び、挑戦することから、新しい表現の可能性や共同する喜びなどが、制作者と観客の間で、また制作者同士の間で共感されたのは確かである。

ことに筆者は、裂織に関しては初めての実践であった。長年、共同研究をして来たフィンランド国立ラップランド大学の紹介で見学などしたタイト・ラッピでは、ポッパナ織Poppanaと呼ばれる裂織によりラグなどのインテリア商品を制作しており、身近には感じていた。

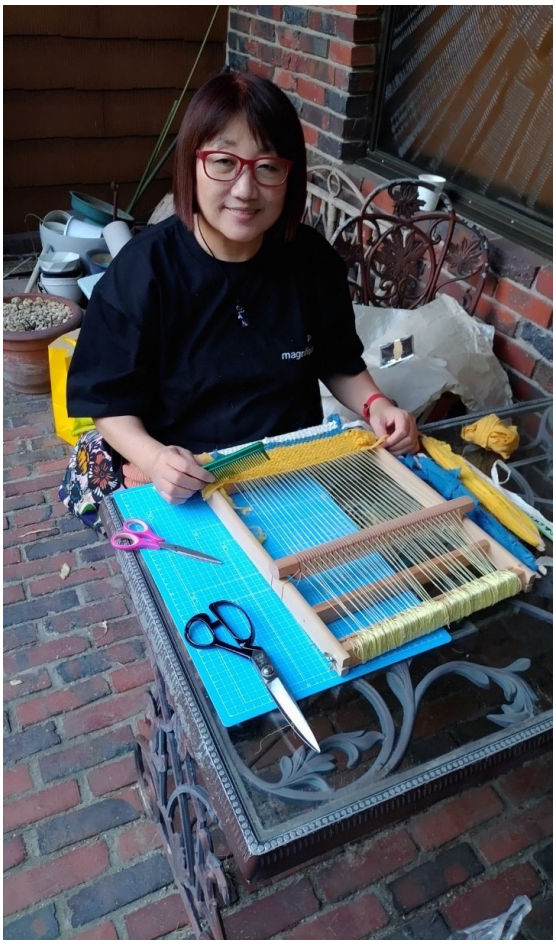
また、ポッパナ織のテキスタイルでブランディングされたフィンランドの高級ファッションブランド、アンニッキ・カルヴィネンAnnikki Karvinenが日本に輸入されており、輸入元のエムアールト株式会社（2003年当時）で紹介を受け興味をもっていた。また、このブランドの商品を2000年頃からヘルシンキの目

抜き通りでよく見かけていた。

今回、自ら体験することにより、その手軽さや楽しさを知った。また、ラップランド大学と共同して、サステナブルでかつ両国の伝統的な染織技法を通じ、交流する計画が生まれてきた。新しいものをどんどん消費するだけではなく、身近に在るもの、捨てようとするもの、海岸に漂着されたものなどに目を向け、アートの力でアップサイクルすることから、新しい可能性を見出すことができる。

同時に、この活動を通じて、海と陸の課題についての認識を広く国内外へと広げていくことができるのではないか。さらに身近な行為で、地域循環型社会への理解を促進できるのではないかと希望を持って活動を継続して行きたいと考える。

（分担：山本は４章、原田は５章そして水谷は全体を編集かつ執筆した。なお、末尾の付録で在るシンポジウムの編集は水谷が行い、山本と原田が協力した。）



（写真16）　裂織を実践する筆者

ブルー＆グリーンアートプロジェクト2022年の活動について、シンポジウム開催に関して、安倍昭恵共同研究者をはじめ多くの皆様にご協力をして頂きました。この場をお借りして深くお礼を申し上げます。周防大島町、藤本淨孝町長（パネラー）及び町のスタッフの皆様、周防大島高校太田真一郎校長及びスタッフの皆様と生徒さん、基調講演及びパネラーの新山玄雄周防大島町郷土大学理事長、パネラーとして遠くからお越し頂いた中井徳太郎環境省事務次官（当時）、岩元美智彦日本環境設計株式会社（株式会社JEPLAN）会長、運営に関わって頂いた西村一樹さん、そのほか多くの皆様にご支援とご鞭撻を頂きました。また、山口県立大学、岡正朗理事長には学生ともどもご支援とご理解及びご来場を頂きました。また、同大学松尾量子教授には展覧会の学生指導に参加して頂きました。

付録にある３年間、５回に渡るのシンポジウムにパネラーとしてご参加下さった皆様、またご支援、ご協力を頂きました皆様におかれましては、ここでお名前を記せませんが、お礼を申し上げます。付録編集に関して、御登檀者の皆様をはじめ、西村一柎様、黒神直豊様（宗像大社秘書・広報課長）、小林悠里様（株式会社JEPLANジェプラン取締役執行役員会長）、堀俊洋（長門市経済産業部長）そして畠山信（NPO法人森は海の恋人副理事長）の皆様に多大な御協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。

最後に、2021年から2022年に渡る周防大島町でのブルー＆グリーンアートプロジェクトの活動への多大なご支援とご理解を頂きました山口県議会、柳居俊学議長にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

注

1　藤枝 繁、小島あずさ、大倉よし子「日本における国際海岸クリーンアップ（ICC）の現状とその結果」『沿岸地域学会誌』2007;20⑶: pp.33-46。

2　藤枝 繁「瀬戸内海に漂流漂着するカキ養殖用パイプ類の実態」『日本水産学会史』2011;77⑴:pp.23-30。

3　水谷由美子、松尾量子、山口光、小橋圭介「デザインを通じた周防大島町のハワイ化計画に関する実践的研究 ―周防大島町・山口県立大学・周防大島高校の連携による共同研究―」『山口県立大学学術情報第15号』〔国際文化学部紀要　通巻第28号〕2022年。

写真撮影者・提供者リスト
写真１～３、11、12-２　川部那萌
写真４～10、12-１、13　水谷由美子
写真14　下川まつゑ
写真15　山本成美
写真16　原田裕作

付録Ⅰ（2020）

Blue & Green Art Project 2020
ライブ配信
シンポジウム＆ファッションプレゼンテーション「海と陸の結婚」
日時：2020年10月25日（日）
場所：旧文洋小学校＋東後畑棚田（長門市）
シンポジウムの部
基調講演
　畠山重篤（NPO法人森は海の恋人理事長）
パネラー
　畠山重篤
　小橋賢児（The Human Miracle株式会社代表取締役/クリエイティブディレクター）
　井上雄然（株式会社百姓庵代表取締役）
　坪内千佳（株式会社GHIBLI代表取締役および船団丸代表）
コメンテーター
　安倍昭恵（ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会名誉顧問）
モデレーター
　水谷由美子（山口県立大学国際文化学部教授・学部長）

【挨拶の部】

○**前川剛志　理事長**　皆さん、こんにちは。本フォーラムの理事長を務めています前川と申します。代表して、挨拶を一言申し上げます。

当実行委員会は、2016年から国際文化交流を通じて、地域文化・産業の活性化と、海外ゲストによる日本文化の理解、発信活動をしております。特にファッションデザイン部門では、フィンランド、フランス、中国、韓国及びハワイからゲストを招聘して、山口県立大学の教員、学生とともに、県内各地でワークショップを開催してまいりました。

本年は、国内外における新型コロナ感染症の拡大により、オンラインによるフィンランドのラップランド大学との創造的交流に限定いたしました。

本フォーラムでは、サステナブル服飾デザインに関するワークショップを実施するために、多くの作品を作成してまいりました。また、IT時代にふさわしいバーチャルデザインによる発表も行います。シンポジウム部門では安倍昭恵氏、前内閣総理大臣安倍晋三氏夫人をはじめ、全国から多くのパネラーをお招きしています。里海と里山に関する地域課題の解決に向けた議題が展開されますので、御期待ください。

なお、本フォーラムは、Zoomで世界に発信をいたしております。

最後に、この場をお借りして、公益財団法人東芝国際交流財団をはじめ、御後援いただきました長門市、御支援・御協力をいただきました皆様、御参加くださった皆様方に心から御礼を申し上げます。

ちょっとZoomで世界に発信しておりますので、ちょっと英語の挨拶でいきます。

（英語による挨拶）

○**司会**　前川剛志理事長、ありがとうございました。

続きまして、御来賓であり、山口県立大学企画デザイン研究室との共同研究として、企画運営に携わっていただいております安倍昭恵様より御挨拶を頂きます。

○**安倍昭恵**　皆さん、こんにちは。御紹介を頂きました安倍昭恵でございます。今日は、この文洋小学校にお集まりをいただきました皆様、そして、オンラインで御視聴をいただいている皆様、どうもありがとうございます。

山口県立大学とは、水谷先生と一緒に長い間いろいろな活動をしてまいりました。一番最初は「九美神」というイベントで、先生にお声をかけていただいて、女神をイメージした衣装を作るということだったんですけど、その後、2006年にインドネシアの大統領が来日された際に、私が、その宮中晩餐会で着たドレスを山口県立大学の学生の皆さんに作っていただきました。

そしてその後、私は、2011年の東日本大震災の後に、やはり食が大事だと思って、下関でお米作りを始めました。そして、大変農業に関心を持ち、どうしたら若い人たちがもっと農業に関心を持ってくれるんだろうと思ったときに、大変安易ではあるんですけれども、ファッションを通して農業をもっと広めていきたいと思って、水谷先生に御相談をして、そこから農作業着コレクション、農作業着のファッションショーを毎年、この長門市で開催をしてきました。ラポールゆや、ルネッサながという広い会場で今までは開催をさせていただいておりましたけれども、今年はコロナ禍で、この小さな会場ではありますけれども、旧文洋小学校で開催をすることになりました。

しかし、この隣の、もう私の憧れだった棚田の中でファッションショーができたらいいなという、今回はコスモスの中でのファッションショーができたことは、大変うれしく思っています。

農業をずっと考えてきましたけれども、見ていただいて分かるとおり、油谷町は本当に美しい海に囲まれているので、今回は、農業だけではなくて海と山の両方の環境を考えていきたいなというふうに思って、BLUE&GREEN Art PROJECT 2020ということになりました。

「海と陸の結婚」、今日は畠山さんに来ていただいていて、畠山さんは、「森は海の恋人」で、私たちが恋人を結婚させてしまっていいんだろうかという、ちょっと恐れ多い感じなんですけれども、私たちなりの「森と海の結婚」をテーマにしたプロジェクトを皆さんに楽しんでいただければいいなというふうに思っています。

本当にたくさんの方が、東京、宮城、また神奈川や熊本やいろんなところから、このイベントのために駆けつけていただきました。大変すばらしいお話が聞けると思いますので、この油谷から新しい何かが発信できたらいいなというふうに思っています。

どうぞ最後までお楽しみいただければと思います。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。（拍手）

そして、今日、長門市にも御後援いただいていますけれども、今日は市長はお越しをいただいていないんですが、市長婦人にお越しをいただいているので、ちょっとお立ちいただきたいと思います。江原明子さん、市長婦人でございます。（拍手）

これからもどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○**モデレータ　水谷由美子**　それでは、前川理事長、そして安倍昭恵様、どうも御挨拶ありがとうございました。

それでは、皆様お待ちかねということで、早速始めさせていただきたいと思います。

今日は、「海と陸の結婚」というテーマにさせていただいたんですけども、これはもともと、この後で基調講演をしていただきます畠山重篤様の長年の御活動について昭恵夫人からいろいろお話を聞いて、それはすばらしいことだなということで、それをちょっと線的に結婚まで持っていったということで、これはまだ結婚に至らないんですけども、結婚に憧れた形ということで今日は聞いていただけたらと思います。

それでは、畠山重篤様、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○**畠山重篤**　皆さん、こんにちは。私は、宮城県の気仙沼市というところで、カキの養殖をしている一漁師です。畠山と申します。

今日はデザイン系の方々が企画したこういうイベントだというふうに伺っておりますけども、やっぱり「海と陸の結婚」っていう言葉は、ちょっとデザイン系としては堅いかなと。やっぱり「森は海の恋人」のほうが、何かデザインとして私は優れているんじゃないかと。（笑声）ちょっと思いました。

○**水谷**　すいません、真似てはいけないので。

○**畠山**　森は海の恋人という言葉は、今、小中学校の教科書とか、それから高校１年生の英語の教科書にも

登場しているわけです。それで、森は海の恋人って英訳するとどうなるかっていう大問題があったわけです。英語の先生といろいろ相談しても、なかなかいい訳が生まれないわけです。私の中学の先生で、国語と英語の資格を持っている先生と相談したら、「畠山、それは歌が詠めて英語に精通した方でないとこの訳はできない」と。

じゃあ、どなたかということになって、いきなり話が飛躍しますけども、当時の皇后陛下美智子様に相談してたわけです。そしたら、我が家に宮内庁の女官長室からファクスがトトトトって来たわけです。見たら、「long for」っていう熟語を参考にしたらどうかと。もう泡食って、英語の辞書を見て、long forってどういう意味やって。もちろん好きとか愛しているっていう意味はあるんですけども、第一義的には「お慕い申し上げている」っていう意味なんです。慕っているっていうグレードの高い言葉です。それで、ちょっと待てよと。じゃあ、このlong forってどこから出典しているのかっていうことをいろいろ探してみました。

私は、実は若い頃、キリスト教の教会にちょっと行っていたことがありまして、聖書を少し見ておりました。それで、私の好きな聖書の箇所は、旧約聖書の42編っていうところに、「鹿が谷川の水を慕いあえぐがごとく、我が魂も汝を慕いあえぐなり」っていうところがあるんです。つまり、喉が渇いた鹿が、もう水が飲みたいということで沢に入っていったんです。ところが山がはげ山で、全然その谷に水が来ていないと。鹿は、もう死ぬほど水が飲みたいと。鹿が死ぬほど水が飲みたいっていうのが、実はlong forという言葉だったということです。

それで、その箇所を英語の、私は結婚したとき、牧師から英語の聖書をもらっていたんですけど、そんなの見ても分かりませんから、もう納屋の奥に放り込んでいたわけです。泡食ってそれを引っ張り出して見たら、そこにはこう書いてあるわけです。「As a deer longs for a stream of cool water, so I long for You, Oh God」、long forが２つ出ていますよね。なるほど、そういうことか。つまり、私はカキの養殖をしておりますので、実は森は海の恋人運動は、いいカキを作るためには、海ばっかり見ていたらだめで、そこに注ぐ川の上流のやっぱり森林が大事だということで、山に木を植える活動をずっと続けてきていたわけです。ですから、今回、私たちは恋人だったんですけども、今日、結婚というところまで、何か攻められてしまったわけですけども。（笑声）

でも、東日本大震災で、私たちは本当にもう壊滅的な被害を受けてしまいました。もう遅くなりましたけども、そのときは本当に山口の皆様からも多大なる御支援を頂きましたことを、改めて感謝申し上げます。

それで、ありとあらゆるものが海に流れ込みましたから、海は真っ黒でした。しかも、油タンクもひっくり返って、すごい油が流れて、そこに火がついて火事が起こるとか、もう本当に文字どおり阿鼻叫喚の世界です。私たちの気仙沼だけでも１,000人以上の方が亡くなりましたし、実は、私のおふくろも津波で亡くしました。

見た目の真っ黒な海、それから精神的な色といいますか、どう見てもあの海の色は、今。ここへ来て真っ青な海を見て、比較してもう私は何か泣きたくなりましたけども、どう考えてもこれは生き物が育つ海ではないなと思いました。水産の学者のある方は、これは毒の水だと。毒の水では、海の生き物は育つことはできないから、もう私たち漁師の生活はもうこれで終わりだなというふうに、非常に絶望的に思いました。

しかし、3.11で、３月11日から４月、５月、１ケ月、２ケ月たってきたら、全く海のそばに、生き物が消えてしまったところに、生き物がぱらぱらと増えてきたわけです。うちの孫が、私の家がちょっと高いところにありましたんで、津波の被害から逃れましたけども、海辺で遊んでいた孫たちが、おじいちゃん、海に魚がいるって教えてくれたわけです。それで、海辺に来てみたら、小魚がぱらぱら動いているわけです。ああ、やっと生き物が戻ってきた。

それで、魚がいるっていうことは、いきなり海っていうのは、食物連鎖っていう言葉を御存じかと思いますけど、いきなり海に魚や貝がいるわけじゃないですね。一番最初に植物プランクトンというものが発

生して、それを動物プランクトンが食べて、小魚が食べて、大きな魚が食べるというふうに続くわけですよね。だから、その海にいい植物プランクトンがいるかいないかというのが鍵なわけですよね。

カキも、１個カキは１日200リットル、ドラム缶１本の水を体の中に吸い込んで、水と一緒に植物プランクトンを吸い込んで、カキは餌にして食べているわけです。だから、その海がいいか悪いかっていうのは、生き生きした海か死んだ海かっていうのは、いい植物プランクトンがいるかいないかがキーワードなんです。

私は、今、京都大学とちょっと接点がありまして、東日本大震災の後、京都大学の田中克っていう日本を代表する魚類学の先生が、震災の後の海が、自然がどうなっているかの調査チームをつくったからって、５月の初めに来てくださったわけです。私は、その田中先生に、とにかく植物プランクトンがどうなるか見てくれってお願いしました。どうやって見るかといいますと、植物プランクトンを捕るにはプランクトンネットという目のこまい網の袋のようなものがあって、それを海へドボンと入れて引き上げると、下にガラスのコップがついて、ここにプランクトンが捕れるわけです。それを顕微鏡で田中先生が御覧になってました。

そして、こうおっしゃったわけです。「畠山君、安心してください、カキが食い切れないほどプランクトンがいます」て言うんですよ。もう泣きましたね。うちのおやじの代から始まった仕事で、もう70年近く仕事を続けているわけですけども、もう一度は本当に絶望しかけましたけども、カキが食い切れないぐらいプランクトンがいます、大学の先生って、あんまりこういう表現は使わないわけですよね。確実にプランクトンが増加しているとか何とかっていう言葉は言うわけですよね。でも、やっぱりそういった言葉も今随分使われていまして、寄り添って、カキが食い切れないぐらいプランクトンがいますとおっしゃってくれたわけです。

それでもう、そこに文字どおり希望を見出して、みんなでやる気が起きて、それで海にいかだを浮かべて、カキの養殖作業がスタートしたわけです。

そして、普段だったら大体２年ぐらいかかって、カキって水揚げするまでの時間がかかるんですけども、お正月過ぎたら、うちの長男が、跡取り息子の長男が、おやじ、カキのいかだが沈みそうだって言うわけです。沈みそうだっていうことは、カキが大きくなって重くなってるっていうことだ、じゃあ、ちょっと上げてみようということで、それを上げさせたら、殻はあんまり大きくないんですけど、中身がもうピンポン球みたいに膨らんでいるわけです。カキが食い切れないぐらい餌がいるんですから、太るんです。

それで、広島は津波の被害はないわけです。あの年は、三陸は全部、全滅ですから、カキが品薄になって、広島の連中がもう、値段がもうカキが上がって、一人もうほくそ笑んでいたわけです。そして、東京の築地の魚市場へ電話したら、もうカキが不足しているから、すぐ送ってくれということで、それで仮設みたいなカキ処理場を造って、それでカキをむき始めて。ですから、震災から１年で、水揚げがもう始まったわけです。文字どおり、森と海の結婚ですね、こりゃあ。（笑声）マリッジですよね。

じゃあ、それはなぜかって。田中先生がおっしゃいまして、畠山君、これは森は海の恋人の勝利だなって。私たちは、いいプランクトンを育てるには、海だけ見てたんじゃなくて、そこに流れ込んでいる川の流域の森林が大事だってことを学んでから、ずっと川の、気仙沼に注ぐ二級河川ですけど、そこの川の上流に落葉広葉樹の木を植え続けてきました。そして、落葉広葉樹ですから、葉っぱが毎年秋になると落ちます。腐葉土ができるわけです。この腐葉土、肥料分が含まれているわけです。特に鉄分というのが、そういうことを地道にずっと続けてきた結果、ちゃんとカキが川の流域には人間の生活が横たわっているわけですよね。いかに漁師が木を植えても、川の流域に住んでいる方々が川を汚すような生活をしては、最終的に海はよくならないわけです。

それで、私たちは、そのことにも気がつきまして、平成２年、木を植え始めた翌年から、川の流域の小中学校の子供たちを海に招いて、森と川と海はどうつながっているかということを教える体験学習というものを続けてきたわけです。今年でもう32年になりますけど、もう５万人の子供たちを私たちは海辺に受け入れているわけです。

首相、元夫人ですか、申し訳ないですけど、私たちはそういうことをやるのに行政から……、市長夫人もいらっしゃいますね、金銭的・人的な助成は一切受けないで、全部自腹でやってきているわけです。これが、今日言いたいことなんですけどね。（笑声）自助、公助って、今、新しい首相も言っているわけじゃないですか。つまり、子供たちにそういう教育を開始したら、やっぱり子供たちの気持ちから、そういう気持ちが親にも伝わるわけです。川の流域の学校は農家が多いわけですから、私たちのところに体験学習に来た子供たちは、体験学習に来て作文を書いて寄こしたわけです。どういう作文が届いたかといいますと、私たちは畠山さんのところへ体験学習へ行って、行った次の日から朝シャンで使うシャンプーの量を半分にしましたっていうんです。お父さんには農薬とか除草剤をほんの少しでいいから減らしてくださいとお願いしましたっていうわけです。本質を見極めておりますね。

結局、私たちは、その結果として、あの津波の後ちゃんとプランクトンが増えたわけです。つまりそれは、山にも木を植え続けてきましたけども、子供たちの心に木を植え続けてきたと、これが本質だということです。ですから、もう時間が来ましたけど、私は山口とも、この辺と界隈は接点がありまして、10年ほど前、そこの水産高校に来ていろいろやっているわけです。今日はちょっと時間がありませんので、またいつか機会を見て、じゃあ具体的にどうしたらいいかというふうなレクチャーを教えようかなというふうに思っています。

今日は、結婚までこぎ着けたことを御報告します。（笑声）今日の私の話、ここまでにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。本当に結婚に至っていただいて、ありがとうございます。後で、またパネルのところで、どのようにっていうところ辺は、ぜひ、この場でもお話しいただきたいと思います。ありがとうございました。

それでは、続きまして、山口県長門市油谷、この場所で、油谷島というところで、山と海の関係にこだわって塩を作っていらっしゃいます百姓庵株式会社代表取締役の井上雄然さんにお話をしていただきます。それでは、井上様、お願いいたします。

○**井上雄然**　こんにちは、株式会社百姓庵代表取締役の井上雄然です。

私の会社は、もともと自給自足から始めまして、18年前に今この湯谷町のほうに移住してまいりました。実際に10年前から本当に過疎化が急速に進み始めて、深刻な問題になってきたことに気づきました。実際に棚田がどんどん耕作放棄地になり、漁船もどんどんもう放棄されていくっていう現状を見て、これは、このままいくと１次産業が本当に終わってしまうんじゃないかっていうところから、何かできないかなということで、３年前に法人化いたしまして、今、実際に製塩業を中心に農業そして飲食業という形で事業を行っております。

湯谷町の海を皆さん御存じないかもしれませんけど、こういうとてもきれいな海で、僕は向津具半島の一番先っぽの油谷島というところで塩造り、そして生活をしております。

実際に、僕は塩造りもしたくて、18年前に日本全国周りながら、海岸線を、一番惚れたのがこの油谷湾だったんです。先ほど畠山さんも言われていましたけども、本当に森の栄養が一番集まる場所、実は森の栄養こそが塩造りに非常大切ということで、塩造りをする観点からこの場所を選びました。実際に今塩造りは、こういう形で行っています。

ただ、実は、御存じの方もいるかと思いますが、この４月にうちの塩の工房のほうが火災に遭ってしまい、全焼してしまうという、3.11に比べれば大したことはないんですけど、全焼して、実は10月20日、つい５日前に、やっと釜の工房のほうが復活し、やっと再開したところであります。それも皆さん、本当に一応いろんな形で御声援頂いたり、クラウドファンディングなどで御支援していただいて、本当にもう何とか復活を遂げることができました。まだ塩田のほうは、今まだ建築中でありまして、完全にはできていませんが、もう少しで完成する予定となっています。

塩造りをやっていますので、やっぱり海のことを何かしないといけないということで、約10年ぐらいビーチクリーンの活動をやってまいりました。そしてさらに、やっぱり、先ほど畠山さんも言われていま

したけど、森っていうのもとっても大切なので、森の清掃活動という形で、実は植林されていてそのまま放棄されている森ってたくさんあるんです。なので、そういう中に入って、少しでも間伐したりきれいにしてあげて、より分解を速めてあげるということをして、そこで出た薪を使って子供たちに森の中で塩造りを教えたり、そういったことをやってまいりました。

あと、うちはやっぱり百姓なので、農業にも力を入れています。今はトマト栽培を中心に、米そして野菜を数十種類育てています。当然、野菜を作っていますので、それを売っていこうということで、キッチンカーなどでトマトジュースを販売したり、あと、地元の山口県では有名な秋川牧園さんっていう牛乳屋さんがあるんですけど、こちらの牛乳を一緒にコラボして開発した塩ソフトクリームというのを販売したりしています。

あとこちらは、昨年７月に地元の銀行である山口銀行さんと、山口銀行の油谷支店さんを一緒にリニューアルして、うちの飲食店、スペイン料理を出すDiningbar Zenというお店をオープンさせました。これが画期的で、銀行の営業中にお酒が飲めるという、世界にここしかないんではないかなという、そういったお店となっていますので、ぜひお越しください。

あと、やっぱり僕としては過疎化の問題をどうにかしたい。そのためには１次産業が活性化しない限りは、もう本当に衰退していくと思うんです。そこで、やっぱり１次産業を、ただ１次産業やっても、もう難しい時代に入っています。なので、やっぱり２次、３次含めて６次化していくことがまず必須なのかなと。でも、ただ６次化だけでもなかなか難しいっていうことも、最近は気づいてまいりまして、さらにもっと人も増やさないと、もっと事業も増やしていかないと回っていかないなというところで、100人集めて100個事業を立ち上げていきたいなと、今は思っています。そこで、本当に雇用が生まれて、この地域に根づく人たちが増え、子供が増え、またこういう廃校っていう問題も少しは解決していくのかなということを考えながら、一つずつ事業を今増やしているところです。

実際に今月、１人また入りまして、来月１人スタッフが入って、それによってちょっと手が余るので、放牧を棚田で今、本当耕作放棄地とか増えています。そういった形の場所を少しは豚で放牧して、また野菜が育つ、また果樹が育つ、そういったところにしたいと思います。

もう一つやろうとしているのはオリーブ、そういったところをまたオリーブを作って、油を取れるっていう新しい事業をしていこうとしている、そういった形の事業をやっておる会社です。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、続きまして、坪内知佳様にお話をしていただきます。

坪内さんは、株式会社GHIBLIの代表取締役であるとともに、萩大島船団丸の代表もしておられます。それでは、よろしくお願いいたします。

○**坪内知佳**　私は、長門市のお隣の萩市で、事業を行っております。萩の大島という離島があるんですけれども、萩大島から船、海に関わる皆さんを一つの「丸」に、何かできるようなビジネスをしたいという想いから、漁師たちと一緒に約10年前に起業しまして、現在は、株式会社ＧＨＩＢＬＩという法人名になっているんですが、屋号は、現在、萩では、萩大島船団丸という屋号でビジネスをやっています。他にも全国６産地に横展開をしております。基本的にはお魚の６次産業化なのですが、私たちも先ほど話された皆さんと同じように、やはりただ獲るだけで消費するばっかりの水産ではだめだよねっていうことで、もちろん海の清掃活動だったりとか、ごみ拾ったりとかということをしております。私たち旋網（まきあみ）という網で漁を行う、アジ、サバをおかっけるような船団を、主に萩大島船団丸ではメンバーとして迎え入れておりますが、みんなで、漁業者が獲らなきゃ損な水産ではなくて、海を守りながら、海を大切にしながら漁業に取り組んでいける、資源管理や海洋環境保全ができる、何かそういうビジネスモデルを展開していきたいねっていうことで、10年前から活動を始めて、2014年以降法人なりをしましたので、2014年以降山口県から高知、鹿児島、北海道、千葉県と、このビジネスモデルを横展開をしています。

その事業の中身なんですが、山口県萩大島が水産と農業と１次産業しかない離島です。井上さんのい

らっしゃる長門と同じように、お隣なので、本当に10年前、顕著にもう本当に過疎化がひどいなと思う様になりました。ここで何もしなかったら、本当に私たちのふるさと、みんなの生まれ故郷、なくなっちゃうことはないかもしれませんが、消滅可能性都市という言葉がありました。このままでは経済的にちょっとまずいよねというような状況から、漁業者とみんなで、じゃあ何をする？　一匹のお魚の命に対する価値をどうしたらいいのか、成功したければ、かじをとれではなくて、ペンをとれっていうような時代がもう来てしまっている。でも、漁師ってやっぱり海に生きる、海を大事にして、漁師という仕事にプライドを持って海を大切にして生きていってもらいたいですし、みんなもそうしたいと願っている。これを、どうしたら叶うのか、どうしたら全国から人が来たいような場所にできて、盛り上げていけるのかを考え、アイディアを事業化しました。今の衰退しゆく流れの逆行ができるのかというところで、当時60人、旋網の漁師たちが集まって、一匹の魚の命の価値をどうしたら最大限上げて、漁獲が落ちていく中で、漁獲が４分の１に減るんだったら、お魚の値段を４倍にどう上げられるんだろうかというようなことを考えました。農業の皆さんというのは、１ヘクタールに対して何キロの種を植えて、何トンの集荷をするという数字を伴うビジネスをされているかなと思うんですが、水産というのは、当時現場にいた漁師さんたちの話を聞くと、水産は運と根と勘なんだと、運と根性と勘があればオーケーで、獲れればラッキー、獲れてもお酒を飲んで喜んで、捕れなくてもお酒を飲んで憂さ晴らしするみたいな、何かそんな漁業者ばっかりの世の中ではいいふうにならないですよね。

水産も同じように、１匹の単価が、自分たちで売り先を持てば、例えばこれが１尾、キロ幾らつく、どれだけ出荷すれば幾らになってというふうになっていく。出漁も、どれだけお客様に必要とされているお魚を出して、この日は、お客様がお店お休みだから、あまり売れないから、たくさん捕らずに魚を残して帰ってこようと。今までだと、隣の船が獲っちゃうから、隣の県に泳いで行っちゃうから、潮の流れは流れていってしまうから、だから、獲らなきゃ損ってやってきた漁師たちが、全国隣県とも話をして、資源管理に本当に具体的に、根本的に取り組んでいく、小さな一歩ずつをみんなで重ねていける、何かそんな活動がしたいよねというところを創業期からずっとめざしています。こんな立派なアジが水揚げされていたにもかかわらず、世界中で魚食文化の広まりや、海洋環境の汚染、破壊などによって、本当にちっちゃな小アジしか捕れないような状況になってしまっています。こういったいいお魚をずっと捕っていけるように、資源管理を伴う販売に取り組むということを目指している事業を今やっています。通常だとたくさんの市場を経営するんですが、私たちは直販で、どういう形でどういうふうな形状でお魚を納品してもらいたい、いつ持ってきてもらいたいというようなことを、シェフと獲っている漁師とが、何月何日の何時頃にしめたお魚を送りますねって、お魚を熟成して、お魚って、賞味期限、消費期限が短いものではなくて、１か月先までも熟成させて、お魚のハムが作れるとか、そういうフードロスなんかもなくしていくような取組を今やっています。

全国に少しずつ展開をして、魚をもちろん食べていただくことも目的としていますし、おいしいお魚を出していく。それから、お魚をとっている現場だったりとか、島の暮らしってどんなの、海での暮らしってどんなのっていうことを皆さんに、都会の皆さんに来ていただいて、見ていただいて知っていただくスタディツアーの取組であったり。それから、コロナ禍後には漁師民宿の経営なんかもやりながら、これをまた全国にどんどん広めていきたいなというふうに思って今やっています。

それから、お魚だけではなくて、真珠も海のミネラルを吸う水産物です。日本の水産物というところで、無調整のパールばかりを扱い、かつ日本の和玉に特化したパールの事業なんかも今三重県とか愛媛県なんかでやっていますということで、私の話は一旦ここまでにします。ありがとうございます。

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、小橋賢児さんです。小橋さんは、世界、国内外で非常にビッグなイベントの活動をされる中、水資源というものを大切に考えて、いろんな活動をされていると伺っております。それでは、よろしくお願いいたします。

○**小橋賢児**　どうもはじめまして、小橋賢児です。今日、ここにいらっしゃる登壇者の方とはちょっと、か

なり毛色が違って、皆さんの中ではちょっとなじみがない人もいると思うんですけど、簡単に御挨拶をさせていただきます。

もともと僕は８歳から27歳まで……、あ、出ちゃいましたね。

○**水谷**　すいません、ちょっと手が動いてしまいました。（笑声）

○**小橋**　27歳まで俳優の仕事をしていまして、分かりやすいところでいいますと、「ちゅらさん」っていう朝ドラの、沖縄でやっていた、国仲涼子さんという主演のエリーの旦那役もやっていました。27歳で休業して、世界中回って、世界中いろいろ回っていく中で、いろいろイベントに出会っていって、イベントって様々な境遇の人が集まって、そこで気づきを得ました。新たな自分の人生の第一歩を踏めるきっかけになるなと思って、日本に帰って様々なイベントを始めました。代表的なところでは、音楽のフェスティバルで、ULTRA JAPANっていう、マイアミからダンスミュージックのフェスティバルを日本に持ってきたり、最近では、伝統の花火とテクノロジーを組み合わせて、ショーパフォーマンスみたいなエンターテイメント花火にしまして、日本で３回、そして、シンガポールの国のカウントダウン、そして、昨年はサウジアラビアの建国記念日でやらせていただきました。その後、東京モーターショーの中で、昨年ドローンショー、500機のドローンを用いたドローンショーをさせて頂きました。本来、今年は東京オリンピックがあればですけども、東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムのディレクターもさせていただく予定でした。

ちょっと会社の映像もあるので、映像を交えながらなんですけども、なぜ今日ここにいるかといいますと、全然ちょっとエンターテイメントと関係ないところになると思うんですけど、本来僕らエンターテイメントをつくる上では、やっぱりいろんなインプットが必要なんです。それで、僕のインプットというのは、わりと世界中を回っていろんなものを見ていって、その中で、もちろん自然とかいろんなものを自分の中でインプットした上でアウトプットをするっていうことをやっていたんです。今回、コロナという状況で、イベントとかもストップしながら、やっぱりいろいろ海外に行くことがなくなったんです。その中で、わりと日本に目を向くことに、強制的になった上で、日本の自然の魅力というのにこの数か月、本当に取りつかれていって、その中で日本の魅力、自然の魅力があるとともに、いろいろ問題点というのに突き当たりました。その中でやるべきことみたいなことが結構見つかっていって、そういう話をちょっと昭恵さんとしていたら、今日何かちょっと来てみないっていう、ひょんな縁から、逆に気づいたら登壇することになったっていう。（笑声）僕もちょっと今日驚いているんですけど。

ちょっとすいません、話が長くなったんですけど、ちょっと会社の紹介をさせていただきます。じゃあ、映像をお願いします。会社名はHuman Miracleという、本当に人々が今日一日の中で起こした奇跡に気づいて、明日人類が起こせる奇跡を信じて、本当に人それぞれ、全ての人たちが自分の人生を創るクリエーターとなってほしいという願いから、みんな一人一人が本当ミラクルだよっていう、そういう思いでこの会社をやっています。先ほどお伝えしましたけども、体験型エンターテイメントとしましては、STAR ISLANDといいまして、伝統の花火とテクノロジー、３Ｄサウンドやパフォーマンスを合わせたショーエンターテイメントを、お台場と豊洲、そしてサウジアラビア、そしてシンガポールで開催しました。

これが、先ほどの音楽フェスティバルです。これは、もう卒業したんですけど、３日間で12万人ほど集まるイベントになりました。これは、フランスから持ち込んだ白い服を着て、一斉に集まってディナーをするというイベントだったり、そのほかいろいろファッションや、いろいろ企業のＰＲイベントなんかもプロデュース、演出しております。

そして、子供のキッズパーク、屋内ですけども、キッズパークとかもプロデュースしておりまして、さらにはアニメの映画のプロモーションとか、企画運営も含めてやらせていただいています。

そして、最近なんですけど、完全にノンアルコールオンリーのバー、ノンアルコールオンリーとビーガンのバーをプロデュースさせていただいています。これは先ほど言った昨年、500機のドローンにLEDをつけて用いて、空に弧を描くというショーを東京モーターショーの中でやらせていただきました。

今、ちょっとごめんなさい、こういう映像とは異なるんですけども、先ほどの話に戻らせていただきま

すと、本来今年はコロナがなければ、本当にもうイベントイヤーというほど、本当にとにかくイベントが詰まっていたんですけど、全部中止になって、そのおかげと言ったらちょっと不謹慎ですけども、日本国内をいろいろ回っていく中で、本当に日本の魅力に気づいていったと。

一つ、屋久島に行ったときのお話をさせていただきたいんですけども、屋久島に行ったときに、縄文杉を20年ぐらいガイドしているガイドさんに出会って、その方のワークショップを受けたときに、まさに森から海までつなぐというお話をしていただいたときに、自然との共生の意味ということ学びました。

その屋久島のガイドさんは、もともと縄文杉に20年行っている間に、あるときに縄文杉のところで寝たんです。そしたら、夜、ポタッポタッと遠くのほうで聞こえる水のしずくの音が聞こえたんです。そのときに、水のしずくの元を確認しに行ったときに、それが土に伝わって、そしてそこで全てが、全部つながっていることを、自分の体験の中で可視化された。ああ、この小さな一滴の水が、ずっと何万年も伝っている水がこの根っこに伝わって、そしてこの大きな縄文杉をつくっているんだと。そして、その水が地面を伝って、ずっとそこに、川に流れていって、その川から森、そして里、そして海につながっている。そしてまた海から空に上がっていって、雨を降らしてっていう、その循環っていうのを分かったときに、そこから山の探索を始めていった。山の中にはいろいろ森があるんですけど、その中で竹藪みたいになって、ヤブカがいっぱいいるようなところをいっぱい発見したんです。

もちろん、普通に竹藪っていうと、僕らは自然だと思うじゃないですか。でも、これ実は自然じゃないっていうことを発見したんです。なぜかというと、その竹藪の上流のほうに行くと、必ず分断、その水脈が分断されているところがあったと。それは、家が建っていたり、道路があったり、そのことによって水の水脈が止まっていることによって、そこで人口的に竹藪ができているということを発見したときに、そこに水脈を通してあげようという活動をしていったんです。つまり、水脈っていうのは、見える水脈もあれば、見えない水脈もあるんですけども、その水脈を通してやってあげたときに、その上には風が流れるということを発見したんです。水が流れるところには風が流れる、そうすると、自然の木っていうのはちゃんときれいに連なっていくということを発見したときに、ああ、風水っていう意味っていうのは、まさに風に水と書きますけども、ああ、ちゃんと水が流れていくところに風が流れ、そうすると木々がちゃんときれいに育ち、そして、その先に海に流れていって、先ほどおっしゃっているように、ちゃんと自然の生態系、いろいろ植物も含めて、水が流れて循環していくんだっていう、本当の意味での自然との共生、循環っていうものをその人は悟ったんです。

僕はそのときに、一緒に森の中に入っていって、水脈をつくるっていうワークショップを受けさせてもらったときにはじめて、僕らは自然とともにとか自然と暮らすとか、自然の近くにいればいいんだぐらいに思っていたことが、本当の循環というのは、こうやってちゃんと水脈をつくって循環させなければ共生、自然との循環っていうこと言えないんだっていうことを知った。僕らの周りに結構、クリエーターだったりいろんな人たちが村づくりしたりとか、キャンプ場造ったり、ホテル造ったりしている人がいて、そういう人と話していく中で、今までちょっと分断されていた、ある意味で水脈が分断されている、そのことはエネルギーが分断されることと同じで、それをどうしたらいいかなど考えたりしています。

僕らの体もそうですけど、水脈っていうか、エネルギーが停滞しているとか、どこかが調子悪いと必ず体のどこかに不調を来すと思うんです。やっぱり日本全国いろんなところの水脈とか水源が分断されているところがあると。そこをやっぱりこれからちゃんと直していく、修正していかないと、土砂崩れとか川の氾濫とかっていうのは、やっぱりこういう意味では人災だと思うんです。そこを直していく上には、ちょっとずつとかってやりながら。でも、やっぱり僕らの世代が次やっていかなきゃいけないのは、そうやってちょっと失われてしまった、あるいは停滞してしまった水源、水脈っていうのをちゃんと海に流していくっていう活動を、あんまり反対運動とかっていうことではない、表向きはちゃんと正当な、まっとうな理由の中でそういうことをやっていきたいなと思ったときに、どうすればいいかと思ったら、裏プロジェクトとして、僕らは「聖地」を創っていけばいいんだっていうふうに思って。ああ、そういえば聖地って、神社も含めて地域の人たちが守ったりとかしながら、荒らされないでずっとある姿っていうのが

聖地なんだというところに行き着いて、これからそういうまちづくりとか村づくりをしながら、聖地をつくっていきたいなというところに今たどり着いていると。

そんなお話をしていたところで、今日お呼びいただいたという感じで。すいません、ちょっと長くなったんですけども、御挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　俳優をされていて、今、そうやってして地域づくりに関わっていらっしゃって、今後が楽しみでございます。ありがとうございました。

それでは、今日はほとんど安倍昭恵様とおつながりのある登壇者が来ていただいておりますので、コメントをよろしくお願いいたします。

○**安倍**　本当に今日はありがとうございました。私は、長門油谷で生まれ育っているわけではないんですけれども、安倍家のルーツというか、安倍の父が生まれ育ったこの油谷町が本当に大好きで、いつかこの地に住みたいなっていうふうに。私の夢は、この油谷の中を馬で百姓庵まで遊びにいったりするのが将来の夢なんですけれども、今お話を伺っていて、それぞれもう本当にすばらしいお話だったと思いますけれども、こういう環境問題のシンポジウムっていうと、そういう環境の専門家であったりとか、その道で何か非常にプロフェッショナルな方が集まって、環境問題を語るっていうことが多いと思うんですけれども、これからは、私はそれだけではやっぱり人が集まらないんだろうな、みんなが関心を持ってくれないんだろうな、いろんなお仕事の人たちが、やはり自分たちのその仕事の中から環境を考えていて、それで何が自分たちでできるかっていう、何かそういう形でいろんな人が交わるような場をつくっていきたいなと。それぞれの得意分野ってあると思うんですけれども、自分の得意分野がきちんと生かされるような社会づくりをしていきたいというか、なったらいいなというのが私の今思っていることで。私は、本当に自分のプロフェッショナルが何もないんですけれども、人をつないでいくことが私の一つの仕事だというふうに思っていて、それを今のこのイベントだと、形にしてくれるのが水谷先生なんです。みんながそれぞれ自分の分野をきちんと持って、それを生かしていく。全然違う、畠山さんと小橋さんのように見えるけれども、でも、多分すごくつながっているところがあって、これから何かしらエンターテイメントが環境分野で生かされていくこともあると思いますし、そこのコラボレーションというのは、縄文時代に戻ればいいということではなくて、縄文時代、すごい私は憧れていますが、今は現代なので、何か環境問題や昔からある大事なことを守りながら、新しいテクノロジーをそこに入れていく、新しいまちづくりをしていくというのがこれからなんじゃないかなというのを、改めて皆さんのお話を聞きながら、これから油谷でどんな面白いことができるだろうなというのを考えていました。ちょっとまとまりがなくてすいません。

○**水谷**　ありがとうございました。本当にすばらしい皆さんに来ていただいて、非常に短いミニシンポジウムで、御紹介だけに終わりそうなんですけれども、畠山さんに、先ほど何か方法について、ちょっと追加でお時間お願いしたいと思います。３分ぐらいでお願いします。

○**畠山**　水産高校に阿部先生っていう方がいて、熱心な方で、具体的にね。

それで、やっぱり日本海側は磯焼けっていって、海藻が、海が生えなくなってきているわけですよね。その原因は何かっていうこと、いろいろ追求しているうちに、宇部に杉本さんっていう農家の方なんですけど、化学に物すごい強い方と、私はつまり13年前に出会ったわけです。それで繁盛している鮨屋の側溝は、夏になっても臭くないんだけども、暇な鮨屋の側溝は、夏になると何か臭いと。普通は、繁盛している寿司屋はいっぱい魚を切って流すから、そっちのほうが臭いはずなんですけど、暇な鮨屋のほうの排水溝が臭いと。それは、包丁を研がないせいだと、暇だと。忙しい鮨屋は包丁を研がなきゃいけない。それは、鉄がバクテリアの活性に関係しているということに気がついて、宇部のいろんな汚い川に鉄片をいろいろ入れてみたら、意外ときれいになると。そういうことから、炭と鉄を一緒にすると鉄が溶けやすくなると。それを粘土で固めて日に干したもの、鉄炭団子っていってるんですけど、それをぽんぽんと置くということで、実は環境がきれいになってくるということと、海藻とか海のこういうものが生えてくるというふうなことに気がついて、それを水産高校のアベ先生が取り上げて、それで海でそういう実験を水産高校の生徒たちがやったら、そこに海藻が生えてきたと。

つまり、食物連鎖って、植物プランクトンと海藻が生えないことには話にならないわけですから、それを生やすにはどうしたらいいかっていうことを考えればいいということなんです。

だから、それを夢を持たせるのに、仙崎湾に鯨を呼ぼうというような話まで、実はいろいろあったんです。だから、もちろん水産大学校もあるし、水産関係のプロフェッショナルがいらっしゃるわけですので、これからちょっといろいろ相談し合って、私たちの知っている知識もちょっと提供いたしますんで、やっぱり水産の山口をもう一回、やっぱり復活させるような、そういうことで塩造っている方とか、あるいは農業の方も、魚を捕っている方も一緒にやれば、実は面白いことがいろいろ湧いてくるだろうと。

私たちは、気仙沼湾も、だから山に木を植え続けてきて、震災から10年たって、８割方の漁師は海に戻って、何とか今生活をしているということですので、私はいけると思いますね。

それから、元首相にも言いたいことはいろいろありますけど、（笑声）それはまた後で、内緒でこっそり。

○**水谷**　ありがとうございます。今、今回のテーマで、森は海の恋人のは畠山さんのNPOですけど、我々は海と陸の結婚で、これは今SDGsの、国連の提唱しているもので、海の豊かさを守る、陸の豊かさを守るという、そういったことに参画しながら我々も盛り上がっていこうということだったんですけども、今日、本当に畠山さんがおっしゃっていただいたように、今日ここに、昭恵さんのそういった思惑もありながら集まったんですけど、これから一緒に何か、今日がスタートで、この出会いからやっていっていただくと大変いいなと思います。

本当に時間が、最初ちょっと遅れたせいで、迫ってきているわけなんですけれども、もう一言ずつ、今日の皆さんの話を聞いて思われることを、向こうから順番に、小橋さんのほうからお願いいたします。

○**小橋**　今日はありがとうございました。本当に今日、畠山さんとか皆さんのお話を聞いて、何か本当に世代を超えて、多分これから僕らが向かっていかなきゃいけないテーマなんだなというのを感じました。多分、きっと自然界がそうしなさいって言っているんだと思ったんで、僕も、ある意味昭恵さんが言っていただいていましたけど、そういう自然環境も含め、そういうことをエンターテイメントとつないで、多くの人に伝えていきたいなと思いました。

○**水谷**　ありがとうございます。（拍手）

○**畠山**　じゃあ、一言、私たちの森は海の恋人運動は、かなり前ですけども、グッドデザイン賞を受けたわけです。見る人はちゃんと見ていて、森から海までのこの系をデザインだと見ているわけです。

ですから、東日本大震災のとき、全国の方々から支援をたくさん頂きましたけど、最大の支援先は……、何だったっけ、ルイ・ヴィトンです。ルイ・ヴィトンは、森から海までのこれを、生態を守っていることをデザインだって見てくれたわけです、価値があると。

だから、山口もこれを、陸から海までデザインですよ、これ、文字どおり。どうつくるか、これだけのやっぱり伝統のある国ですから、散々なこともしてきているわけですけど、（笑声）ぜひ取り戻してください、本当に。

○**水谷**　ありがとうございます。（拍手）今日は、地元の人もいらっしゃいますので、非常に励まされたんじゃないかと思います。ありがとうございます。

それでは、井上さん、お願いします。

○**井上**　今日はありがとうございました。僕は何か、今日こうやって皆さんとお会いして、また改めて思ったのが、やっぱり僕は塩造りということを通じて、環境問題を訴えているというか、もともと環境問題から行き着いたのが塩に行ったんですけど、塩っていうのが、結局は全ての生活のごみだとか、そういったものは全て海に集まります。その海に集まったものをまた僕が塩にして、皆さんの元に返す役割なんです。なので、僕はやっぱり皆さんが食べたくなる海を、僕たちはやっぱり海が体液なので、体液の素となっています。なので、そこを常に伝えていくっていう活動をさらにやっぱり次の世代にも伝えていくことをどんどんしていきたいなと思いました。今日は、もう畠山さんに会えただけで、もう本当に光栄です。ありがとうございました。

○**水谷**　ありがとうございました。（拍手）井上雄然さんと（カミ）さんですね、奥様と一緒にビーチクリーンの御指導を頂いて、私たちもそういうところからインフルを受けて、この後行われるファッションショーにもいろんな表現をさせていただいています。

それでは、福井のほうで今待機していただいています坪内知佳さん、お願いいたします。

○**坪内**　今日、私、コロナ禍で会場に行けていませんけれど、でも、このコロナ禍とか、コロナの問題、それから環境問題というのも、やはりそこに住む人間だとか地球の抵抗力、免疫力の低下だったりそういう生命力の低下、地球が限界だよっていうふうに、私はすごく感じるんですが、先ほど昭恵さんの話にもあったように、せっかく何かみんなが、今日こうやって、私オンラインでの登壇ですけど、登壇させていただいたり、会場で御興味持たれて皆さん集まられていると思うので、ビジネスだったりちょっとした洗剤一個だったり、皆さんの暮らしを通して環境がよくなることってたくさんあります。今日は、御縁はここで終わらずに、一緒に登壇させていただいたこの皆さんでも、何かみんなで商品を開発したり、事業をつくったり、またそれを消費していただいたり、御理解いただいたりというところで、地球が変わっていってくれたらいいなというふうに思います。今日はありがとうございます。

（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。（拍手）

それでは、安倍昭恵さん、最後にお一言。

○**安倍**　時間がないので。私が今着ているのは、ペットボトルの再生した糸から作っている生地でワンピースを作ってもらったんですけれども、何か環境って、いろんなところから切り口はたくさんあると思うので、楽しくこれからもいろんな方を私はつないでいって、本当にこのプログラムの挨拶にも書かせていただきましたけど、今、私たちが意識変えないと、地球は終わってしまうんじゃないかという、何かその正念場なんじゃないかなって私は思っているので、本当に一人一人の意識を変えていけるように、みんなで少しずつ何か実際に行動に移していけたらいいなというふうに思います。

今もお話ありましたように、今日が終わりではなくて、ここからもう、畠山さん、多分これから何度も長門に入っていただけるんじゃないかなっていうふうに期待をしているので、また皆さんでいろいろ取り組んでいけたらいいと思います。今日は本当にありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。それでは、本当に短い短いシンポジウムでございましたけれども、何かいろんなきっかけを頂けて、そして、これから皆さんでつながって、またこの油谷とともに新しいことができるんじゃないかなという希望の光が見えたというところで、終わらせていただきたいと思います。

それでは、本日御登壇いただきました畠山重篤様、小橋賢児様、井上雄然様、坪内知佳様、そして、コメンテーターの安倍昭恵様に温かい拍手をお願いいたします。（拍手）

付録Ⅱ（2021-1）

Blue & Green Art Project 2021　Ｖ０l. I

シンポジウム＆山歩き「自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする ～ 日本の和ハーブ、長門の和ハーブ ～］

日程：2021年４月18日（日）　13時～17時（講演会と山歩き）

場所：旧文洋小学校および油谷の山

講師　平川 美鶴（一般社団法人和ハーブ協会副理事長）　「和ハーブの基礎知識」

　　古谷 暢基（一般社団法人和ハーブ協会 理事長）　「和ハーブと地域創生」

コメンテーター 安倍 昭恵（ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会名誉顧問）

モデレータ　水谷 由美子　（山口県立大学国際文化学部長

　　ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会委員長）

【挨拶の部】

○**水谷**　皆さん、こんにちは。本日はBLUE & GREEN ART PROJECT 2021のVOL. I として開催させていただきます。テーマは、「自然を知り生かし豊かな暮らしをデザインする　日本の和ハーブ・長門の和ハーブ」と題しまして、シンポジウムを開催させていただきます。

　それでは、早速ですけれども、本日この企画を共同でいたしましたブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会の名誉顧問でいらっしゃいます安倍昭恵さんのほうから趣旨等、御挨拶させていただきます。よろしくお願いいたします。

○**安倍昭恵　前内閣総理大臣安倍晋三夫人**　皆さん、こんにちは。今日は古谷さんと平川さんを東京からお招きをして和ハーブの勉強会を開催するに当たりまして、皆さんお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

　特に長門はコロナの感染者がちょっと増えたということで大変お忙しい中、市長御夫妻にも御出席を賜りましたこと、ありがとうございます。

　水谷先生と私は、もう長年いろいろな企画をやってまいりましたけれども、昨年からBLUE & GREEN ART PROJECTというのを始めることになりました。この自然豊かな山と海に囲まれた長門市、油谷町、もっと多くの魅力がたくさんあるのではないか、この環境を大切に守りながら長門の魅力をもっともっと多くの方々に知っていただくためにいろいろなプロジェクトをこれからも開催をしていきたいと思います。

　わりと最近出会ったんですけれども、和ハーブの古谷さんのお話は本当におもしろいですし、この長門市にはたくさんの宝の山がきっと眠っていると思いますので、皆さんと一緒にその宝を今回探していかれたらいいなというふうに思っています。このシンポジウムの後に山歩きもありますので、実際どんなものがあるか、皆さんと一緒に探していきたいと思います。今日はどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

　それでは、本日、御来賓としてお招きしております江原達也長門市長に一言、エールをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○**江原達也　長門市長**　今御紹介に預かりました御来賓の（笑声）、御来賓ということなんですが、私もこの実行委員会の理事を仰せつかっておりまして、一緒にしっかりとやっていきたいなというふうに思っているところでございます。今、安倍昭恵さんのほうからお話がありましたように、この実行委員会は本当に去年、里海と里山ののどかさをつないで、そして発展、展開していくということを目的につくられているということで、本当に大変すばらしい趣旨だというふうに私も思っております。

　そして、今日、このシンポジウムが今年度の第１回目ということで、これも長門、それもこの油谷で開いていただけるということで、本当に市長としても大変ありがたいというふうに思っているところでございます。

本当に、今日、テーマが日本の和ハーブ、長門の和ハーブということなんですけれども、この会場の裏手にも日本の棚田百選に選ばれております東後畑の棚田がすごいきれいな風景が広がっているんですが、その一角で、ここにいらっしゃいます和田あいこさんをはじめ地元の方々が本当に和ハーブ、ハーブを幾種類ものものをしっかりと今育てていらっしゃいます。本当に今、市内でいろんなところでそのハーブが使われているんです。ぜひお話ししたいというのは、最近、このクラフトジンという本当に「青舞」、「青い」に「舞う」と書いて青舞という銘柄なんですけれども、ぜひこれを今、アマゾンとか楽天、そしてヤフーネットショッピングとかでお買い求めできます。少しお高いんですが、本当に香り豊かでおいしいジンが本当に味わえますので、ぜひお買い求めいただき、昭恵さんにはぜひブースに１本置いていただければというふうに思っているところでございます。本当に地元の方々が丹精込めて作っているハーブでございます。ぜひよろしくお願いします。

今日は、この後、和ハーブ協会の古谷理事長をはじめ平川副理事長も、今、昭恵さんから大変楽しい話というふうにもお話あったんですが、本当に楽しみにしてまいっているところでございます。ぜひ今日はよろしくお願いします。

そして、最後に、一応来賓ということでございますので、最後にこのブルー＆グリーンの実行委員会のますますの御発展と、ここにいらっしゃる皆様の健康と御多幸を祈念いたしまして私の挨拶とします。どうも今日はよろしくお願いします。（拍手）

○**水谷**　どうも江原市長、ありがとうございました。

それでは、いよいよ内容に入っていきたいと思います。

本日のタイトルは「自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする ～ 日本の和ハーブ、長門の和ハーブ ～］です。シンポジウムというか講演会というか、形式はフレキシブルなんですけれども、古谷暢基一般社団法人和ハーブ協会理事長、そして平川美鶴和ハーブ協会副理事長のお２人にまずお話をしていただきまして、その後、コメンテーターとして安倍昭恵さんに入っていただき、私はモデレーターを進めさせていただきたいと思っております。名前を言うのを忘れましたけれども、私は山口県立大学の国際文化学部長をしておりまして、かつ、このブルー＆グリーンアートプロジェクトの実行委員長をさせていただいております水谷由美子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

すいません、今日は長門市が選挙だということなんで、選挙モードな感じでごめんなさい。（笑声）原稿が来ておりませんので。（笑声）

それでは、早速なんですけれども、最初に和ハーブの基礎知識ということで、まずは平川美鶴様のほうからお話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○**平川美鶴　和ハーブ協会副理事長**　よろしくお願いいたします。（拍手）

ここから、30分程度お時間を頂戴しております。改めまして一般社団法人和ハーブ協会副理事長の平川と申します。本日はよろしくお願いいたします。

私は昨日、山口のほうに入らせていただきました。今回で２回目になります。前回は萩とか秋吉台のほうに初めて伺って、何と自然の宝庫なんだろうと思ったんですが、今回、この長門、この油谷というエリアに越させていただいて、ぱっと見たときに手つかずの自然の形が残っているなということと、ブルーのきれいな海とこの山の距離の近さというところにも、何かわくわくするものを感じて、この後の散策も非常に楽しみにしています。私からは和ハーブというものがどんなものなのかという基礎のお話と、私どもの団体が今どういう活動をしているのかを簡単に御紹介していきたいと思います。よろしくお願いします。

（以下、スライドを見ながらの説明）

ちょうど10年ほど前に沖縄の薬草文化を学ぼうという、体験ツアーが和ハーブ協会主催であり、私も当時そこに参加しました。この左手にいるおばあが、ちゃっちゃっちゃっとその土地の薬草、ハーブを使ってお料理をしてくれる。これは全て島の素材であるということで、そこだけでもびっくりしたんですが、例えばこの岩場に生えている葉っぱ、その名前が「ン」から始まる「ンジャナバー」という野草、どうやって発音するんだということですけど、これはニガナというふうにも言いまして、苦い葉っぱ、これは、

土地では胃腸薬として使われている伝統的な野草、ハーブであります。

そのほか、サクナと呼んでいる草がありました。これは、標準和名でいうとボタンボウフウといいます。これも大変貴重で、今は護岸工事などが進んでいてどんどん数が減っているんですが、海辺の和ハーブです。

こういったものを土地のおばあが当たり前のように使ってきた。けれども、若い人はどんどんこの知恵を忘れていっているよということを10年ちょっと前、おばあからじきじきに聞いたときに、なるほど、私はこういったものも全て知らずに生きてきてしまったけれども、その土地その土地に必要な植物、有用とされる植物がたくさんあるんだということにふと目が開きまして、もっとこれをしっかり自分で学んで、それをまた多くの人と共有していかなければ、この文化は途絶えてしまうなということに気づいたんですね。当時は和ハーブ協会が立ち上がってすぐの頃だったんですが、ぜひ私もそこで学びながら活動していきたいなというふうに思いました。

その流れで、ちょうど６年前の今頃なんですが、この『８つの和ハーブ物語』という書籍を執筆させていただきました。この中で、土地に生えている植物とそこに住む人には大いにつながりがあることを、８つのストーリーに分けて書きました。これからもライフワークとして研究していきたいと思っています。

団体としては、今申し上げたようなことですが、日本の有用植物文化の継承です。ただそれを継承するだけでは文化としては存続していかないと思いますから、どうやってその技術や知恵を使ってクリエイトして、次の世代に届けていくかしっかり提案して、未来へ届けていく活動をしております。

実は和ハーブ検定というのを私どもやっておりまして、これはそのテキストの中に含めている画像です。ざっと見ていただくと、どうでしょうか。皆さん、例えばこの油谷に根を下ろした植物が生き延びる、生き抜くためにどういうことをしているんだろうとちょっと想像してみてください。

植物は光合成をします。それは私たち人間が吐いた二酸化炭素とあとはその土地から根っこで吸い上げてくる水を原料にして、あとは太陽の光のエネルギーを使いますよね。小学校とか中学校の理科でやったのを覚えていますか。それで何をするかというと、その植物が生きていくためにつくり出すでんぷん、糖をつくり出す。それで、同時に酸素も発生しています。その酸素を私たちはまた呼吸で取り入れる、そういうことをしています。植物は体内で様々な成分を自らつくり出すことができますね。あとは私たち人間、それから世界に生きている鳥や虫や魚や動物といった生き物たちともつながって様々な役割をして同時に、植物自身も自分が生き抜いて子孫を残していくための戦略を、実はたくさんしているんです。

この図を見ていっても、木が根っこをしっかり張ることで、その土地に土砂崩れがないように固定をしてみたりですとか、水源涵養といって土地に水分を保持させる機能もありますし、鳥が咲いた花の蜜を吸ってみたり、果実を食べて種を遠くに運んで、その植物の子孫をまたほかのエリアで増やしていく、そういうこともやっています。

つくり出している成分は、その植物がもともとその遺伝子の中で決められて持っているものがあるんですけれども、例えばこのエリアに降り注いでいる太陽の日差しの量とか、あと気温とか、そこにどういう外敵となるものがいるかによって植物自身が周辺環境の中できちんと生きていけるように合わせています。例えば、人間にとってはとってもいい香りになっているけれども、虫や鳥にとっては毒ガスになる匂い成分を出したりしているわけです。

植物はこういった感じだけれども、じゃあ人間はどうだろう。人からの目線ということでちょっと見てみましょう。

私たちの人の体というのは、食べたものからできている。そして、主な食材は今申し上げたような植物、木や草、そういったものによって成り立っているということ。先人たちはそれらを食べたり、薬にしたり、お風呂に入れたり、あとは植物から繊維を取り出して服にして身にまとう、また、儀礼のシーンでも香りの強い植物を使ってみたりと、暮らしの様々なシーンで実は植物を生かしてきた暮らし文化があります。

ここに書いてありますとおり、例えば、身土不二という言葉を聞いたことはございますか。今日初めて聞いたという方も多いかもしれない。ここに書いてあるのは、生まれ育った風土と体と心は二つと分けら

れない。つまり、その土地にあるものをいただくというのは、その方にとても馴染むことだよという考え方で仏教に由来する言葉です。

あと、同じような言い方では、三里四方に医者要らずという言葉も実は伝わっています。三里というのが大体12キロメーター四方、つまり朝、太陽が上がって夜また暗くなって帰ってくる、その１日の間で行って帰ってこられるぐらいの距離感、その中にあるものを体の中に取っていくといいよという考え方です。先ほどの身土不二ともつながりますが、そこにあるものを取れば医者要らずですから、健康が保てるよという意味でもあります。

また、その下にあるのは、ヌチグスイという言葉、これは聞いたことのある方いらっしゃいますかね。これは私が沖縄に行ったときにおばあから聞いた言葉です。食べるものは命を養うものであるよということ、命の薬。これは食べものだけではなくて、今日みたいに心の通うメンバーと一緒に楽しい時間を過ごす、こういうこともヌチグスイであるというふうにおばあからは教わっています。こうやってコミュニケーションを取ることが非常に大事だよということでしょうか。

私は研究している内容上、よく民俗資料館などにお邪魔をするんですが、これが、50年から60年前まで田んぼや畑の作業をするときに使われてきた道具。田んぼの雑草を取る機械であるとか、一番上の右のほうは、これは稲を脱穀するときに使う唐箕という道具でありますけれども、こういったものをざっと見ていただくと、全てが木や植物でできています。つまり植物を材料にして作られた世界で、けども、その後は御存じのとおり石油がエネルギーの主流になっていって、プラスチックの暮らし道具がたくさん出てくる。とても便利ではあるけれども、特にこれ（木材）はとても重いですし、なかなか大変で、今はもうそういったものは納屋の奥にしまわれているとか、もうあんなのは燃やして捨ててしまったと、そういったお声もよく聞くんですが、実際にやっぱり使われていたものはこういう植物素材が中心であったということが、このシーンからも見えてくると思います。

ここで、私たちが和ハーブと言って呼んでいるものをもう一回整理してお伝えしたいと思います。

もともとハーブという言葉、今でも世界中で言われてはいますけれども、語源としてはラテン語の草であるエルバという言葉がもとになっています。狭い意味では、ハーブというと葉っぱでしょとか、花の部分でしょというふうによく言われるんですが、そのとおりで、香りや薬効がとても高い花、葉っぱ、そういった部分のことを指して言うケースが多いです。ただもっと広い意味で捉えると、それは有用植物です。有用というのは誰にとって有用かといえば、私たち人間にとってという目線になります。

そこに和ハーブ、和という言葉がついてきますね。これは私どもの団体での定義になりますけれども、日本の各地つまり、この油谷エリアでも江戸時代以前から広く人々の間で使われていた植物が和ハーブということになります。江戸時代の人も使ってきたという認識です。もっともっとその前の縄文人も使っていた植物も和ハーブに含まれます。

縄文遺跡からは、例えばサンショウが使われていた形跡があったり、キハダが出てきたりして、そういったものが発掘されています。

なので、この後歩いて見えてくるものも、和ハーブだらけではないかと思います。まだちょっと行っていないので、外来種ももちろん混ざってはいますけれども。ただ、このエリアにはまだまだたくさんの和ハーブが皆さんのそばにいるなということを今日は実感していただければいいかなと思います。ここで見えているタンポポとかヤブツバキも和ハーブになるわけです。

さらに、どういうシーンで使われているかということ。皆さんのお手元の資料とちょっと絵が違うんですが、内容としては同じようなものですから、一緒に聞いてください。

メインではやっぱり食でしょうか。食べるというシーンでこのハーブが使われている。私たちの体は植物からできていると先ほど申し上げたとおりで、それこそ、皆さんでお庭でシソを育てたりしていますでしょうか、シソやらミョウガやら、そういういわゆるスーパーマーケットでも買えるような薬味として呼ばれているようなものも和ハーブです。さっきもお寺にちょっと寄ったときには、サンショウがありましたけど、あれはホンザンショウじゃなかったね、何だっけ。（「イヌザンショウ」と呼ぶ者あり）イヌザ

ンショウでしたね。そういったサンショウの類もありますし、ここでは梅、これから梅がなってくるシーズンですけども、梅も和ハーブですし、山菜類でいうとワラビも食の和ハーブになります。

この右から３つ目に見えているのは、トチノキです。トチの実とか栗とか、そういった実のなるものにはでんぷん質がたっぷり含まれていますので、食の和ハーブとして昔から有用してきています。

あとは、薬の和ハーブというと、皆さんのお庭でもよく見つかるかな、ドクダミ。ドクダミも和ハーブ。あとはゲンノショウコというものも民間薬として最も使われてきたものです。

そのほか、色です。色でいうとアイとかアカネとか、あとは、たくわんを黄色に染めるクチナシも和ハーブだし、お風呂に使われる入浴の和ハーブというと、冬至に入るユズ湯のユズ。あとはヨモギなんかもそうでしょうか。

暮らしの基本は草木がつくるというふうに書いてありますが、柿の実は青いときの柿は発酵させて柿渋という塗料にもなります。昔は傘が和紙でできていましたので、雨が染み込まないように柿渋を塗ってコーティングする。そんな用途でも使われています。ただ食べるだけではないということです。

あとは毒、毒は減毒することで薬にもなるということで、非常にこれは難しいところではあるんですが、ただ、毒を持っている植物もこの自然界にはたくさんあります。和ハーブフィールドマスターという資格の学習では、この毒を持っている植物についても学んでいきます。例えばトリカブトとか猛毒の植物が結構身近にあるんです。

こんなふうに、和ハーブは実は皆さんの周りにいっぱいあるんだけれども、なかなか使ってくる機会もなかったということで、どんどん忘れられている。知られていないものになって、それが日本の忘れ物になっているよというふうにお伝えしております。けれども、それが実は日本人の生き方や歴史を支えてきたそのものですから、皆さん、今回をきっかけにして、足元の宝物に目を向けてほしいなというふうに思います。

どれがヨモギでしょうかと聞かれ見分けられるかどうか、私はちょっと不安という方もきっとこの中にもおられると思います。けれども、このヨモギも実は北海道から沖縄まで日本人が最も使ってきた、そして暮らしのたくさんのシーンで使ってきた和ハーブなのですね。

今ぐらいのシーズン、もしくはもう少し早いシーズンのヨモギをつんで、さっとゆでててそれをお餅の中に混ぜてやるとヨモギ団子ができます。今ではスーパーマーケットで簡単に緑っぽい色のついたお餅が手に入ってしまうんですが、自分で作ると、結構大変なんだけど非常に香りもあっておいしい。その違いをぜひ体験して、これが本物なんだなというのを身につけていただけたらいいなと思います。

特にこのヨモギというのが、さっき申し上げたように日本全国で使われてきています。北方のアイヌの人たちは、特にこのヨモギを大事にしていたんですが、矢尻の先にヨモギをつけて、これから家を建てますという家の屋根に弓矢で射るんです。それで、その家が守られる、悪いものが寄って来ないようにする儀式もあるというふうに聞いております。

本州では割とこうやってお餅に混ぜて食べるという文化が多いですが、沖縄のほうでヨモギは、フーチバーと呼ばれます。沖縄そばに、ちょっと匂いが強いお肉と一緒にトッピングとしてこのヨモギを入れるということで、臭いを和らげたり、あと鉄分の補給など、そういう役割もしているそうです。こんなふうに、一つのヨモギでも地域によって使われ方が、暮らし文化の中では様々であるということもあります。

和ハーブ検定というものをやっておりまして、その中では、和ハーブというのはどういうものかを学んで、地域でこういうふうに使ってきたよとか、あとは、和ハーブが人の体の中ではどんなふうに作用していくかの基礎知識も体系的に学べます。これは、それこそもう10年ほど続けていて、次は７月10日にあります。去年から実はオンライン検定をスタートしていますので、皆さんも自宅で受けることができます。もしよかったらチャレンジしてほしいなというふうに思います。８割ぐらい合格しています。

各地でフィールドを歩く講習などもしております。今日もこの後やりますけれども、和ハーブフィールドマスターという講習も５年ぐらいやっておりますが、図鑑や本だけで見るのと、実際のものを見るのは全然やっぱり違うんです。４月に見たものと８月に見たものが、同じ植物でも見た目の姿形が違いますの

で、その変化も皆さんに観察していただくんですね。植物と人のつながりをしっかり話せるような人を育てていきたいなと思ってやっております。

あと、メディアのほうにもいろいろ発信をしながら、和ハーブはこういうおもしろい価値があってね。あとは、いろんな方に実際に和ハーブを使っていただいて価値をお伝えする活動もしております。

昨年は養命酒製造様とコラボをしまして、石川県の能登町役場さんと、地元の施設や地元の植物にお詳しい先生と一緒に散策をしまして、能登のクロモジを中心とした文化を学ぶ、そしてクライマックスはクロモジの植樹、苗木の植樹体験も行いました。

こうやって地域地域に足を運ばせていただいて、その土地にある必要な有用な植物、和ハーブを実際に見て、それを植樹して持続可能な取組になるようなお手伝いをしております。

右上のほうには、ちょっとサイトの分かりづらいんですけど、サイトの絵も載っております。後ほどお話しします古谷先生が執筆しているクロモジに関するコラムでして、たしか６本ほど書いています。「ハーブのつぼ」というふうに検索していただくと出てくるかな。「ハーブのつぼ　クロモジ」と検索していくと、（「古谷　クロモジでも出る」と呼ぶ者あり）「古谷　クロモジ」でも出るという。読み応えのある記事、無料で読めますので、ぜひ皆さんもアクセスしてみてください。

このときは、クロモジのアロマオイルを作っておられる地元のメーカーさんと共催しまして、そこのアロマ工房にもお邪魔をしました。実際に伐採したクロモジをカットして、蒸留した窯なども見せていただいたり、最後に瓶に詰める体験などもしたりして、実際の植物が持っている香りの強さを体験していただきました。

あと、そのほか、私どもとしては、これも去年のお話になりますが、熊本県の天草にお邪魔をいたしました。天草にお住まいの方が和ハーブについて詳しくなって、天草の魅力として語れる和ハーブガイドさんになってもらう、人材を養成したいというお話をいただきました。そこで、天草にある有用な植物というのはどんなものがあるんだろうというのを私どもで調査をして、ミニブックにまとめました。それをユーチューブのサイトにもつなげまして、動画で和ハーブを学びながら足元の植物資源を大切にしていこうという機運になればいい。そこでワーケーションで来てくださる方を増やせないかという取組でもあります。特に天草なので海辺の和ハーブが中心になっておりました。

皆さんのパソコンやスマホなどから見ることができます。ユーチューブ「和ハーブチャンネル」でよかったら検索してください。東京の銀座のど真ん中に実はこんなハーブがあるよというぶらり和ハーブ散歩、ちょっとタモリさんみたいなことをやっておりますが、古谷先生がおもしろく楽しく語っております。

あと、銀座だけでなくて、先ほどの天草編もありますし、最近アップしたのは鹿児島の大隅半島を歩いたときのもので、３種類ほど植物のことを伝えております。ぜひ見てほしいなと思います。こんな時期なので、遠出をするのが難しいかもしれないですが、旅をした気分にもなれたらいいなというふうにも思っております。

普段は東京都中央区銀座といって歌舞伎座の裏手に事務所があります。いわゆる都会ですが、ぱっと事務所の外に出れば、小さな小さな和ハーブ、タンポポがふと咲いているのに出会えます。なので、和ハーブを知ると目線が広がって暮らしや考え方、気持ち、心、視野もすごく広がります。私自身がこの10年間それを積み上げてきて、今ここにいて、やっぱりこの和ハーブの止まらない面白さというものに取りつかれておりますから、どうぞ皆さんもまずは足元のものに愛情を込めて、一個一個知っていくだけで、もっとこの土地のことが好きになると思います。

今日は、この後、古谷先生からの話がありますので、楽しみに聞いていただきたいなと思います。

あと最後、今日ドライにした和ハーブをお持ちしています。これは後ほど見ていただいて、皆さんでお茶にして飲んでみたいと思います。

時間になりましたので、取りあえず私のほうから以上です。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、続きまして、一般社団法人和ハーブ協会理事長の古谷暢基様のほうに、移ります。テーマは

「和ハーブと地域創生」です。どうぞ古谷さまよろしくお願いいたします。

○古谷暢基　和ハーブ協会理事長　よろしくお願いします。（拍手）

私と昭恵さんは昨年、宇宙人の会で出会いまして、宇宙人を見たという方のお話を朝の10時から夕方５時まで聞くという不思議な会でありまして、そこに私と10人ぐらい有名な方とか結構いまして、昭恵さんもいらっしゃって、今から考えると全員がそもそも宇宙人だったという、参加した人がですよ。笑うとこだったんですけど、普通に捉えてください。

今日は昭恵さんのほうから２か月前にお話をいただきまして、それから内容を全く知らされないまま２週間前ぐらいに、今日の講演の内容は何かなと聞きたくて電話をしたんですが出てもらえず、LINEで「講演会のことですね」そこで終わったLINEが１回、その後を知りたいんだよというところからまた２日ほどLINEが来なくて、今日は何しに来ればいいんだろうということで、やっと２日ぐらい前に詳しいことが分かったんです。地域創生ということでよろしいですか、大丈夫ですか。ちょっと不安に思いながらつくっていたんですけど、平川のほうから和ハーブの基礎ということでやったんですけど、長門の足元の宝物というとね油谷でもよかったんでしょうけど、そんな題名でやらしてもらうんですけど、ちょっと補足というか、いろんな本当にメディアからお話をいただいていまして、実は、２週間ぐらい前でしたか、日本経済新聞でも３ページ、日曜版で特集されましたし、今度はTBSのほうで３分の番組なんですが、和ハーブの特集があります。

こちら、左側は日本国の雑誌、外務省広報誌です。これも昨年、日本のすばらしいものということで、日本国のSNSにも特集されたり、右側がちょっと紹介したかったのは、やっぱり今日来るとき、すごく森林が多いですね、ここ。森林技術という日林協さんという日本で一番大きな林業系の団体がございます。そこの会報誌で、このときはもう１冊の半分が和ハーブの特集で、どういうことかというと、森林資源を和ハーブの観点からどうやって生かしていくか、これ、かなりおもしろい記事がありますので、後でもしかしたらPDFでももし御希望の方おられましたら。例えば、杉の林の下、林床空間というんですが、これ、ずっと日が照んないまんま１年間その状態なんですが、そこは実は意外と気候が安定しているのと、虫がつかない、虫が寄らないので、そこで農作物を作ろう、その農作物が和ハーブだったりしましょうとか、それから、雑木と呼ばれる広葉樹林が、実は実用性が高い。これも和ハーブなんで。だけど杉ばっかりに植え替えちゃって、しかも今は愚かなことにそれを全く使わない状況になってしまっている。その結果、それらが花粉症の原因となったり、本来の自然環境を壊しています。一方で、役に立たないと思われている広葉樹林、これをどうやって生かすかなどがたくさん書いてある内容になっています。

こちらのほうでも、山口県のほうでもぜひ生かしていただきたいノウハウも入っているということで紹介させていただきました。

あともう１個、補足で御紹介したいのは、今、和ハーブロードというプロジェクトを何個か日本で広めております。今、具体的に完成間近なのは富山県の立山町、立山連峰というすばらしいところがあって、そこの道の駅みたいな施設を入り口にして、そのまま山頂まで登ると富山湾と立山連峰がずっと見れるすばらしい山頂があるんですけど、そこに行く２キロぐらいの道のとこにいっぱいいろんな有用植物が生えています。そこに看板をつけたりガイドブックをつくったりして、和ハーブロード認定ということをしています。その和ハーブロードを歩きに来ることで地域に人を呼ぶ、ふもとの道の駅には和ハーブロードで採取できる、あるいはそこで畑をつくったりして採取した和ハーブでつくった商品を何個か開発してそこで売る、それを連携して、単に商品をつくるとなるとどうも競争性がちょっと低いので、和ハーブロードを認定してそこで取れる植物を素材にした商品をつくる、こういうプロジェクトをしているんです。

もう１個、今、千葉県の木更津駅の、これ街中なんですけど、駅から木更津湾のほうに行く１キロぐらいの道を、もうシャッター商店街だったんですけど、その街路樹を全部和ハーブにして、道の下に和ハーブの説明を書いたりして和ハーブロードにしていきます。このようないろんな形で、植物なんですけどいろんな切り口で地域創生をしております。

これは分かりやすくて、具体的にもう食品になっているんですが、左がフキです。何とフキをチョコ

レートにしました。これ意外とおいしい。フキの葉柄とかですけど、砂糖漬けにしてチョコでコーティングするんです。そうすると、フキって意外とハーブで香りが強いんです。トウブキというんですけど、長野県の塩尻市、これはもうちょっと地元でも話題になって、地元のテレビ局とか新聞がいっぱい取材に来て、高級デパート、地元でちょっとハイソなデパートで売っている、限定です。

２番目は、パスタのジェノベーゼソース、これは奄美大島の下にある加計呂麻という島です。ここの島の海岸での散策・講演で私が呼ばれて、今日もそうなんですけど、いきなり下見なしで散策するというむちゃぶりをされまして、そこで取ったものです。アドリブで僕がそこでジェノベーゼをぱっと作ってあげて、おじいちゃん、おばあちゃん、40人からおるけど、おいしいおいしいと、これはおいしいとなって、そこに実は役場の偉い人がいて、ちょっと使い切れていない予算があるからそれで使おうと、そこで決まったというものなんですが、何と地域おこしの大賞、地場もん大賞を取りましてフランスまで行ったんです。

最後は、岡山県、ここと近いですけど、岡山県の山間地でジビエの大きい工場ができると。鹿肉を生かした商品が何かないかと言われましたので、鹿肉って実は、今話題のオメガ３がすごい。みんな気づいてないんですけど、オメガ３というのは植物がつくるものなので、動物の肉にはオメガ３が無いのです。で、ちゃんと植物を食べている牛、牧草牛とか、それから魚でも海藻を食べているとオメガ３は多いんだけど、人工飼料だとオメガ３少ないんです。つまり野生の和ハーブを食べている鹿にはオメガ３が多くて、和ハーブにもオメガ３が多いので、オメガ３グリーンカレー、タイのグリーンカレーを和ハーブだけで再現する。このレシピを缶詰でつくったんですけど、これも道の駅で大ヒットしている。全部限定なんだけど、なかなか。一応ネットでもこれ出てきます、グリーンカレーは。そのようなことでやっております。

ちょっとだけ地域を活性化させるこの和ハーブプロジェクトで私が重要視している２つの言葉がありまして、アンビバレントとトンガリバリュー、簡単に説明します。

アンビバレントというのは英語なんですけど、乃木坂46、ヒット曲でアンビバレントという曲があるんですけど、ちょっと世代的に……。対立構造という意味です。２つの対立概念をしっかりと見極めようと。これは何かというと価値づくりに入っていくんです。例えば、今まで薬草とか植物というコンテンツを扱うと、特に薬膳、薬草になると健康志向とか、年齢層が比較的高めにいくんですけど、これをハーブという和じゃなくて英、日本じゃない海外でアンビバレントです。和ハーブ、もうそもそもがアンビバレントで、何だそれ、和なんですか、ハーブとなると、ここで引っかかるんです。びびっと。言語感覚鋭い人はここでもうキャッチできるんですけど、和ハーブにすると年齢層が急に広がって、それから今まで健康志向だけだったのが美容だとかいろんな文化、いろんな幅広いカテゴリーということになります。

あと、おかげさまで地域からいろんなところから御依頼があって、講演やお話を聞くんですけど、ちょっと厳しいことを言いますと、なかなか地域創生というのはうまくいっていないのが90％以上と、何かこんな感じなんですよね。何で突き抜けられないかというと、これは“間違った地元素材への愛”が原因です。

結構多いパターンが緑茶です。私が講演すると、たたたたっと走ってきて名刺交換してください。うちの地元には昔から緑茶がありまして…」と、こう来ます。ほぼ半分ぐらいの確率で緑茶が来るんですけど、つまりどこでもあるということです。緑茶というと、伊吹山というところに無農薬の鎌倉時代の遺伝子のまんまのものがあって、そういうのはトンガリがあるんですけど、他の地域のお茶は独創性がないのが多い。

それから、ビジョン設定ができていなくて、ちょっと辛辣なことを言うかもしれないですけど、そういう助成金が入りますと、取りあえずつくって終わりと。使い切って終わり。助成金というのは、私が思うのに、スターティングのための資金であって、その後10年、20年たっても売れるものでなければいけないから、10年もたすための準備のための資金だと考えればいいんだけど、つくっちゃって終わりと。中長期計画ができていない。それから、なぜこの商品をつくるかビジョンと、何といっても価値づくりです。

一つ、キーワードとして、日常と非日常というアンビバレントを考えてみたときに、地域で本当は価値があるものの見いだし方の一つの手法なんですけど、グリーンカレーをプロデュースしたときに、おじい

ちゃん、おばあちゃんを呼んで、部落ごとにグループを組ませて、パソコンできないだろうから、模造紙に手書きであなたのおじいちゃん、おばあちゃんのさらにそのおじいちゃん、おばあちゃんとかがずっと食べてきたご飯あるいは家で日常食べている植物を使った御飯とかそういうものを何個か書いてもらい発表させるんです。必ずおじいちゃん、おばあちゃん言いますよ。こんなもんは昔から食べているよ、こんな田舎のもんいいかどうか分かんないけど…と発表すると、その中に宝物がある。それはあんたんとこでは日常だけど、東京、他地域から見るとそんな使い方するのは見たことがない。こういうものの中から出てきたんです。それで商品開発したんです。

そのときに出たのはクサギという和ハーブ。これが一番だといって一生懸命地域おこししているときに、いまいち売れないなというのは、意外とそれは月並みだったり、ほかの地域から見ると価値がないんだけど、足元で普段使っていたり、ちょっと民俗資料館に行ってばっと見ると、これ昔からやってんじゃんというのが、他地域から見るとすばらしい価値のあるものが出てくるんじゃないか、こういうことです。

地元では当たり前であることが宝物だったりして、地元で自慢で愛着があるものは月並み。だから、地元の情報の知恵と我々のような他からの視点とプロデュースがうまく合体すると価値が掘り出せるのではないか。

もう１個ちょっと言わせていただくんですけど、これもアンビバレントなんですが、よく地域のため、地域のためといって、地域でこういうのを昔からやっているからやってよという理論に来ちゃうと、それは押し付け。今言ったように、それが本当に価値があるものかどうかという査定ができていません。

だから、他地域や日本全国のためにならなきゃいかんと、逆に考えるのです。他の地域が喜ぶようなものをちゃんと考えるというような観点を持つとうまくいくんじゃないかと私は考えています。

次、トンガリバリュー。さらにその地域おこしの商品をどうやってプロデュースしたり見つけたりしていくか、これ簡単なやり方というか、ノウハウです。たった２つの逆の要素があると商品が200％大ヒットする。

クイズ、“○○”だけど“××”のコンテンツ、そうすると、この商品は100％大ヒットします。絶対的価値の答え。分かる人いますか？。急にふるんですけど、きっと頭が柔らかい学生さんは分かるんじゃないかなと思って。学生さん、どうですか。一番後ろの学生さん、どうですか。“○○”だけど“××”じゃないもの、分かっています。しーん。ヤベさん。どうですか。マーケティングとして。どうですか？

マーケティングとして。

何か１個ぐらい、片っぽだけ言ってもらっても。よくあるのが、おいしいけど安いとか。おいしいけど安いというんだけど、おいしいとか安いというのは相対的価値なんです。その人によって変わるんです。誰も答えてくれないので寂しいんですけど言っちゃいますね。

これは、存在しないけどニーズがあるものです。とてもシンプルでしょ。周りだったりほかにはないんだけど、潜在ニーズがある。そういうようなプロデュースです。地域おこし商品をつくるときに、他地域にないとか、今まであまりないようなものだけど、簡単に言うとこういうことです。こういうのがあったらいいのにという、こういうことです。かんきつの商品だったら、こういう柑橘の商品があったら面白いなあとか、こういうふうな言語が当てはまるんです。これを見つけたり、つくり出したりプロデュースということが大事かなとは考えています。

さらに、植物に関わる、植物だけじゃないんですけど、食とかそうですけど、３つの柱がいいかなと。文系と理系のアンビバレントなんですけど、ちょっと今これから説明しますけど、ちょっと私なりに、この辺りの植物文化を研究してきたんです。

例えば、ゆずきちってありますよね。後でやりますけど、柑橘というのは、非常に機能性が高いんです。宝の植物ですから。栄養価とか薬効がすごいです。だからそれをちゃんとエビデンスという言葉がありますけども、私も一応医学博士なんですが、どういう栄養素が入っているとか、機能性成分が入っているなどをデータを出して、それをこう、一方では、柑橘ってときに日本の歴史の非常に深いストーリーがある。歴史です。例えば、理系的なこういうふうに科学的に体にいいというのと、こんなふうに伝統的に使われ

てきたという二重押しでいくと、かなり分厚くなります。

さらに３番目は何かというと、さらにそれは地元のおじい、おばあたちが一生懸命山に行って頑張っているんだなんていって、それをフェイスブックで発信したりする、現代事情、この３つの絡み合わせもするとかなりいい仕上がりになってきます。

時間何分までだった。

○**水谷**　どうぞ、お好きなだけ。あともうちょっとぐらい。

○**古谷**　もうちょっとぐらい。分かりました。

長門の和ハーブに入っていくんですけど、まず、こちらに間違いなくあるなということで、今全国的に和ハーブ協会がどこでも手応えを感じている２種類の和ハーブを紹介すると、ヤブニッケイとカキドオシといいます。

ヤブニッケイは、これは日本の野生で生えている唯一のシナモンです。シナモンジャポニカです。ここにございますが。（「回しますか」と呼ぶ者あり）じゃあちょっと回しますか。葉をちぎって嗅いでもらいましょうか。

これは非常に機能性が高くて、和ハーブ協会で成分分析しておりまして、まずオメガ３がとても多いんですが、それから、（「ニッキ」かと呼ぶ者あり）ニッキではないです。ニッキはシナニッケイといいまして、中国の植物です。これは日本の野山にありまして、その辺にある。ちぎってください。ちぎんないと香りが。

これ、今我々がプロデュースしているレストランとかいろんな地域で使われています。月桂樹の代わりに使ったり、それから、あと粉にするとすごい香りが立つので、ハーブソルト、和ハーブソルトに使ったり、スパイスで使ったりしています。

あと、これ中国の研究で、おっしゃられた中国のニッキと、いわゆるセイロンニッケイとザ・シナモンと日本のニッケイ、３種類を比較したところ、日本のニッケイだけに糖尿病を予防するすばらしい成分が入っているというデータもございます。

もう一つがカキドオシ、これは草です。これ昭恵さんとちょっとさっきも話したんですけど、これはシソ科の植物なんですが、農家の皆さんは多分踏みつけて、ばっさばっさ切って、がんがん捨てていると思うんですけど、これは実は日本６大薬草で万能薬。なおかつ味もいいんです、すごい。だから料理素材でも使えるし、乾燥してお茶にしたり、さっきみたいにソルトにしたりするんですが、面白いのが、これ畑の周りに埋めておくとイノシシ来ないです。シソ科の葉の表面は毒ガスの玉がいっぱいあって、踏みつけるとぐわっと揮発成分が出て、イノシシって人間より鼻がすごいいいじゃないですか、私も経験あるんですけど、さっきのクロモジの話なんですけど、クロモジは香りがすごいいいんですけど、つくりたての精油を嗅いだら倒れそうになったんです。強烈で。だから、揮発成分というのは、実は対生物になると毒ガスなんです。多分、イノシシはそれを感じるんでしょう。カキドオシがあると畑を避けて通ります。なので、畑の周りにカキドオシを植えて、いわゆる獣害対策にすると良いのに、どんどん刈り取ってしまうんです。

あるいは稲の害虫対策になって、イネ科の雑草が生えてこなくなるんです。イネ科の雑草に来る虫は稲につくんですけど、シソ科に来る虫は稲にはつかないので、そういうようないろんな使い方がございます。カキドオシ、多分後で御覧になれるんじゃないかと勝手に思っています。どこでもあるんじゃないか。

次にちょっと一夜漬けのお勉強に近かったんですが、我々が地域おこしをするときに、文献の植物を掘り起こすときにやるのが、地元の古文書、そういうものを掘り出してきて、そこに何の植物が書かれているかを見るのですが、皆さん御存じですか、この辺のそういう史料は、あまり御存じないようですね。

『防長風土注進案』というのがあります。これは調べたんですけど、萩藩主の毛利敬親が山口一帯の本当にいろんな産業、地理、人口とか村の様子とかそういった植物、薬草の素材とか全部調べ上げて、日本のそういう地方誌、歴史的な公文書でもなかなか価値が高いものらしいです。ちょっとこれをいろいろ私確認しましたところ、大学で研究したPDFが発見できたんですけど、そこからちょっと紹介してみま

しょう。

この赤で囲った辺り、この辺じゃないかと。ちょっと読めないと思うんですけど、ここの江戸時代の管轄域の名前があって、これがちょうど長門市の辺りとか油谷の辺りになると思うんですけど、ここには「あたり」島と読むのか「とう」島と読むのか、ありますけど地域名が残っています。「当たる」「島」と書いて。それから、前大津、あれは来るとき看板に書いてあった。美しい……（「三隅」と呼ぶ者あり）この三隅地区と前大津地区と当島というところでこれだけの薬草が栽培されて、文献によるとかなり薬草のエリアらしいんです、山口県というのは。（「すごい」「私の勘が当たった」と昭恵さんの発言あり）すぐ自分の手柄にする（笑声）だったら調べてこいよとか、私が宇宙人なんでテレパシーを受け取って調べてきたんですけど、昭恵さんのお蔭です、ありがとうございます。（笑声）

スイカズラという薬草が最も取り扱われたと書いてあります。それから、ちょっとキノコの一種と、あとはハマスゲといいまして、ちょっと後で紹介しますが、浜に生えているカヤツリグサの一種が使われたと書いてあります。あと紫根といって、ムラサキという植物の根。これほぼ絶滅状態な植物ですが、やっていたみたいなんで、これは価値あります。

見えにくくてすみませんけど、ちょっと読み上げます。

上からスイカズラ、それからカラスビシャクといって、これも雑草っぽいやつなんです。これ、ちょっと今回外したんですけど、香りがないので。スイカズラは本当に利用価値が高いです。あと、書いてあるのがハマスゲ、クチナシ、それからクズ、アケビ、キキョウ、それからカワラヨモギという面白いのが書いてあって…、河原に生えている、ちょっとディルって分かりますか。ディルとかに少し近い香りがするちょっと貴重なヨモギがあるんですけど、そういうものもよく使われていたみたいです。あと、ホオノキとか、オオバコ、本当に山に生えているようなもの、こういうものを量産して産業にしていた。データが残っています。

スイカズラというのは金銀花という別名があります。黄色と白で、シーズンによって花の色が変わるんですが、金銀で金銀花というすばらしい名前ですけど、これは徳川家康が、最も健康オタクといわれた徳川家康が一番愛用していた薬草。あと、同時に、これ砂糖がない時代に、花が甘いので、甘味料と書いてあるんだけど使っていたり、今の時期ですけど、若い葉っぱは普通に食べられます。花も食べられます。食材としてもいけます。あるとこにうえーっとあるんで、あほみたいに。大体あほみたいにあるんですよ。

ラベンダーとかはみんなちょっと素敵、西洋ハーブなんて素敵、片仮名ですから素敵となってヨーロッパとなるんで、ラベンダーは皆さん勘違いしないで、あっちでドクダミですから、足元にあほみたいに生えているでしょ。あほみたいに生えてすぐ摘んでこれて資源が枯渇しないから薬草なんです。地元薬草なんです。それを日本人がヨーロッパ人のドクダミを高く、ありがたがるというのも少しどうかなというのがあります。だから、本来、日本人の魂、さっき平川先生からありましたけど、身土不二、日本人のDNAに沿った成分を持った和ハーブをもう少しきらきらと輝かしてあげて、ブランディングしたほうが筋が通っている。

これはハマスゲです。一見、超雑草なんですけど、ちょっと引っこ抜くと、根塊といって根っこの上に茎が少し膨らんだ球根みたいになっているものがあるんですけど、そこが香りがする。良い香りがするんです。ハーブです。何と正倉院の倉庫から見つかっている非常に由緒正しい薬草。血流を上げるのかな、女性の生理不順などにも効くということでございます。

長門和ハーブと勝手にしますけど、それから、さっきも言ったように、昭恵さんから聞いたんですが、夏ミカンの原木があるというお話もちょっと聞きました。それから、調べたら私ちょっとまだ現物を見たことないんですが、ゆずきちというライム系ですか、スダチのような…。（「スダチです。スダチとユズの真ん中辺ぐらいの感じです」と呼ぶ者あり）すばらしいじゃないですか。柑橘というのはやばいんです。

ちょっと、ゆずきちについてデータがなかったんで、我々がちょっと手伝っている橘というすごい、橘はゆずきちの多分原種なんですけど、この紹介なんですけど、日本初の正式に文字として記録された薬が橘なんです。いわゆる古事記と日本書紀に書かれています。内服薬が橘で、外用薬が白ウサギ、因幡の白

ウサギのガマです。ガマが皮膚の薬。飲む薬は橘。

常緑で柑橘って、御存じのように１回なると、半年ぐらい何も取らないで落ちないんです。だから永遠の命の象徴。それから、いつでも取って、いざというときそれが栄養源にできる。このようなことから、特に橘は古事記で病弱な天皇が不老不死の薬として部下に依頼をしたけど、部下は10年間それを見つけられないでやっと帰ってきたら天皇はとっくに死んでいたという話もあります。日本原産の野生の柑橘なんですが、左近の桜、右近の橘。つまり、ひな祭りの横にあるやつです。それから、天皇の御所とか行ったら必ず右側にありますし、京都とか奈良の神社は大体植えてないところはありません、本堂の前とか。今、野生は全国で300本しか残っておりません。

この天皇の部下のタジマノモリといって、天皇忠誠の象徴にされて、戦前はみんな覚えさせられたタジマノモリと橘はみんな覚えさせられたそうです。家紋だったり、名前になっていたり500円玉にも実は橘が描いてあるんです。それから文化勲章です。

ここなんですけど、野生原種に近い柑橘の機能性成分のすごさなんですけど、ノビレチンとタンゲレチンというのはポリフェノールの一種なんですが、見てください。ミカンのこんな小っちゃいやつ、大きさはミカンの３分の１ぐらいかな。この有効成分、ポリフェノール、これはファイトアレキシンという成分で、さっき平川さんが言っていましたけど、周りの環境、日照とか土、そこにいる微生物、それに対抗するために植物が周りの自然環境に応じてつくる成分をファイトアレキシンといいます。

これは、人間の細胞も植物の細胞もそんなに変わらないので、それを人間が取ると、それを享受できるから、だから身土不二。その土地で育った植物がいいということです。10倍とか20倍。これぜひゆずきちも成分分析してほしいんですが、もう一つ言いたいのは、これは中の酸味のとこじゃなくて皮とか葉っぱなんです。これ貴重な橘の皮と葉っぱでございますが、捨てちゃうわけです、葉っぱとか。ところが、これ東南アジアに行くとトムヤムクン食べたことありますか？トムヤムクンの中に葉っぱ入っているじゃない、あれはミカンの葉っぱです。

それから、グリーンカレー、さっき出たグリーンカレーは、ミカンの皮をペーストに使うわけです。だから、東南アジアでは皮や葉っぱを資源として使うのが普通なんです。日本は使わない。だから和ハーブ、このゆずきちの皮や葉っぱを使ったいろんなものができる。香りがすごいし。ポリフェノール成分のファイトアレキシンは皮と葉っぱに。それぞれの中にヒントがあるんじゃないかと考えているんです。

そのほか、ちょっと調べたのは、白オクラ、これは野菜ですけど、伝統野菜も立派な和ハーブなのですが、調べたところ、ワサビとかワケギ、インゲン、ゴマ、これが何か日本のもともと在来種がここで育てられていると聞いて、これ何気にすごいと思います。今、在来種の種がちょっとやられていますので、これとかこれは結構貴重かなと思われます。

○**会場の声**　先生、思い出しました。白オクラの種は自然農家さんが原種管理されています。

○**古谷**　本当ですか。

○**会場の声**　本当です。

○**古谷**　すごいですね。

ちょっとこんな感じで、グリーンカレーを作るときにゆずきちの葉と果皮、それからさっき言ったヤブニッケイ、和のシナモン、さっきの在来種のセリ、ハマスゲのちょっと香りのするところをペーストにしてやるとできます、グリーンカレー。

あとジェノベーゼはちょっとオクラのとろっとした白オクラとそれからヨモギとかカキドオシ、またナッツを入れて、ちょっとニンニク、ニンニクも在来種でありますけども入れて、があっと回して、オイルを何使うか、ジェノベーゼソースできるんです。

こんなような形にしてできるんじゃないのかなということで、足元の宝物をちょっとみんなで探そうとこんな感じで終わりまして、御清聴ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　古谷さん、どうもありがとうございました。（拍手）

それでは、少々お時間を頂いてからちょっとディスカッションタイムとさせていただきます。

○**水谷**　それでは再開させていただきます。

先ほど平川さんのほうからは和ハーブの基礎知識をご教授頂きまして、ありがとうございました。また古谷様の大変刺激的なお話を伺いまして、本当に感動していて言葉が出ないという感じなんですけども、この長門での和ハーブの可能性、存在とか価値ということでいろいろとお話をいただきました。

それでは、お２人の話をお伺いして、安倍昭恵さんのほうからコメントをいただければと思います。

○**安倍**　こんなに長門のことを調べてきていただいて、私も知らないことばかりで、本当に私も感動しました。長門に住んでいる方たちは、結構、いや、もう何にもないところやけえという感じの人も多いんですけど、実はそうではなくて、何もないのではなくて、本当に宝の山であるということをやはり外から来られた方が改めて教えていただけるという、それをやはり住んでいる、今日ちょっと長門の住民がほとんどいないんですけれども、市長御夫妻には今日しっかり聞いていただいて、何かこれからの地域おこしってただ箱物を造るとかそういうことではなくて、やはり都会にないもの、いかにないものを自分たちで発見していくというところだと思うので、宇宙人会議みたいなあそこから何か絶対に長門に来ていただきたいと思っていた私の勘が当たっていたと（笑声）、すいません、違います（笑声）本当にありがとうございました。

でも、今日教えていただいただけで、これからだと思うので、これをまた何度も来ていただいて、一緒にいろいろなものを発見していき、そしていいものを開発していけたらいいなというのを本当に思いました。

○**古谷**　かしこまりました。

○**水谷**　ありがとうございます。

まず私のほうから平川さんにお伺いしたいんですけど、私どもは大学でどちらかというと、服飾とか染色とかというそういう活動を通じて地域創生に何か貢献できないかなという活動をしているんですけど、最初におっしゃった縄文時代の何か発見されているので、サンショウとキハダとおっしゃいましたか。

○**平川**　キハダとか、はい。

○**水谷**　ですよね。だからキハダというと黄色い、今大学でも染めたりして実験しているところなんですけど、それも縄文からのということなんですね。

○**平川**　そうです。キハダといって、なかなか聞き馴染みがないかもしれませんが、漢字で「黄色い」「肌」と書いて「黄肌」というんです。キハダという木の樹皮の内側のところが本当に鮮やかな真っ黄色になっていて、そこの黄色い色素成分ベルベリンが実はお腹の下痢を止めるだとか、そういうお薬にもなっているんです。そのお薬がまた、水谷先生がおっしゃるように染めるという分野にも使えて、とっても鮮やかなきれいな色が抽出できます。虫よけの成分もあります。

○**水谷**　そうですか。だからそういう体にいいということと、またそういう染色などにも使えるという両方のものがあるんですね。

○**平川**　あとは、キハダは染めるというだけではなくて、花が咲いて果実ができますね。実はキハダというのは、さっきの長門ゆずきちと同じようにミカンの仲間になるので、（「先祖」と呼ぶ者あり）先祖か。ミカンの先祖。果実なので、食べると柑橘みたいに爽やかな味がするんです。

○**古谷**　アイヌ人のもてなし料理。

○**平川**　もてなし料理です。ラタシケプという。

○**水谷**　ということは、本当に寒いところで取れるんですね。

○**古谷**　日本全国。

○**水谷**　全国で取れるんですか。じゃあどこでも昔は。

○**古谷**　山深いとこです。

○**水谷**　深いところで。

○**古谷**　あるんじゃないですか、探せば。

○**水谷**　かなり長門は山深いですから。この後、なるほど。

○**平川**　本当に有用性が高い植物だと思います。

○**水谷**　なるほど。あと、サンショウというと何となく日本では、偏見かもしれませんけど、京都の何か食材のイメージがあるんですけども、実際、特にその地域にわりと取れやすいとかそういうことはあるんですか。

○**平川**　いや、もう日本全国で取れます。

○**水谷**　どこでもですか。

○**古谷**　アサクラザンショウもあります、福岡の。

○**平川**　アサクラは兵庫です。

とげがない種類のアサクラザンショウというものです。とげがあると栽培が大変なので多分突然変異で出てきたとげのない個体が人気になったんですね。今栽培が続けられている品種です。

○**古谷**　全国の。さっき今日来たとき、名前忘れていたイヌザンショウと。

○**平川**　イヌザンショウと。

○**古谷**　すりこぎの棒で使うんですけど、ちょっと香りが柔らかいです、サンショウより。

○**平川**　今日、一緒に来てくださったお２人も匂い嗅いでみてください。

○**水谷**　お吸い物のサンショウと全然違う。

○**平川**　こっちが丸いような感じ。

○**古谷**　柔らかい優しい香りですよね。日本ではほとんど資源として使われないですけど、韓国では非常に重要な食材、薬草だったり、キムチはイヌザンショウの果実の油で漬け込んでいます。

○**平川**　キムチというかトウガラシとか、赤のイメージがありますけど、そうではなくて。

○**水谷**　それは山口にもたくさんありますか。

○**古谷**　はい。

○**平川**　もうさすが見つけちゃって。

○**古谷**　誰も使わない。サンショウより大きくなるので、１本の木から取れる資源量が多いんです。

○**安倍**　何かコロナになっていろんなことを私たちは考えさせられるようになって、やっぱりそういう和ハーブで免疫力を上げたりとか、体を整えるということが、これからもちろんワクチン接種を、今私はこの場で何も言いませんが、それ以上にやっぱりそうやって自分の体を自分で知って、そういうもので免疫力を上げていくということがとても大事なんだということが、何かこのコロナから教えてもらっているのかなという感じはします。

○**平川**　実際に昔の人たちも、お山に行くのには、車、軽トラとかないので、必ず歩いていく、そういう身体活動を伴っていたわけです。それで山のきれいな空気の中、きれいな水の中で育った植物のものを取ってきて、食べる。

○**古谷**　食べるだけじゃなくて。

○**平川**　食べるのと体の運動がセットになっていたということですよね。

○**安倍**　昔は忍者が取っていたという。

○**古谷**　忍者和ハーブというやつあったな、忍者ハーブといって。忍者は薬草の達人なんです。植物の達人で、山伏が修験道、山伏がいわゆる日本全国の薬草、ハーブを流通させて行ったり来たりしたんで、さっき紹介したこちらの薬草も山伏が絡んでいるんです。山伏が絡んでいる。忍者は山伏がルーツなんです。修験道なんです。この辺りはあれ修験道なんで。だから、甲賀ってあるでしょ。甲賀って滋賀県の。あそこ甲賀忍者というんです。甲賀って医薬品の会社の町なんですけど、医薬品メーカーが十何社あるんですけど、その一番最初につくった社長は忍者です。忍者の末裔がその薬品会社をつくったんで、何で忍者が出てきたんですか、急に。

○**安倍**　別に……。（笑声）

山口県にも忍者がいたのかなと思って。

○**古谷**　います。どこでもいます。

さっき言ったカキドオシと言ったじゃないですか、イノシシが避ける。あれは忍者が自分の体の臭い消しに使ったんです。

○**安倍**　三重大学の忍者の先生に教えていただいた。（発言する者あり）

○**水谷**　私、三重県の出身でございまして、特に関係ありませんけれども。

話が飛ぶのですけど、私は日本のハーブに興味あるのですが、フィンランドに学生とよく行ってまして、そうしますと森林が割と国の所有で誰でもがハーブが取れたり、あるいはベリーが取れたりというようなことだったんです。だから生活の中に浸透しやすいというのも、日本の土地は全て誰かのものという感じなんです。だけど、今みたいに、もう放置された土地もいっぱいあるし、このエリアはみんな入っていいよみたいなものを、今日ちょっと市長さんに一言、将来の展望を言ってもらいたいんだけれども。（笑声）というのは、誰かの土地だからそういうのを取りに行きたくても、生活の中で森林や和ハーブと身近になるためには、やっぱり気楽に山に入ってちょっと摘んで、家に帰って、それを先ほど御紹介いただいたようなジェノベーゼとかいろんなお料理に使うということができますけども、日本ではそれがなかなかできないですね。

だから、何かそういう自然に取れるようなところを指定して、それを公園化するみたいな、公園というのも何ですけども、そんなようにしていただくと、またそうなってきたらみんなでそこに道を造りましょうとか、さっきの広葉樹の葉っぱ、落ちた分を畑にまいて、そして土をよくするとかというような、市民活動的にもそういうのをやっていって、また本格的にじゃあそういうふうな農業をもっと推進したいというような、循環がうまくいくんじゃないかと思うんですけども、いかがでしょうか。

○**江原達也　長門市長**　実際、私も今日ここへ来るまで、ハーブといったら嫁さんがベランダで作っていて、だからパスタを作ったときにちょびっとベランダへ行って切って振りかけるのがハーブだと思っていたんですけど、ゆずきちとかそういったものまで全てがハーブだという認識というのはなかなかなくて、今日は最初にハーブロード、2.5キロという話があって、2.5キロハーブを全部植えていくのは大変だなと最初思っていたんですけど、いや、もうそこにあるものが全部ハーブだということなんですよね。ですから、これはうちでもできるなというのはちょっと思ったりもしてます。今、水谷先生のエリアを開放するというのもこれはいい案だなと思って、ひとついただいていいかなと思っているんです。そういったのは本当に今日来て幾つかひらめきもいただいたんで、いろいろ生かしていければいいなというふうに。

○**古谷**　例の富山の道の駅の館長が、地域住民と知り合いなんですが、和ハーブロードを造るときに、いい山道になっているところは、どっちが地主か分かんないでしょ、いいやって。だから良いよって。その代わり整備をちょっと町のお金でしたりとか…、森林環境税使えばいいと思うんです。森林環境譲与税、あれすごい予算出ているんですけど、かなり使い道が広いので、森林の例えば所有している方に、森林の例えば自伐業者とかを使って整備する代わりに、雑木で切っているクロモジって和ハーブが、杉の下にいっぱい生えている。捨てちゃうんですけど、めちゃくちゃ価値があって。（発言する者あり）多分あると思うんです。雑木とか雑草、下刈りしたやつが実はすごい価値があって、そんな感じでうまく使って。

○**水谷**　すばらしいですね。何か宝庫であるのを認証してもらった、ありましたね、もう既に。なかったら。本当にいろんな発見をしていただいて、文献まで当たっていただいて。

ということで、大変いろんなヒントをいただいて、時間もちょっと大分過ぎてまいりまして、この後、御紹介いただいたハーブでちょっと皆さんでお茶を頂くことになって、魅力をさらに体で実感していただくということでございます。

○**安倍**　何か質問があれば。

○**水谷**　皆さんのほうからどうぞ。お名前と御所属なんかありましたらおっしゃってください。

○**観客１**　山口市から来ました西本葉子といいます。今日は、山口食育クラブの仲間と２人でやってきました。食べることに興味があって、野菜にまず興味があったということ、野菜って人間が作っている中で、ハーブというのがもともと野菜づくりをする前から人間が食べていたものなんじゃないかと思って、イメージがやっぱりそれこそ言われるように、パスタの上に乗せるくらいのイメージだったんですけど、一

番最初の沖縄のおばあが食べていた何か炒めもの、あれと思って、野菜の食べ方ですよね。そういうふうに御飯になっているハーブというのは意外に多いのかなと思ったんですけど、どうなんですか。御飯になるというか、薬草とかじゃなくて、おかずになる。

○**古谷**　正確に言いますと、我々がハーブと言っているのは有用植物を全部言っています。野菜もハーブと言っているんですけど、狭い意味では香りが高いとか、いわゆるハジカミとかつけ合わせのそういうようなもの（「薬味」と呼ぶ者あり）薬味。今のはテレパシー。

そういうものを狭義でハーブといいますけど、沖縄の場合は、あそこは離島じゃないですか。離島だからものの流通ができないとか、それから畑にする土地が少ないので、海に囲まれているでしょ。足元の植物を活用する知恵がすごい発達しているというのがありますが、御質問でいうと、野生でももともとアクが少ないようなものがいっぱいあります。例えば、さっき言った長命草とか、ツルナって分かりますか。あと山に行くとオオバギボウシ、ウルイです。ウルイとか野生のミツバとか、新芽はもう大体食べれます、それこそ。なので、ハーブが野菜というか、野菜ってもともと野でしょ。本当あれ野生の食事。本当は蔬菜と言うんです、今でいう野菜のことを。だから、ミツバ、セリなんていうのは本当は野生に生えているものを食べたほうがおいしいです。けど、今野菜になってるじゃないですか。

○**観客１**　そうですね。スーパーに並べているものは。

○**古谷**　おっしゃったように、栽培してあくを抜いて食べやすくして、もう畑でしか育たないようなものを恐らく野菜とおっしゃっているんです。

○**観客１**　自生できないんですよね。

○**古谷**　自生できないです。畝をつくってこうやる。どこで区切りをつけるか、区切りつける必要ないと思うんです。御質問の趣旨何でしたっけ。趣旨分かんなくなった。

○**観客１**　自然にあるものだけで食べて、もしかしたら生きていけるんじゃないかなと何かお話聞いていてちょっと思ったんです。それこそ本当、忍者じゃないんですけど。

○**古谷**　でんぷん系とかはちょっと厳しいかな。でんぷん。だからでんぷん源としてさっき出てきたトチノキとかドングリが縄文時代に使われたんですけど、あくを取ってやらないといけないので、でんぷん源をどうやって確保するかというのが人類の歴史なんです。血糖値をぎゅうっと上げるんです。野生にはでんぷん質ないんです。ヤマノイモというのは。

○**安倍**　自然薯とか。

○**古谷**　そうです。さすがぴんと来たんだね。（笑声）自然薯はヤマノイモです。日本の野生で唯一イモが取れるのがヤマノイモ。それからユリの根っこ。ユリ系だとオオバユリというのがあります。それからあとは、毒なんですけど球根です。球根を毒出しして使うと、そういう文化があちこちに残っています。ちょっと大変。なので稲というのが来て、収入量が多いですね。１房にいっぱいつくんで、稲は稲で水田の……。

○**観客１**　じゃあやっぱりお米はすごい大事だということ、今お話聞いて分かりました。お米だけは作っちょかんにゃいけんですね。

○**古谷**　どっちが、健康によって糖尿病になる原因も米ですし。

○**観客１**　白米にして食べ過ぎるから。

○**古谷**　そういうことです。なかなか難しいとこがあるんですけど、そばとか粟とかヒエとかこういうものは大きく和ハーブです。

○**観客１**　だから自生のほうに近いという、何かやっぱりわざわざ作るものよりも自然に近いほうが体にはいいんかなという感じで取っておけばいいんですか。

○**古谷**　何をもって体にいいかということなんですけど、血糖値が上がりにくくて完全食品に近いです。丸ごと食べれば。だけど、白米とか精製しちゃうと、白いのは糖質しか残らないし、GI値という血糖値がばんと上がるんで、健康にあまりよくないかもしれないという。

○**観客１**　分かりました。

○**古谷**　穀物だけでも１時間ぐらい講座ができる。
○**観客１**　分かりやすかった。ありがとうございました。
○**水谷**　この辺にしときましょう。ありがとうございます。
もう一方ぐらいいかがでしょう。
○**観客２**　下関から来ました（キムラ）といいます。僕は専門が建築なんですけども、今さっきお話があった柿渋とか漆とかというのを使っている延長で、ヒノキとかそういう杉とかいろいろ香りとかを使って虫とかを寄せないように作っているんだなあと思う中で、最近、昨日も事務員さんがクモが出てきて、めちゃめちゃきゃあっと言ったんですけど、クモとか蚊とかああいうふうなものを寄せつけないような、さっきのイノシシを寄せないような植物を植えるみたいなのがある中で、家の近くにこういうものを入れるとそういう夏場、これから害虫になるようなものを寄せつけないんでしょうか。
○**古谷**　ないです。
○**観客２**　ないんですか。分かりました。（笑声）イノシシだけ。
○**古谷**　フィトンチッドと言います。ヒノキや木から出て、森の香りです。あれが少し効果がありますので、僕も実は５、６年前、建築家と組んでフィトンチッドの家という企画をつくったんです。だから、柱とか材に香りが出る材を使って、ちょっと癒やされたいときはちょっとナイフで傷つけたり、そういう場所を作って香る、それは多少虫よけにはなると思います。ただ、クモとか蚊はちょっと厳しいかな。ヒノキとか使ったら多少は。普通の家よりは来ないぐらいだと思います。
○**水谷**　ありがとうございました。他にいらっしゃいますか。
○**観客３**　感想を言います。山口県立大学大学院２年の松浦奈津子と申します。私は岩国の錦町というところで育ったんですけど、錦町も95％ぐらいが山の中で。今、お話を聞きながら、私も和ハーブというイメージが最初分からなかったんですけど、最初の基礎知識のところでヨモギとかもいつも取りに行ってといって、夜御飯のときにヨモギを取りに行ったり、昨日もフキを取ったり、ワラビとか、ちょっとないからタケノコ掘ってきてとかやっていたので、何かそれを本当に、そこにあるもので結構作って食べていたというのがあって。聞きながら、まさに何かそういう暮らしを子供の頃はしていたんだなあと思って、和ハーブに親しんできたのを、今になってこれを聞いて改めて感じることができました。
　山口県が薬草のエリアというのが、『防長風土注進案』に出ていたというのがすごい驚いて、これほど何か存在しないけどニーズがあるものというのを、何か地元の方たちと一緒に掘り起こして、何か山口ならではのそういうものができたらすごい面白いんじゃないかなと思いながらお聞きしました。ありがとうございました。
○**安倍**　お父さん、クロモジ取ってきてくれたりしますか。
○**観客３**　そうですね。
○**安倍**　今日も。
○**観客３**　お茶室があるんですけど、お茶室のところにクロモジをちょっとやって、何か水をぱっとやったら香りが来るというので、今、料亭の方にも頼まれて、うちの山からクロモジを今大量に。
○**古谷**　クロモジ、今ブームですから。
○**観客３**　そうなんですか。大量にあります。うちに今大量に山から取ったのをまとめて、今、たくさんあります。ブームなんですね。
○**水谷**　理事長も一緒に歩いてこようか。
○**安倍**　お父さんマツタケも取ってきてくれる。
○**観客３**　ぜひうちの山にも遊びに……。
○**水谷**　ありがとうございました。BLUE & GREEN ART PROJECTとしては、生活の中に今日伺ったようなことをいかにして取り込んでいけるか、そしてまた地域創生でこういったことをビジネスにどうやって展開できるかというヒントをたくさんいただきました。そういう意味では本当に感動して、今日は和ハーブの話と思ったら地域創生の可能性が満ちあふれているというお話まで伺いまして、また、いろんな

形で先生方には来ていただいて、山口の活性化にぜひとも御協力できたらいいなというふうに思いますので、本当に今日はどうもありがとうございました。（拍手）

○**安倍**　いいですか。言い忘れたことが、最後。（笑声）

○**古谷**　ちょっとだけ補足すると、今食の話が出たんですけど、さっきの御質問で。今から１か月ぐらい八百屋いかなくて済むんです。新芽だから、山の中のもんだけで、１時間もあれば２週間分ぐらい取れるんです。そのぐらい豊かなところにありますけど、日本人はその後に、いかに冬、さっきでんぷん源と言いましたよね。でんぷんをいかに取るか、それからビタンミンＣというのがあって、ビタンミンＣ取らないと、血管が切れちゃうんです、簡単に。コラーゲンをつくるビタンミンＣで。そのビタンミンＣ源をどうやって確保するのか、それから食物繊維はどうやって確保するか、山を。そのときに保存の文化が発達しているので、乾燥、塩漬け、それから発酵です。要はいかに水分を抜いて細菌、微生物を繁殖させないかという知恵があって、それは漬物だったり、それから干して水で戻すとか、砂糖漬けもありますし、それから発酵というのは乳酸菌というちょっと特殊な細菌類、乳酸菌って弱酸性なんです。乳酸菌がはびこる。酸性で生きていける病原微生物がいないもんで、病原菌がいないので、結果的に乳酸菌をずっと生きさせておけばずっと永遠に保存できるよ、これを発酵と言います。発酵保存文化というんですけど、その文化がいっぱい日本にはありますから、それを持って春とかに取った植物資源を１年中食べれるようにするという、煮物とかもですよ、しょうゆ漬けとか、そういうような文化があるんで、それを応用するとさっき言った山の中で１年生きるとか……。

○**観客の声**　夢じゃない。何かあったときに山に逃げればいいみたいな。

○**古谷**　保存料とか要らないですよ。アミノ酸等とかああいうの要らない。

○**安倍**　イノシシもいるし。

○**観客の声**　つかまえれば。

○**古谷**　川魚もあるし、あと、里山にして無農薬にした場合は、カエルとか虫が繁殖するでしょ。カエルを食べるんです。だから、里山というのはでんぷんも取れてビタミンも取れて動物性タンパク質も取れるから。

○**安倍**　ザリガニとか。

○**古谷**　ザリガニとか。実は里山を復活させることで。

○**観客の声**　備蓄しなくても山があるというのがいいですね。

○**古谷**　山と田んぼがある。ミックスされていると理想郷になります。

○**観客の声**　理想郷ですね。

○**水谷**　じゃあ長門市はその理想郷ということで、山もありますし、海ももう何でもありの宝庫だらけということで、今日は（笑声）ここらで終わらさせていただきたいと思います。本日はどうも皆さん、ありがとうございました。（拍手）

付録Ⅲ（2021-2）

Blue & Green Art Project 2021 Vol.Ⅱ
ビーチクリーン＆シンポジウム「海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす　～SDGsから白木半島地区の可能性を探る～」
日時：2021年６月27日
場所：周防大島町橘総合センター（大島郡）
シンポジウムの部
パネラー
　新山玄雄（白木半島地区コミュニティ協議会会長）
　藤本正明（山口県東部海域にエコツーリズムを推進する会会長）
　内田博陽（なぎさ水族館飼育員）
　藤本淨孝（周防大島町長）
コメンテーター
　安倍昭恵（ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会名誉顧問）
モデレーター
　水谷由美子（山口県立大学国際文化学部教授・学部長）

【挨拶の部】

○**西村一樹　司会**　皆さん、こんにちは。ただいまから、ブルー＆グリーンアートプロジェクト2021　in　周防大島　シンポジウムを開催いたします。

　私は、本日進行の担当をいたします白木半島地区コミュニティ協議会の事務局、西村一樹と申します。どうぞよろしくお願いします。（拍手）

　それでは初めに、主催者のブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会委員長の水谷由美子より御挨拶を申し上げます。

○**水谷由美子　ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会委員長**　皆さん、こんにちは。本日は大変暑い中、たくさんお集まりいただいてありがとうございます。私は、ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会の実行委員長をさせていただいているとともに、山口県立大学国際文化学部長をさせていただいておりまして、この２つの組織が本日主催をさせていただいているということで、僭越ではありますけれども、御挨拶をさせていただきたいと思います。

　もともと私ども、周防大島町との御縁は、本日、御来賓で来ていただきました柳居俊学山口県県議会議長と、アートの展覧会でお話しする機会があり、そこでいろいろと御示唆頂きまして、周防大島町の魅力が何か、これをどうやって発信していくかというようなことを考えるきっかけを頂きました。

　また、本日は、ブルー＆グリーンアートプロジェクト共同研究者であり、また名誉顧問をしていただいております安倍昭恵夫人にも来ていただいております。

　いろんな方の考え方、知恵といいますか、あるいは経験、こういうものを私ども、学生とともに受け継がせていただきたいと思っております。ＳＤＧｓと言われる国連で採択されました持続可能な発展目標について、海と陸の問題、特にそれらをつなげて開発していくという、そういった立場で、昨年よりこの実行委員会を立ち上げさせていただきました。

　ちょうどそこで、周防大島町は、まずはミカンで大変有名でございますけれども、新しく、十数年前ですかね、ニホンアワサンゴの群生地があって、これはもう世界に誇るものであるということです。私はそれまでは全然知らなかったんですけど、冬のアワサンゴの写真を写した一枚のポスターを偶然、拝見する機会があり、その不思議な姿と美しさ非常にインフル―を受けました。これは本当に世界に誇る美しいも

のだと思いました。四季折々に姿を変えているということで、なぎさ水族館あるいは地家室のほうに頻繁に行かせていただいて、いろいろ地域の皆様に御指導頂いて、その魅力について深く感じております。

ということで、あちらのほうに飾っております作品は、ちょっとカジュアルなウエディングドレスですけれども、皆さんに向かって左側は、冬のアワサンゴの写真を、ここに今日いらっしゃる藤本正明さんの写真を使わせていただいて、加工してデザインしておりますし、上の服はアロハシャツのイメージで作っております。また、ニホンアワサンゴは夏には産卵を迎える時期で赤い姿になるということで、その姿の写真からテキスタイルをデザインしています。

というようなことで、大変美しい自然があって、そしてそこにはこういった魅力的なサンゴがあるというので、今日のメインのお話の中には、このニホンアワサンゴを周防大島町のブランディングとして活用していくということが話題になるかと思います。

また、基調講演は、白木半島地区コミュニティ協議会の御協力を得て、この地域を中心として、周防大島町の豊かな歴史、文化、そして人々の営み、それを学ばせていただいて、大学生だけじゃなくて、今日は高校生の皆さんも来ていただいておりまして、高校と大学、そして町が一緒になって、この周防大島町のブランディングを一緒にやっていこうという、そのための学習会といいますか。そういうふうに、今日はその出発点になればいいなと思っております。

同時に、もう皆さん、ニュースで御存じかもしれませんが、４月の終わりに、周防大島町と周防大島高校とそして山口県立大学が三者連携を締結されたました。我々大学としては、外から観察して何か提案するのではなくて、この地元の皆様と一緒に周防大島町のことを一緒に考えて行動していく、そういうふうな足がかりができまして、構想がより具体化するといいますか、そういうふうになっていく、そのための決起式じゃないんですが、今日はそういう機会になったらいいなというふうに思っております。

大変長くなりましたけれども、本日は本当に、さっき言った白木地区コミュニティ協議会の皆様の御協力や環境保全のグループの皆様、そして周防大島町の皆様の大変なる御協力を頂いて本日は開催させていただくことに対して、まずはお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

それでは、ここで御挨拶とさせていただきます。（拍手）

○**西村**　皆さん本日ですが、午前中は旧東和、白木半島地区にございます牛ヶ首、シーボルト上陸の地というところがあるんですが、そちらのほうで県大生の皆さん、地域の皆さん、そして郵便局の局長の皆様、それからエコツーリズムの団体の皆様と一緒に海の掃除をしてまいりました。

その多くは、一番多かったのはやはりカキパイプ、広島から流れてくるカキパイプというのが大量でございまして、皆様にたくさん集めていただきました。それから、ペットボトルであったりとかプラスチック類、自然に返らないごみというものがやはり見受けられましたので、それを皆様に集めていただきました。

また、皆様、日頃から海岸清掃、御協力いただいておるかと思うんですが、時代の変化と申しますか、今までになかったマスクというものが漂着しておりますので、やはりコロナの影響というものが、こういった海岸のごみにも現れているのかなと感じました。

また、それに伴い、あと発泡スチロールが粉々になって、皆様、お耳にしたことあるかと思うんですがマイクロプラスチック、小さな粒のものも大変かなり漂っておりましたので、そういったのも大きな問題になるのじゃないかなと思っております。

すいません。ちょっと、間で報告をさせていただきました。

続きまして、御来賓の山口県議会議長、柳居俊学様より御祝辞を賜りたいと思います。柳居議長様、よろしくお願いいたします。

○**柳居俊学　山口県議会議長**　柳居俊学でございます。一言お喜びを申し述べさせていただきます。

ブルー＆グリーンアートプロジェクト2021 in 周防大島町の開催を心より喜びを申し上げます。実行委員長の県立大学の水谷教授はじめ、そして遠路はるばるお越しを頂きましたコメンテーターの安倍昭恵先生並びに開催に当たりましてお力を賜りました関係の皆様方に心よりお礼を申し上げ、御礼を申し上げる

次第であります。

早いもので、ニホンアワサンゴが発見をされまして、もう10年が経過をいたしました。この間、環境省の海域の指定、陸城の指定を頂く中で、いよいよあそこにビジターセンター建設が内定をしたところでございます。

そして、白木半島の地域住民の方々が、新山様を中心に夢プランを作成され、このアワサンゴを一つの白木の産物として、豊かな環境、そして人と自然の調和の中で、もう一度白木半島をよみがえらせていこうというプランができ上がったところであります。そういうときに、水谷先生や昭恵先生がこうして大島にお運びを頂きまして、このようなすばらしい催し事をしていただきますことを本当にありがたく、心より感謝を申し上げる次第であります。

私ども、この島という環境の中で日暮らしをしているわけでありますが、やはり絶対条件が、海がきれいであるということだろうと思います。そういう中で、ここで生育する約560種類の水生生物を記録に残して地域の発展につなげていこう、そういう試みをなぎさ水族館を中心として30年来活動を続けているところでございます。このたび、こうして、県立大学の水谷先生をはじめとし、そして周防大島高校、藤本町長の周防大島町と協定をする中で、新たな活動がこうしてスタートすることを本当にありがたく思っています。

どうかひとつ、本日は意義あるシンポジウム第１回目ということでございますので、皆さんとともに、このテーマに沿って、実りある豊かなシンポジウムになりますことを心より期待を申し上げ、御挨拶とさせていただきます。

長くなってすいませんが、付け加えさせていただきますと、昭恵夫人が、長門で、棚田であるとかモンペッコとかいろんなファッションのイベントをしておられます。６回目の最後に御案内を頂きましたので、私は昭恵夫人と一緒にステージに上げてもらえるものと思って長門に行きましたら、一番前列で照明係をしたところでございまして、それが御縁であります。照明係です。よろしくお願いします。（笑声）（拍手）

○**西村**　柳居議長さん、ありがとうございました。

それでは、これから基調講演を行います。講師は、白木半島地区コミュニティ協議会の会長、新山玄雄様でございます。

新山様、どうぞ演台のほうへお願いいたします。

新山様のプロフィールは、本日のプログラムにも記載しておりますが、新山様は初代の周防大島町議会議長、そして白木半島地区６自治会で組織されたコミュニティ協議会の会長として地域づくりをリードしていただいております。

本日の基調講演の演題は、「大切にしたい白木半島の暮らし・自然・文化・歴史」でございます。

それでは、新山様、よろしくお願いいたします。

○**新山玄雄　白木半島地区コミュニティ協議会会長**　ただいま御紹介いただきました新山でございます。

照明係パート２でございまして、（笑声）いつも、議長さんのところで、よく出ることがあるんですけど、まあよく似てるなと言われます。なかなか、光はこちらのほうがはるかにすごいんですけど。（笑声）そういうことでございます。よろしくお願いします。

今日は、基調講演というと大変大げさであります。白木半島のちょっと紹介というようなぐらいを、時間もあまりありませんので。

資料をちょっと持ってまいりました。これは、後でしっかり目を通していただきたいなと思います。これがレジュメです、今日の。この内容に沿って、ちょっとお話を進めていきたいと思います。

それと、次に、同じようなものですけれども、この自治体から、コミュニティ協議会のことと白木半島のことを簡単に書いてと言われまして、この４月に書いたんです。

それと、白木半島マップというのがあったと思いますが、この白木半島のマップと、これはコミュニティ協議会でつくった白木半島の大体の見取り図、それと、最後が郷土大学の会報という、ところ、私が

話すことはずっとつながっておりますので、この４つを持ってまいりました。

これを見ていただくと、白木半島地区って６つの自治会で構成されているんです。伊崎と地家室と佐連、沖家室、大積、小積と６集落の自治会が１つになって、非常に人口減少の激しい、そして高齢化の激しい、そういうところで、何とか、それこそ今で言う持続可能な、次の世代にちゃんと受け渡していけるような、そういう地域をつくっていこうということで協議会というのを結成したわけであります。

そういう中で、夢プランというのをつくって、やっぱりプランが必要だろうというようなことで。その基本テーマを、「大切にしたい白木半島の暮らしと自然・文化・歴史」としたわけであります。そして、これが、結構厚いんですが、夢プランということであります。それがもう、４年前になります。そして、これがダイジェスト版です。白木半島地区夢プラン。細かな事業計画というか、夢がいっぱい書いてあります。それをちょっとずつ実践していこうということでスタートしたわけでありますが、実際のところをいうと、スタートしてすぐコロナになって、それでなかなか思うようにも行かなかったというところがありますけども、そういうことでスタートいたしました。

そして、歴史というと大げさですが、大体、大まかにお話を申し上げますと、この地域というのは、もう随分、飛鳥時代というか、その頃から海上交通の一つの要だったところなんですね。特にそれが顕著になってきたのが、江戸時代になってからであります。

地家室というところがあります。ここに書いてありますが、「下関より御手洗よりも船の着くのは地の家室」。地の家室というのは、地家室のことであります。地の家室、そして沖の家室。家室の字を（カムロ）というんですね。加室合戦という話もありましたけども。

そういうところで、たくさんの船が、昔は帆船ですから、帆を立てて行くんですね。だから、風待ちとか潮待ちとかいうものには、そういう港が必要なんですね。避難する場所が必要なので、地家室と沖家室が対になってそういう場所になったんです。だから、あそこにはたくさんの船が寄るようになりました。

沖家室にはお寺が１軒あるんです。私のお寺なんですけれども。そのお寺を建てるときの趣意書といいますけども、そのときに、ここは多くの貴人、尊い方たちが通るけれども、それが泊まる場所がない。その方たちがお寺をそれに当てたいというので、いわゆる本陣をつくるということでお寺をつくったということであります。そんなんで、参勤交代、九州の大名とか長州とか宇和島とか、そういう方々が、当時は瀬戸内海を船で行き来していた。陸路よりも海路を通って大阪まで行って、それから東海道は歩いていくわけですね、太平洋は波が強いですから。瀬戸内海では海路を通っていったわけです。宮本先生も海のシルクロードと言われました、瀬戸内海を。そういうことがございました。

ですから、どんどんそこで、江戸時代に―、もう、この話をすると１日ぐらい欲しいんですけど―、すごくどんどん発達して、江戸時代というのは人口がもう横ばいです。日本全体で。3,300万人から３,500万人です。ですが、周防大島は何倍にもなるんですね。特に、私の小さな島と地の家室も合わせてですが、それはもう20倍とか30倍ぐらいになるんです。ですから、あの小さな島に、家室千軒という言葉が残っていますが、実際は700軒ちょっとの家があったんです。3,000人以上の人がそこにいた。ちょっと信じられませんけれども。そして、地の家室を合わすと5,000人ぐらいいたという、あの周り。それぐらい多くの人が生活できる要素といいますかね、そういうのがあったということであります。

ですから、明治になってからは台湾、朝鮮とか、ハワイとの交流がありました。特にハワイにたくさんの移民が出た。この白木半島から出て行った。大島もそうなんです。もう基本的に、構図は大島も白木半島も一緒です。それがちょっと極端なんですね、白木半島は。特に、沖家室島というのはそれが極端に増えるというようなことがあって、そしてハワイとの交流がありました。

ここにある写真はハワイで、去年行ったんです、コロナの前に。もう直前、早くといいますか、直前に行ってきまして、大変、大歓待していただきました。しょっちゅう行ったり来たりしておるんですが、ついこの前も、今月13日ですけど、日曜日に、Zoom交流会、向こうでハワイの人たちが全部オンラインで結んでいるんですね。それで、こっちと協力して回線をつないで、いろいろ交流するんですけどね。向こうの人の呼びかけでは、ふるさとを学ぼうというのがテーマです。私がちょっと古い歴史のことなんかお

話ししたりして、非常に盛り上がりました。もう、向こうは60何人の人が、アメリカは非常にインターネットの環境がさらに進んでいますから、皆、個人で持っているんですね。そんなふうなことでございました。そういう特徴があります。

それで、この写真の横が高札場というんですけど、藩のいろんな情報という、高札する、そういう場ですけども、やっぱり拠点でないとないんですね。あの島には、御番所というのがある。藩の出先の機関ですね、御番所。そして、御舟蔵というのがある。そして高札場というのがあって、それに本陣というのがある。私のお寺の後ろの山は殿様山というんですね。それと、物見山というんですけど、そして狼煙場があるんです。ですから、何かそういうふうなもの全部そろっていて、それをちゃんと掘り起こして、みんなにちゃんと見ていただけるようなものができたらというので、自分が思うんですよ。この高札場の復元も、みんな寄附を集めて、自分らの力でやった。これは２間しか幅がないんですが、本当の高札場はまだ立派であって、３間半あったんです。札場にそういうものがあってということであります。そういうのもありましたよということであります。

シーボルトの上陸記念碑というのがあります。今日、牛ヶ首というところでビーチクリーン、あれをやりまして、あそこのところにシーボルトが泊まって、植物採取をやったり、そして写生をしたりしているわけです。ですから、宮本常一先生が、よく、ここにはシーボルトが上がったし、たくさんの人がここを行き来したというものの象徴みたいなもの、シーボルト上陸記念碑というものを造れと、こう言われておったんですよ。それで、シーボルト上陸記念碑というのを、これもみんなでお金集めて造ろうと思ったら、ちょうど宮本常一記念事業というのがありまして、当時、柳居町長に始めていただいて。それの事業の中でシーボルト上陸記念碑というのを造ったんですね。

繰り返して言いますけども、つまりシーボルトを顕彰するんじゃなくて、あそこはたくさんの人が通って、その文化の一つの拠点といいますかね、そういうものになったんだよということ、そういうものの象徴として記念碑を造れ、こういうことなんですね。

石風呂というのもあります、これは地家室に。それはすばらしい石風呂です。

そして、加室合戦というものがありました。それの記念碑もあります。小積の厳島神社、これは管弦祭がすばらしいです。小積と大積の方が今でも守っておられる。やっぱり海に開けた神社なんです。やっぱり、皆、海に関係がある、あの白木半島はですね。

そして、そういうこともあって、農林水産庁より、「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」というのにも選ばれたりして、ともかく海に関して、大きな役割を果たしていた。今で言ったら、高速道路のサービスエリアみたいな。今は一番末端のようでありますけれども、やっぱり先端だったんですね。それが末端になって、次はまた先端になるという時代が必ず来るだろうと思っておりますけども。いうことであります。

急ぎます。

ニホンアワサンゴの群生地が発見されました、10年ちょっと前。これは藤本先生から後で詳しくお話があると思いますが。2013年に瀬戸内海の国立公園の海域公園地区ということで指定をいただきました。そして、あの後、陸域なんですね。海と山はやっぱり連動してる。海のみで環境保全なんかできんのですね。海と山は深く結びついておりますし、その辺ことは藤本先生が本当に詳しく調査しておられますので、お聞き願いたいと思いますけれども、その陸域の、陸のほうも第２種特別地域ということであります。今でいう国立公園と。2017年です。

そういう中で、ニホンアワサンゴというのが環境保全のまたシンボル、象徴だと思うんです。それをちゃんと保全して、それをちゃんと活用できるような、そういうふうな仕組みをつくっていこう、そういう人材を育てていこうというのが私たちの思いであります。

そういう、ちょっと火がついたというようなときに、交通インフラの整備とか書いてありますが、今年、佐連アワサンゴトンネルができているんです。通ってない方はぜひ通っていただきたいんですが、すばらしいトンネルを造っていただきました。本当はたくさんの人に見ていただいて、町を湧かせてという、

大々的に思っていたんですが、５月の末でしたから、もう、式は取りやめ。だけど、やっぱり何か気持ちを表したいということで、柳居議長さんにもわざわざお越しいただいて、一緒に記念植樹をやって、一緒にトンネルを通った。それだけなんですが、トンネルを通る前に、誰かが「万歳しようや」と、こう言うたんですね。ちょうど所長さんがおられたから、所長さんにお願いして、万歳って会長が万歳している、それがこの絵です。だから、この地域の人においでいただいて、これも三々五々集まっていただいたということであります。

そして、記念植樹。開通式じゃないけど、開通記念でやっぱり何か気持ちを残しておきたいというので、それをしたんですね。この場所に、いわゆる拠点施設、ビジターセンター、つまりこれからの拠点になる施設をつくろう、こういうことなんであります。

そこに拠点施設をと書いてありますけれども、大体、そういう拠点になる施設が必要です、いろんな地域振興とかいうものを考えた場合。それをやっていこうというので、自然体験の促進の場として、地域における保全活動と連携、交流の場であると。地域の暮らしや自然や歴史や文化も一体的に学習ができる、学ぶことができる、体験することができる、体感することができる、そういう場をつくろうじゃありませんかということで、今、地家室園地活用推進協議会というのができて――会長はちょっと今やっていますが――その検討に入っているということであります。非常に私どもも期待をしておるということであります。

次のページに、課題が書いてあります。ちょっともう時間がございませんので、一々申し上げませんけども、さっきも申し上げました白木半島の暮らしとか自然とか歴史とか文化を学習・体験できる場をつくっていこう。そして、それを担う人材を育てていく、これが大事だろうと思います。

前のページの下にちょっと戻っていただきたいんですが、これが私の申し上げたいことなんでありますけれども、「白木半島には海や山、美しい風景、ニホンアワサンゴの世界的な群生地がある。古来より海上交通要衝としての歴史・文化・暮らしがある。その貴重な資源を守り、再発見し、その資源を活用する道を探っていきたい。また、そういう御指導を賜りたい」、こういうことであります。それは、「世界で広がりを見せている――水谷先生がおっしゃったＳＤＧｓという―17の目標のうち、特に「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさも守ろう」という目標につながるものと思う。その視点を大切にして、ささやかな、身の丈に合った活動を心がけていきたいと思います」、こういうことです。

そして、最後に、今日は県立大学の学生と周防大島高校の学生さんが主にということであったので、宮本先生の、最後に、言葉を述べさせていただきました。「大事なことは、規格化されることではなくて、みんなで企画し、お互いに発見をしていく。その発見していく一番大事な基になることは何であるかと。やはり自分が今住んでいる場を、この生活の場を基として、その中から新しい生き方を見つけていくことです」。自分の足元が一番大事です。そこから世界につながる。それから、国につながる。世界につながる。地球にもつながってくるんですね。だから、足元をちゃんと見なかったら、もう絵に描いた餅みたいなもんですから。まず、そこから始めていただきたい。「一体進歩というのは何であろうか。発展というのは何であろうかということであった。失われるものが全て不要であり、時代遅れのものであったのだろうか。進歩に対する迷信が、退歩しつつあるものを進歩と誤解し、時にはそれが人間だけではなく、生きとし生けるものを絶滅にさえ向かわしめつつあるのではないかと思うことがある」、これは40何年も前に宮本先生がおっしゃった言葉です。

SDGsの17の目標を見ていると、ああ、これは何かどっかで聞いたことがあるし、宮本先生がこのようなことをおっしゃっていたなというような感じがします。今、安倍先生とちょっと前にお話ししたんですが、日本人というのはそういうものをもともと結構持っていたんですね。だから、そういうものを再発見していく、見つめ直していく、そういう過程で新しい地域づくり、新しいひとづくりができるんではなかろうかと思うんですね。

そういうことを考えたときに、白木半島というのは一番高齢化が進んで、過疎化が進んで、人がおらん地域です。だけど、アワサンゴがある、豊かな自然、美しい景観というのが残っているし、人との結びつ

きもちゃんとあるわけです。そういうところから、また再出発をしていく。そういう、また一つのモデルとなるというのはちょっと大げさですが、何かそういうものにつながっていけたらいいな。そして、そこでみんなが学ぶ、学び合う世界、育て合う世界をつくっていくということ、これは宮本常一先生がずっとおっしゃっていたことであります。

最後に――最後にというか、――郷土大学通信、今回あえて、これはもう３年前のあれなんですけど、これは付録みたいですけど、これもつけました。やっぱりみんながここで学び合い、そして育て合っていく、こういう世界をつくろうということで始まった宮本先生の郷土大学であると。地域はそこに住んでおる者が自らつくっていかない限り、決してよくなることはない。まず、そこに暮らす者、そこで暮らす者が自ら立ち上がっていく、そしてそれに対してみんな応援を頂くという、その連携ネットワークというのがこれからの時代はとても大事なことになるんではなかろうか。白木半島を舞台として、そういうドラマが展開できたらありがたいなと思います。

今日は、こういうふうにして白木半島を舞台にしたテーマで、白木半島をテーマとしてこのようなシンポジウムを開催していただいて本当にありがとうございました。一つの大きなきっかけになる、新しい出発点に今日はなったと思います。心から感謝いたします。

御清聴、どうもありがとうございました。（拍手）

○**西村**　新山様、ありがとうございました。会場の皆さん、もう一度盛大な拍手をお願いします。ありがとうございます。（拍手）

次に、パネルディスカッションを行いますが、準備をさせていただきますので、後ろの時計で７分間休憩、こちら側の時計で14時50分から開始させていただきたいと思います。それまでの間は、トイレ休憩であったりとか、お茶休憩、後ろのお菓子等もつまんでいただければと思います。

じゃあ、それでは、休憩に移らさせていただきます。

……

○**西村**　それではパネラーの皆様の御紹介をさせていただきます。

モデレーターは山口県立大学国際文化学部教授、水谷由美子さん。

コメンテーター、ブルー＆グリーンアートプロジェクト共同研究者の安倍昭恵さん。

パネリストは、基調講演を頂きました白木半島地区コミュニティ協議会会長、新山玄雄さん。

山口県東部海域にエコツーリズムを推進する会会長の藤本正明さん。

なぎさ水族館飼育員の内田博陽さん。

そして、藤本淨孝周防大島町長でございます。

それでは、モデレーターの水谷さん、よろしくお願いいたします。

○**水谷**　御紹介ありがとうございました。

ただいまから、パネルディスカッションを行わせていただきます。

今回は、テーマといたしまして、「海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす～ＳＤＧｓから白木半島地区の可能性を探る～」ということにさせていただいております。

環境問題ということでございますけれども、私どもはデザインの活動をしておりまして、その魅力や課題を発見したり、解決していく、それをデザインという方法でもってやっていこうという、そういう立場で進めています。今日はそんな課題を解決するなんておこがましい話ではございますけども、まず、この魅力的な歴史や文化、また新しく発見されたニホンアワサンゴといったような宝石のような魅力的なものをお持ちのこの周防大島の中の白木半島というところ、そこからいろんなことを発信していただけないだろうかという、そういった可能性について、これから探っていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

そして、また、フロアの皆様からも、講演のほうでは御意見を頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

私ども、このブルー＆グリーンアートプロジェクトは、昨年から活動を開始しました。その前に2013年

からアグリアートフェスティバルをやって来て、そこでは陸の問題を主にやっておりましたけども、去年から海と陸をつなげてということで、そういったことの共同研究を2013年から、隣にいらっしゃいます安倍昭恵様とやってまいりました。

一言、開始に当たりまして、お話を頂ければと思います。

○**安倍昭恵　コメンテーター**　皆さん、こんにちは。御紹介いただきました安倍昭恵でございます。夫は安倍晋三でございます。（笑声）

今日は、シンポジウムに参加をさせていただいて、この周防大島に来させていただいて、昨日から大変すばらしい環境と温かい皆さんの歓迎に、町のファンになっているところです。

私は、結婚した頃に、サンゴ礁保護協会という、主人の女性のいとこに誘っていただいて、サンゴの生育とか本当に大切だということを学ばせていただきました。しばらく活動していたんですが、だんだんその活動が少しずつ縮小してしまって、サンゴ礁保護協会という会が今はちょっと活動できていないんですけども。

その後、友人たちからの誘い等々いろいろありまして、G20という国際的な会議の配偶者のプログラムの中で環境問題を取り上げていたりあるいは太平洋の島国、島サミットというのが何度か日本で開催されているんですけども、そのときにも環境問題を取り上げたり、この海の環境がいかに大事かということを多くの方に知っていただきたいなと思って、私自身は特別な知識があるわけじゃないんですけど、専門家の方たちをお招きをして、そうした活動をしてまいりました。

今日は高校生もいらしていますし、県立大学の大学生の皆さんもお手伝いにいらっしゃると思いますけども、この自然豊かな環境がいかに自慢できるものであり、すばらしいものであるかというのをしっかり意識してもらいたいなと思います。

高校生はこれから専門学校や大学や、この地域を出ていくかもしれないです。また就職するかもしれないですけども、そうしたときに、自分の生まれ育った地域はこんなにすばらしいところなんだよと。俺たちは田舎者でという思いではなく、本当にすばらしいということをしっかりと心に焼きつけて、もし外に出ていくんだったら出ていっていただきたい。そして、多くの人たちに、ここの地域のすばらしさを語ってもらって、人を連れてきてもらいたい。ここに住んでいなくても、自分たちが生まれ育った地域はこんなに素敵なところだから、１回遊びに来てといって連れてきてもらいたいですし、今、町長も非常にお若いですし、柳居議長も大変、本当、力のある理解のある議長さんでいらっしゃるので、若い方たちの意見、必ず聞いていただけると思うので、また、こんなふうにこの町を変えていきたい、それから今、全国の価値観は本当に変わっているので、こんなふうにこの町を日本中の人に来てもらえるように変えていきたいという思いがあったらどんどん言っていただきたいなというふうに思います。

ちょっとごめんなさいね、長くなって。

皆さん、未来をつくる前に、今、下向いている人もいるけれど、この瞬間瞬間をどれだけ一生懸命生きていかれるかというのが明日につながり、来週につながり、５年後につながり、この瞬間を、本当にみんなの意見を聞いて、今日は自分が何ができるかというのをぜひ本気で考えてもらいたい、そんな時間にしていただきたいなというふうに思います。よろしくお願いいたします。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。高校生の皆さんに情熱的なメッセージを頂きまして、心から感謝でございます。

それでは、早速ですけれども、パネリストの皆様に、自己紹介を兼ねて、現在どのような活動や取組を日頃やっておられるかということをお一人５分程度でお話をしていただければと思っております。

それでは、新山様、藤本様、内田様、そして藤本町長の順番にお願いしたいと思います。

○**新山**　先ほど、講演というと大げさなんですが、お話をさせていただきました、新山でございます。本当に今日はありがとうございます。

私が今、安倍先生のお話をしようと思ったのは、いつも、私がこの大島に帰って思っていたことは、先になる者が後になり、後になるものが先になるという世界がある。やっぱり一番過疎化、高齢化、限界集

落、消滅集落というような一面もありますが、そういうマイナス面をいっぱい挙げてみるんです。本当にマイナス面ばかりでありますけども、そういう中で、いや、そうではないよという見方も確かにある。

これもまた宮本先生にちょっとこだわり過ぎかもわからないですが、教えていただいたことであります。柳居議長さんも今いらっしゃいますが、彼に連れられて初めて宮本先生のところに行ったんです。まだ20代の半ばちゅうか、前半ぐらいの頃です。そのときに、宮本先生は「今暮らしている場所、その足元を掘り下げて行きなさい。それは世界に繋がっている。そこにはかけがえのない価値がある。」とおっしゃった。

別の言葉で言うと一週遅れのトップランナーという言い方がある。遅れている、遅れていると思うけども、一生懸命その世界を大事にしている方は、やっぱりいつの間にか前に、一番大事なことを背負うということはあるんですね。

それと、さっき言いましたけど、末端は先端になる。末端ですが、もとは先端。何をもって先端というんか、ちょっとこれもまた曖昧なことで、自分の足元の価値をしっかり持っているかとか、そういうことが大事だなと思います。特に学生さんにはそういうことに心を向けていただきたい。

それと、いろんなこれから事業が展開する中で、今度、拠点施設もできると思いますけれども、町内でいうたら宮本記念館とかなぎさ水族館とか、そして周防大島高校とか、そして県立大学、そういういろんなグループがあります。そういうものともっとしっかり連携して、そして世界を広げていくというか、研究・調査、また学習をして行く、学んで行くというような施設になるといいなと思っております。

○**水谷**　新山様、ありがとうございました。新しい価値観を広げようとすると、さっきみたいに末端が先端だったりとか、マイナスが実はプラスの面だったり、そういうことをちょっと説明していただきました。

それでは、藤本さん、続いてお願いいたします。

○**藤本正明　山口県東部海域にエコツーリズムを推進する会会長**　藤本です。よろしくお願いします。

アワサンゴの活動を、ずっと続けているんですけど、よく頭の白い人とか薄い人が来られて、今このように高校生とか大学生とか来られないんで、今日は何かアワサンゴも喜んでいるだろうなというふうに思います。またそういう関係の話もしたいと思いますが、今日は４点ほどお話ししたいと思います。

１点は、アワサンゴの調査・保護について、私、16年ぐらい潜っているんですよ。その間のアワサンゴについていろいろ知ったこととか、海の中の生態とかちょっとお話しして、それからアワサンゴの利活用、それから先ほどから出ています山と海とのつながり、その辺の陸域での活動、それから先ほどからも何遍も出ていますSDGs、持続可能ということで、ちょっとその辺を触れさせていただいたらと思います。

先ほどから話すように、私がアワサンゴと出会ったのが、今から16年前の2006年です。私、そのときにダイビングを始めまして、それよりも10年ぐらい前には、漁師さんが海の中に変わった海藻がいるなというのは思っておられたみたいです。そのときの群生地の広さは、25メータープールがありますよね、学校に。あれの１個分ぐらいの広さです。それが徐々に広がり始めて、潜っている間に、ダイバーたちの間で、きれいだねとかこれを守っていきたいねというのが挨拶代わりやダイバーの願いになって、2009年に、私の所属している、ＮＰＯ法人自然と釣のネットワークが調査・保護を開始しました。

その３年後広さ600平方メートル。ということは、もうプール２つ分ぐらい、３年間で広がってきました。

当時アワサンゴについては何にも分かっていなかった、アワサンゴがおるというぐらいしか。ところが、ちょっと文献を調べてみると、秋に23度になるとアワサンゴが産卵をするというのがあって、私、その当時、真面目に勤めていたんですけど、週末、潜って、アワサンゴをじっと見つめながら、中に幼生、卵持っていないかなといって見ていたら、やはり周防大島のアワサンゴも水温が23度になった秋、やっぱり幼生を持って、産卵が始まりました。

それが、去年秋にちょっと新聞紙上をにぎわせましたけど、大量斃死、大量に死ぬんですね。しかし、大量に死んでも、生まれた幼生が何日間か海を漂って海底に着底して、そうして新しい命が芽生えるというのが分かりました。

その後、高知県の黒潮生物研究所という、サンゴとかそういう海の研究しているところの方が見に来られて、これはすごいと。これは、世界一の最大級のアワサンゴの群生地じゃないかということで、やっと国が動き始めまして、今から８年前、2013年にアワサンゴの生息する海が、生物が多様だと。それから、水中景観がいい。ということで、瀬戸内海初の海域公園に指定されました。

その当時の広さは２,000平方メートル、小学校のプール４つ分の広さになりました。それで、サンゴの数を数えてみたら、５万個いたんですね。日本のいろんなところにアワサンゴは生息していますけど、大体10個ぐらいしかないんです。（発言する者あり）現在は、去年測ったら３,000平方メートル、だからプール９つ分ですか。それで、10万個体。ところが、去年の秋に、残念ながら60％が死にました。でも、今のところは復活しているような状況です。

それから、ちょっとかいつまんで言いますと、アワサンゴの観察ということで、シュノーケルにダイビングとか、カヌーで船の上から見たりとかやっています。それから、水中ドローンで撮影して、それを見てもらったりもします。あと、ちょっと私の話の後にちょっとその映像を御覧に入れたいと思います。そんなことで、先ほど新山さんの話にもありましたが、自然とか歴史、文化の紹介とか、そういう、アワサンゴを通じてできるんじゃないかなというふうに思っています。

それから、海と陸とのつながりで、今、アワサンゴが生息しているところの繁茂竹林の竹を伐採して、そしてアベマキというクヌギの木を植えて、これがアワサンゴの生息にすごく関係しているんじゃないかということで植えています。それから、段々畑を借りてスイセンを植えて、スイセンの里をつくっているんです。今、ここに来られている、周防大島高校の生徒さんとスイセン植えたりしています。

それから、SDGsの話なんですけど、先ほども話しましたが、去年から周防大島高校さんがスイセンを植えて関わってもらったり、今年は周防大島高校さんがサンゴを飼育するということ、無謀な計画を、やっぱり若者だからできることじゃないかと思うんですが、計画されていますので、その辺を全面的にバックアップして、いずれはサンゴの人工繁殖もさせたい。なぎさ水族館がしていますけど、もうそういうところまで意気込みがあるんで、なぎさ水族館と一緒に協力したいなというふうに思っています。

アワサンゴが今もいろいろ話題になっていますけど、私たち人間の生活をもう一遍見直しなさいというような警鐘を鳴らしているんじゃないかというふうに思います。

すいません。長くなりました。

○**水谷**　ありがとうございました。高校生の皆さんと大学生が一緒に、今年の秋の23度の頃を目指して、大島で拝見したいと思います。

○**藤本**　先生もどうぞ。

○**水谷**　私もちょっと考えさせていただきます。（笑声）ありがとうございます。

それでは「アワサンゴのお花畑」の映像をご鑑賞ください。

○**水谷**　すばらしい映像、ありがとうございました。

それでは、アワサンゴがどういったものか、知らない人は知って頂いたところで、ちょうどなぎさ水族館の内田さんのお話をお願いいたします。

○**内田博陽　なぎさ水族館学芸員**　こんにちは。なぎさ水族館の内田と申します。

なぎさ水族館で、私は飼育員、学芸員として働いています。水族館、こちらの御紹介にあったアワサンゴを展示しているんですけども、なぎさ水族館自体がイルカとかクジラとか大きいものがいない。人気があるペンギンとかもいない水族館ですけれども、地元の海の生き物にこだわった展示をしています。

そういった意味で、地域密着型水族館と言えます。実際に、生き物も自分たちで採集するほか、多くの漁業者の方が協力してくれるとか、ナマコとか、14種ぐらい、商品にならないものを使って展示をしています。それが、都市部の人にとっては珍しいみたいで、すごく好評を得ています。

アワサンゴなんですけれども、2011年頃、この島に私が赴任したんですけれども、話題に上がっていて、すごいきれいなものだという話を聞いていました。実際見たときも美しいんですけれども、やっぱりダイビングとか素潜りをしないと見られないという、ちょっと条件が厳しいところがあるので、せっかくすば

らしいところがあるんだったら、ぜひ水族館で広く島民の皆さんに知ってもらいたいなということから展示を開始しました。

なかなかうまくいかなかったんですけど、試行錯誤するうちに、2016年、アワサンゴの繁殖を世界で初めてなぎさ水族館が成功しました。そういう水族館の活動を通して、地元に元気の出るような話題を提供するとか、また生き物、地元の海を知ってもらって、自分の住んでいるところにはこんなにおもしろい生き物がいるんだというのを再発見してもらいたいなというふうに思いながら仕事をしています。例えばそれが、若い子は今、大島には少ないですけど、島外に出て、社会人になったときに、例えば会社で飲み会があったとして、お前の地元どんなところなんかと聞かれたときに、なぎさ水族館という小っちゃい水族館があるんだよ、ちょっとおもしろいだよみたいなことを言ってもらえたらすごく嬉しいなと思って日々活動しています

周防大島は本当に豊かな海だと思います。なので生き物がどれだけいるのか、何が何種いるのか、それをできるだけ近いうちにリストをつくって、周防大島の海の生き物図鑑みたいなものをつくりたいなとはずっと思って、情報収集をしています。そろそろ最後にまとめの時期に入っているとは思います。

あと、生き物等を展示してお客さんに伝えるというのはすごい大事なことなんですけど、あともう一点、すごく水族館として重きを置いているのは、来館者の数というものです。赴任して来たときに、水族館の来館者が１万６,000人ぐらいまで落ちていました。やっぱりせっかくすばらしい生き物がいても、結局、見る人がいないと成り立たない施設だと思っているので、より多くの人に楽しんでもらいたいという気持ちもあるので、施設の広報活動にも力を入れています。なので、ここ10年で大分右肩上がり、２倍とは言わないんですけど、おととしで来館者が２万８,000人いらしています。

小さい水族館で、これだけの来館者数が増えているのは、実際、床の面積で言えば、山口県にあるもう一個有名な水族館さんより勝ったりすることもあります。小さい水族館ですけど、皆さんの御協力で楽しく触れ合い活動できていますので、今後ともよろしくお願いします。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございます。昭恵夫人も８月末にはぜひ訪問されたいということで、サメとの触れ合いとか、そういうのも可能でございますよね。規模じゃなくて、質といいますかね。（「そうですね」と呼ぶ者あり）魅力ですよね。（笑声）いずれにしましても、山口県内にそういった海の生き物を大切に発信しているところがあるということでございます。ありがとうございました。

それでは、最後に、藤本町長のほうからお願いします。

○**藤本淨孝　周防大島町長**　失礼いたします。周防大島町長、藤本淨孝でございます。日頃より、皆様におかれましては、町政の推進に御理解を頂いておりますこと、この場を借りまして御礼を申し上げます。いつもありがとうございます。

本日は、ブルー＆グリーンアートプロジェクトの水谷先生、そして共同研究者であられます安倍昭恵先生にこのような場を持っていただきまして、大変うれしい思いでやって参りました。

ブルーな海、そしてグリーンが示す山、そしてアートが一緒になって、様々なことを未来に向けて発信していくというお話を教えていただいたところでございます。

今日、11時から、ビーチクリーンを皆さんと一緒に行ってまいりました。今日一緒に作業していただいた皆さんもおられます。大変暑い中でありましたけれども、有意義な時間が過ごせましたこと、とてもありがたい思いでございます。

そして、皆さん方と交流をしながら、ビーチクリーンや清掃活動ができたこと、体験をするということはとても大事なことであり、もっと多くの皆様にも御一緒していただきたいという思いを持ったところでございます。

今日、水谷先生にこのような御縁を頂きました理由の一つとして、先日4月28日に、山口県立大学、周防大島高校、そして周防大島町と三者の包括的な連携を結ぶ協定を結ばせていただいたことによります。これは、周防大島町、山口県立大学、周防大島高校が地域づくり、文化振興、人材育成、そして国際交流の推進ということを共に目指してまいりましょうということです。

そして、この秋をめどに、アロハ・プロジェクトと題しまして、アロハシャツを水谷先生が中心となって、学生の皆さんとともにデザインをしていただくという、非常に明るい企画となっています。これを周防大島高校の皆さんに着ていただいて、そしていろんなイベントに出ていただく、そして将来的にはこの周防大島の住民の皆さんにその柄のアロハシャツを着ていただくという大変素敵な企画になっていますので、こちらも楽しみにしていただければと思います。

周防大島町におきましては、今後の白木半島地区の観光促進についても進めてまいります。ダイビング、シュノーケリング、ニホンアワサンゴの観察、そして山のトレッキング、そういったことも広げてまいりたいと思っております。

そして、今度、令和5年の完成を目指し、瀬戸内海国立公園の中に地家室園地という場所に、環境省と周防大島町がニホンアワサンゴ拠点施設を共に建設する予定にしております。建設予定地は旧小学校であり、二ホンアワサンゴの群生地を中心とした海域公園の近くに建設する予定にしております。これから、子供たち、そして若い方たちに、二ホンアワサンゴを通じて、自然や山の大切さをしっかりと学んでいただくように種を蒔きながら、今日お越しの皆さんにも、アート、芸術ということも今後発信をしながらまちづくりに生かしていくよう進めてまいりたいと思っております。

この白木半島では地域のコミュニティ協議会があり、今日、集落支援員の栄（さかえ）さんもいらっしゃっておられますけれども、白木半島の地域を盛り上げていくという活動をしていただいております。一つのモデルとしまして、これが周防大島の全域に広がっていくような活動になってまいれば良いなと思っています。

町全体では、今、新型コロナウイルス対策としてはまだまだワクチン接種の過程というところでありますけれども、コロナ終息後も、ぜひとも明るい話題づくりのために、皆さんのお力、そしてアイデアを頂きながら進めてまいりたいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。周防大島町長から、この白木半島をはじめ、全町に向けて、意欲的なお話がありまして、私たち、大学のほうの共同研究で、周防大島町ハワイ化計画という５人の教諭で立ち上げまして、微々たることしかできませんけれども、積極的に町と高校生と一緒に活動させていただきたいなというふうに思ったところでございます。

また、そういう注目すべきモチーフといいますか、やはり大きくはこのアワサンゴに注目しています。さらに、ハワイとのつながりは県議会議長の柳居様のほうから推進をされていますよね。だから――私、司会だからあんまり自分がしゃべっちゃいけませんけども――こういうサンゴの問題を、ハワイの現状と山口の現状、こういう比較をしながら、交流しながら、それをまた話題としていって、より白木半島のアワサンゴに注目が集まっていくような形が何かデザインを通じてできないかなというふうにお話を伺っていて、思った次第です。

先ほど、もう紹介してしまったんですが、オーディエンスの皆様から向かって右側のところにウエディングのペアーのスタイルを展示させていただきました。詳しくは本日のプログラムに書かせていただいていますが、アロハシャツのイメージ。そして、パンツは、実は東北地方のサルッパカマという、野良や山仕事をするズボンのスタイルに、男性のほうは前のところがセーラーパンツの、両枠にボタンがついていて、前にべろっと開くようなタイプになっています。理屈ですけれども、海と陸の結婚を一つのパンツデザインにしているというようなところでございますし、女性のほうは、そういうサルッパカマのスタイルをモダンなテイストにした、ちょっとドレスのような形でデザインさせていただいています。これは好みだから、皆さんどう思われるか分かりませんけれども、こういうことを通じて、藤本さんから提供いただいたアワサンゴの写真を使いながら、こういう形で一つサンプルとして発信をさせていただいています。

ですから、こういった一つの取組をステップといたしまして、引き続き、アロハシャツのデザインだったり、いろんなことをしていきたいというふうに思っております。

それでは、司会者でありながらちょっとプレゼンターみたいな感じでございましたけれども、会場の皆様は、今こういった発言を大先輩から頂いたんだけども、若い学生さんあるいは高校生の皆様、何か御意

見ありましたら、手を挙げていただけないかと思います。いかがでしょうか。どうですか。（「はい」と呼ぶ者あり）じゃあ、高校生じゃないけれど、どうぞ。（笑声）

○川崎　白木半島地区コミュニティ協議会　誰もなかなか手挙がらんだろうと思って。

○水谷　ありがとうございます。

○川崎　地元です。白木半島コミュニティ協議会の小積というところの川崎といいます。

新山会長さんから、一番遅れているところが一番最先端だよという話があって、ちょっと白木半島というのは今ほとんど、10年とは言わないけど、20年か30年か先になると、もうほとんどの地区がなくなってしまうんじゃないかというおそれのある地区が集まって、この協議会となっています。町長さんのように、そういうところをモデル地区にして、町のほうのいろんな支援を受けながら何とかしようじゃないかというんでつくったあれなんですが。やっぱり、そういうモデル地区にするということ自体が、やっぱり一番遅れているから、そこにそういう目を向け合えるきっかけというのがあるんかなというような気がしますのが１つ。

それから、先ほどから若い人たちに云々という話がありましたが、うち、小積地区ですが、最近ちょっと人口が増えているんです。その一つの理由は、やっぱり自然がいい、太陽が、朝日が上がってきて、それを見たいという方が何人か小積に入ってきた。それは、要するに、地元の者はあって当たり前。もう生まれたときから、朝日は上がるしというような感覚で見ているということがあります。よそから来る方は、山地から上がってくる、あのすばらしさは恐らくよそから来た人が気づく、そういう自然のすばらしさは。若い人たちも、恐らくずっとこの大島に生まれて育っていったら、そういう感動みたいなものは受けないかもしれないなと。

僕、もとは九州やったんですが、私の子供たちに、一回外出ろ、出てからもう一回帰ってきて、大島のよさを見直したらという提案をしたことがあるんですが、やっぱり若い人たちには、そういう新しい価値を身につける一つの相対的な物の見方、そういうことが一つ必要だろうし、それから、今の社会でもそうです。栄さんもそうでけど、実際に自分が動いてリアル感を持ち、そして心を動かす、そういう体験の場が必要じゃないかな。

藤本さんにお願いしたいのは、潜る方が、地元はほとんどいないんですね、もう高齢であるということも一つあるんだけど。例えばドローンを自分で操作してきれいなところを見る、また映す。そういう手軽なことができれば、もっと潜る人も増えるかも、あるいは器材を使う人も増えるかもしれない。これは、いろんな技術とか機械の問題とかあるかもしれないけど、そういう方向で、みんなが一般的に使えるようなものになるといいかなというようなことを思います。

なぎさ水族館には、先ほども言われました、下関の海響館と競り合ってですね。本当、競り合ったんです。日本で一番小っちゃい――日本で一番小っちゃいのは世界で一番小っちゃいんですかね――なぎさ水族館が勝って、初めてアワサンゴのことも。そのときに関わっていた方が言ってたのですが、温度を下げて寒くすりゃいいんだよって話聞いたことがあるんです。これは恐らく、さっきの新山さんの話のつながり、ちょっと逆転の発想みたいなのがあって、そうすれば卵産むよという、それがあって、恐らく海響館にはそういう新しいアイデアなかったんかなという。小っちゃくても最先端に行けるという実績だろうと思います。ぜひそういうものをアピールして。

民泊やっていて、よそから来る子供、なぎさ水族館連れていくんですが、やっぱりアワサンゴが一番です。子供は、興味持って。私、そういうものには、若い子はやっぱり寄っていくんだなということを思います。

ちょっと長くなりましたけど、皆さんの意見を聞いて、思いました。

以上です。（拍手）

○水谷　ありがとうございました。すばらしい御意見でございました。なぎさ水族館は、世界のニホンアワサンゴの拠点と、そして研究においても、繁殖など、すばらしい実績があるという、そこをとにかく高らかにうたっていくということが大事ですよね。ありがとうございます。

それじゃ、ほかに御意見とか御質問ないでしょうか。どうですか。（「はい」と呼ぶ者あり）どうぞ。

○**まぁしぃ　マウンテンマウス**　こんにちは。マウンテンマウスまぁしぃです。

今日ここでこうやって海の中の話、山の話、島の話、ふるさとの話をしていただき、ぶちうれしゅう思いました。こういうことやっちょって、僕ができることは、音楽でこうやってみんな自然のことを思っちょるよということを届けることと、やっぱりこうやってみんなが興味を持ってくれることがうれしくて、僕ができることは、今日、ＣＤを20枚ぐらいと本を20冊、来てくれてありがとうということで持ってきているんで、ぜひもらってください。聞いてくれて、どうもありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございます。長門のアグリアート・フェスティバルのときに、やはり周防大島の歌を歌っていただきました。本当、ありがとうございます。どんどん、学術的という側面だけじゃなくて、やっぱり音楽とかデザインとかあるいは例えばミュージカルだったりというのを、一つの手段として、興味がもともとないような人たちに触れていただく機会が作れますね。そういう意味ではアートやデザインを通じて伝わっていくということがございますから、いろんな切り口で伝えていくというのが大事じゃないかなと思います。ありがとうございました。

それじゃ、そちらの高校生の方で、一言何か言ってもらえればと思います。何か強制的で悪いけれども、遠慮していらっしゃると思うので。意見をお願いいたしたいと思います。

○**宮田拓樹**　周防大島高校３年、宮田っていいます。

自分は、ニュースとかでニホンアワサンゴが周防大島すごいというのは知っていたんですけど、具体的にどうすごいのかということは知らなくて、この場を通してすごく詳しく知ることができました。ニホンアワサンゴのムービーがとても詳しくて、すごい参考になったんで、そういうのをもっと全面的に押していければいいかなって思いました。

ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。本当にそうですね。身近にすごさというものを一般の我々がやっぱり体感していくためには、こういうメディアが大変有効でありますから、藤本さん、どうぞどんどんおつくりいただきたいと思いますし、また町長さんはどんどん支援をしていただきたいなと思います。そういう体制でお願いしたいと思います。

また、そういうのをユーチューブとか、いろんなメディアを使って発信していく。今日もメディアの方、いらっしゃいますけど、そういった皆様にも発信していただくと多くの人の目に触れますし、今頃はやっぱりそういうユーチューブなどは世界に発信するから、そういったところからも興味持って、来てくださるということもありますよね。

そういう意味では、簡単でも、英語で発信するということも大切かなと思います。だから、大学もそういうことに御協力できるところはさせていただければと思いますので、やはりインターナショナルに、今はありきたりの観光ではなくて、そういった専門的なところのおもしろさなどの情報をキャッチすると、どこからでも来られます。むしろ情報に興味を持たれる傾向にあるので、広報の方をよろしくお願いします。

それでは、時間も迫ってまいりました。今までの流れを聞いていただいて、お一人ずつ、短くなって申し訳ないですけど、新山様から、１分ずつぐらい、お一言、ちょっとおっしゃっていただけないでしょうか。

○**新山**　今日はありがとうございました。お願いしたいことは、これが第１回、スタートということで、次の次、また次へという形でつなげていただきたいと思います。やっぱり継続することが大事だと思います。

もう一つ、さっきもちょっと言いましたけど、いろんな団体、グループとか施設がありますよね。なぎさ水族館も含めまして、宮本常一記念館もそうですけど。それとちょっとネットワークを結ぶ。県立大学、周防大島高校というような形で、もっと環境を学ぶ、地域を学ぶというようなことで、自然を通じて思っていただいたらいいなと思います。よろしくお願いします。

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、藤本さん、お願いします。

○**藤本**　ただいま、県立大学の水谷先生とか町長さんとか柳居県議さんとか、支援をしていただけるということなので、ますます調査・保護活動を頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

それと、先ほども申しましたけど、今回、周防大島高校、それから県立大学の皆さん、それから、もうちょっとしたら海と日本プロジェクトで日本財団が小学生20人ぐらい、佐連のところに来て、シュノーケリングしたり陸と山とのことを学んだりということで、どんどん持続可能な、後世につながっていくような活動ができるんでうれしく思いますので、皆さん、また御支援をよろしくお願いいたします。（拍手）

○**内田**　今日、皆さんのお話をいろいろ聞いて思ったのは、水族館に勤めているんで、生き物を見るので、生き物っていろんな形もあるし、暮らし方もあるし、本当に多様なものをしてくれる。そういったことが、これからの未来、ある意味、学びなのかなとちょっと思いました。ここに書いてあるように、未来の生活スタイルを増やすこと、生き物の暮らし方から我々ももっと自分たちの暮らし方を学べたり、地域の持っている資源を見つけられるんじゃないかなと、それが持続可能な生活につながるんじゃないかなとちょっと思いました。よろしくお願いします。（拍手）

○**藤本**　本日はありがとうございます。私が町長になりまして７か月少しが経過しました。今はちょうどコロナ禍でありますので、町長就任後このように皆さんと顔を合わせて、そして触れ合うということがなかなかできませんでした。本日は感染対策を万全に行っていただき、そして山口県立大の皆さんからお声かけを頂いて、このような形で皆さんと共に学ぶことを実現をすることができました。

皆さんと顔を合わせて、そして、今日もビーチクリーンをしながらいろんな皆さんとお話をさせていただきました。いろんなお話を聞くことが一番であると思うとともに、今日の活動、先生方のお話を聞いておりますと、やはり町民の皆さんが自分の住んでいるところはいいところなんだというふうに自信を持てる、そういった地域をつくっていくことが大事ということを改めて感じることができました。

今日は大変勉強になり、いい体験をさせていただきました。ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　最後に近づいておりますけども、今日は、発表は地元の方だけだったんですけども、ちょっと今日は、感染対策といいますか、抗原検査などもして、東京からお二人来ていただきまして、安倍昭恵夫人のお話を聞く前に、ちょっとファッションデザイナーで世界的に御活躍の天津憂さんがこのオーディエンスの中に来ていただいていますので、一言、外からの目としてアドバイス頂ければありがたいと思います。

○**天津　憂　ファッションデザイナー**　ファッションデザイナー、天津です。よろしくお願いします。

アドバイスですが、やっぱりブルー＆グリーンだったり、そういうエシカルの活動だったりするに当たって、やっぱり固くなり過ぎると伝わらなかったり、入りづらいことも多いと思うので、そこにアートが入ってくることで、すごく実感だったり興味を持ってもらえると思うので、アートを入れながら、そういうアウトプットを続けていくような形となればと思いました。ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。これからいろいろな形で、天津先生もこの周防大島に魅力を感じていただいたように思いますので、デザインの世界でまたアドバイス頂けると思っています。よろしくお願いいたします。

それでは最後に、コメンテーターとして今日は来ていただきました安倍昭恵さんのほうから、今までのお話を聞かれて、また世界でいろんなSDGsの問題や御自身もいろんな活動してこられましたので、ちょっとその辺をコメント頂ければと思います。

○**安倍**　今日は皆さんからすばらしいお話を伺うことができまして、ありがとうございました。

今、話してくれた天津さんは、私の海外に行くときなどの、G20とかG７とかなどで着ていた洋服をデザインしてもらっていました。いろんなストーリーをつくりながらデザインをしてもらっていたんで、あまり私のことを検索すると変なものが出てくるので検索しなくていいんですけど、ファッションで検索するといろんな私のファッションが出てくるので、その中には何着も天津さんがデザインしてくれたものがあるので、御興味があれば見てください。

私は、このことに関わるまで、アワサンゴのことを実は知りませんでした。うちは下関、長門で、しょっちゅう山口県に帰っているんですけれども、アワサンゴ、多分、テレビとかでは流れていたとは思うんですけども、私の意識が低かったのがあって、全然知りませんでした。

そして、なぎさ水族館の存在も知りませんでした。海響館はすぐそばにあるので、海響館には何度も行っていますけれども、海響館と並んで、むしろ負けた。なぎさ水族館がこの周防大島にあるということを知りませんでした。山口県内においても、もしかしたら知らない人がまだまだいるかもしれないですし、日本国中にはもっと知らない人がいると思うので、伸び代はまだまだたくさんあるんだろうなというふうに思っています。

私と主人は、2008年だったかしら。沖縄でスキューバダイビングのライセンスを取って、沖縄では何度も潜りましたし、たまにハワイに行って潜ったこともありますけれども、ここに潜れるスポットがあるということも知りませんでした。ぜひ、機会があれば、主人と一緒にアワサンゴを見に、潜りに来たいなというふうに今日は思いました。

先ほど、末端から先端という、すごい、今日最も響いた言葉かもしれないんですけど。今、私の周りには東京で先端を走っているような若者たち、ベンチャー系の人がいっぱいいるんですけど、その人たちが何を求めているかというと、結構田舎なんですね。それもすごく不便なところにみんななぜか足を運んで、そこで何らかおもしろい活動をしている人たちがたくさんいて、なので、この地域の人たちは、この地域はもう本当にこの先何年かしたら誰も住んでいる人がいなくなっちゃって大丈夫なんだろうかと思っている人、多分いらっしゃるかもしれないんですけども、やりようによっては本当に先端になると思いますし、このすばらしい自然とアワサンゴと、すばらしい町長や議長や人材、高校生たち、未来は本当に皆さんの力でつくっていけると思いますし、何か私でお役に立てることがあれば、ちょっと選挙区とは違いますけれども（笑声）ぜひ、こちらにもお許しを頂ければ来させていただきたいなと思います。

コロナで本当に皆さん大変な思いをされていると思いますけれど、このコロナも、私は一つのチャンスなんじゃないかなというふうに思っています。オンラインが急速に進んで、ワーケーションであちこち行って、リモートでお仕事をしている人たちも増えています。今までは、働き方改革といっても、必ずやっぱり遅くまで仕事を会社の中でしていたような人たちが、いきなり、ああ、何だ、家でもできるんじゃないということで、移住をして、ガーデニングをしたり、ちょっと家庭菜園を作ったりということも何かトレンドのようになり始めていて、何が本当に私たちにとって、人間にとって幸せなんだろうかということを改めて考え直す、今、時期なのかなというふうに思います。

若い人たちには、先ほど先生も言われたように、どんどん外に出ていっていただきたいと思いますけれども、身近にある、この自然がすばらしいということを、若いときにぜひ感じてもらいたいなというふうにも思っています。

地域が、本当にすばらしい地域なので、ますます発展するように私も祈念をして、私の最後のコメントとしたいと思います。ちょっといろいろもっと言いたいことあったんですけど、忘れてしまったんで、（笑声）また後、いろいろと町長なりにお伝えできることがあったらというふうに思います。

今日は、お集まりいただきました皆さん、本当にありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。忘れた部分、次の機会にまたお伝えいただければと思います。

短い時間ではございましたけれども、御参加頂きました皆さん、本当にありがとうございました。今回、コロナ禍ということで、大変御心配もされたと思いますけども、朝のビーチクリーン、そして今日のこのシンポジウムも無事に終えることができました。結論に導くということは特にございませんけれども、一つずついろんなアイデアがここに出てきたと思います。そういったことを、行動しなければ何も生まれません。したがいまして、私たちは言った以上は行動に移す責任がありますから、ぜひ、ここに集まられた皆さんは恐らくその行動する情熱がおありの方々に違いないと思っております。そういうことで、一緒にフロアの皆様、そしてここにパネラーとして御参加頂いた皆様が一緒になってやっていければ、楽しくて明るい、そしてエネルギーに満ちた周防大島の未来があって、そして大学としてはデザインの力を活用し

て、発信していく何かお役に立てればというふうに思っておりますので、微力ではございますけど、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

それでは、改めまして、新山様、藤本様、内田様、藤本町長、そして昭恵夫人、そして来賓の柳居県議会議長様、本当に今日はありがとうございました。皆様、どうぞ盛大なる拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

ありがとうございます。

それで、本日は、県立大学の企画デザイン研究室の学生たちが、撮影とか運営とかをさせていただきました。それで、今後、この内容を編集させていただいて、ユーチューブで発信をしたいと思いますので、これから、本日は大学でコピーしてきたものでございますが、ちゃんとチラシをつくりまして、印刷とかそういうのができるようにして、各交流センターみたいなところに置いていただいて、この話を皆さんが、地域の方々に見ていただけると非常にありがたいし、またそれが広がっていくことを願っております。

私も今、日々、宮本常一先生が書いた本や、ユーチューブで皆様の出演されているものを見させていただいて、もう、１回見るとどんどん入っていくんですね。だから、見なくていいというのは冗談ですけど（笑声）どんどん情報が入ってきた。すばらしいです。そうすることによって、ただ風景きれいだねっていうところでドライブしているんじゃなくて、その地域地域の、例えば佐連というところが瓦の産業があったというのを全然知らなかったんですけど、ユーチューブで情報が発信されると、佐連、瓦、その辺を通ると何となくイメージできて、昔の人たちの生活の営みということが見えてきて、見れば見るほど視点も変わってくると思うんです。それがあまりにも今、頭の中にぐるぐるしてしまって、ドライブしていると何か頭の中が混乱していますけども、皆さん、高校生の皆さんも、この島の出身者の方もいらっしゃれば、あるいは島外の方、県内外の方がいらっしゃると思いますけれども、地域というのはそういう歴史や文化、先ほど御紹介いただいたんだけども、そういうことを知っていけばいくほど楽しくなってくるし、この今の試みということが魅力的になっていきますので、どうぞ私と一緒に、私も素人なので、周防大島通にぜひ一緒になって、この島がより世界の人が来たくなるような島にしていこうじゃないですかという言葉で終わらせていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。（拍手）

○**西村**　水谷先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日の全ての日程を終了いたします。本日は本当にありがとうございました。お帰りの際はお気をつけてお帰りください。

なお、せっかくの機会でございますので、ロビーにて、皆さんと一緒に記念撮影をさせていただければと思います。ちょっとお時間も迫っておりますので、御希望の方はぜひロビーに移られて、記念撮影、よろしくお願いいたします。

以上でございます。ありがとうございました。

付録Ⅳ（2021-3）

Blue & Green Art Project 2021
「海と陸の過去・現在・未来　～和のサステナビリティで世界へ～」
日時：2021年７月11日
場所：ラポールゆや（長門市）
シンポジウムの部
パネラー
　中井徳太郎（環境省事務次官）
　葦津敬之（宗像大社宮司）
　岩元美智彦（日本環境設計株式会社会長）※現：株式会社JEPLAN（22年６月に社名変更）
　江原達也（長門市長）
コメンテーター
　安倍昭恵（ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会名誉顧問）
モデレーター
　水谷由美子（山口県立大学国際文化学部教授・学部長）

【挨拶の部】
○**秋元彩花　司会**　皆様、お待たせいたしました。
　本日の司会は、山口県立大学国際文化学部文化創造学科３年の秋本彩花が務めます。どうぞよろしくお願い申し上げます。（拍手）
　これより、Blue & Green Art Project 2021「海と陸の過去・現在・未来～和のサステナビリティで世界へ～」を開催いたします。
　まずは、実行委員会の理事を代表して、山口県立大学理事長、前川剛志が御挨拶を申し上げます。
　前川理事長、お願いいたします。
○**前川剛志　山口県立大学理事長**　主催者を代表しまして、一言御挨拶申し上げます。
　ただいまより、Blue & Green Art Project 2021 in 長門を開催いたします。
　このBlue & Green Art Project は、７年間続きました「アグリアート・フェスティバル」を継承したものでございます。今年で全体を通しまして９年目となります。
　今回は、持続可能な開発目標、SDGsと申しますけども、海の豊かさを守ろう、陸の豊かさを守ろうをテーマとしております。すなわち、地球に優しく、持続可能なことを基本としております。
　本日は、環境問題、産業イノベーション、音楽の各分野で御活躍の皆様にお集りいただいております。海と陸の過去・現在・未来に関するシンポジウム、言霊を歌われるミニコンサート、そして、安倍昭恵夫人と本学の学生、教員によるファッションプレゼンテーションまで、SDGsを念頭にお楽しみください。
　なお、コロナ禍の開催となりましたので、県外からお越しいただいた皆様方は、ワクチンの接種もしくは抗原検査を受けていただいております。
　それから、ライブ配信の予定でございましたけども、諸般の事情がございまして、アーカイブ配信とさせていただきます。
　どうか、本日は最後までお楽しみください。
　これで挨拶といたします。（拍手）
○**秋元**　前川理事長、ありがとうございました。
　続きまして、共催していただいている長門市市長の江原達也様より御挨拶をいただきます。
　江原市長、お願いいたします。
○**江原達也　長門市長**　皆さん、こんにちは。本日、共催させていただいております長門市の市長の江原で

ございます。

本日のこのBlue & Green Art Project 2021は、先ほどもありましたように、長門市でこれまで行われてきておりました「アグリアート・フェスティバル」を継承するもので、新しく今回立ち上げられましたBlue & Green Art Project 実行委員会が主催されているところでございます。

この実行委員会は、長門市が福祉、健康、そして環境問題とこういったことで包括連携協定を結ばせていただいております山口県立大学を中心に、今日御出席の安倍昭恵さんと共同で進められているところでございます。

これまでのアグリアート・フェスティバル、こちらは、陸の豊かさを守ろうということを目的にやっておられまして、そして、こちらは長門市油谷地区をメインに、そして、その中でも、指定棚田地区に指定されております東後畑地区を中心に活動されてきたところでございます。

今回のこのBlue & Green Art Project につきましては、これまでの陸の豊かさを守ろうということに加えまして、海の豊かさも守ろうということの新しい理念をつけ加えられまして、陸と海、そして、その生活環境をしっかりと再認識し、そして、発信、そして環境保全ということをしっかりやっていこうということで、進められているところでございます。

長門市におきましても、ウイズコロナ、ポストコロナ時代を迎え、しっかりと、この長門市の美しい自然、こちらをしっかりと活用して、アウトドアツーリズム、そして、エコツーリズム、こういったことをしっかりと進めていかないといけないというふうに思っているところでございます。

そういった中で、陸の豊かさを守る、そして、海の豊かさを守る、こういった理念は、本当に大切なことだと思っておりますし、進めていかなければならないというふうに思っているところでございます。

最後となりますけれども、今日、御参会の皆様方の御協力をいただいて、地域文化の振興、そして、地球を守っていこうという、この輪がますます広がっていくことを祈念いたしまして、私の共催としての挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いします。（拍手）

○**秋元**　江原市長、ありがとうございました。

続きまして、本事業を御支援くださっております公益財団法人東芝国際交流財団顧問、白井純様より御挨拶をいただく予定でしたが、諸事情により本日お越しになれませんでした。

メッセージを頂いておりますので、私が代読いたします。

「弊公益財団法人は、海外に対する日本文化理解向上を目的に活動を続けてまいりました。その一環として、『アグリアート・フェスティバル』を支援させていただき、その成果を長門市の皆様、山口県の皆様とフィンランドやハワイなどの日本文化研究者と共有させていただきました。その発展形であるBlue & Green Art Project 2021においても、地域の伝統文化を世界と共有する方法、持続可能な生活の御提案をぜひ参加者皆様で御検討いただきたいと思います。和のサステナビリティを世界へ御発信ください」。

続きまして、山口県議会議長、柳居俊学様より御挨拶をいただきます。

柳居議長、お願いいたします。

○**柳居俊学　山口県議会議長**　祝辞。

Blue & Green Art Project 2021「海と陸の過去・現在・未来～和のサステナビリティで世界へ～」の開催を心よりお祝いを申し上げます。

この開催に心よりお喜びを申し上げ、実行委員長をお務めの山口県立大学水谷由美子教授をはじめ、コメンテーターの安倍昭恵様並びに開催に当たり御尽力をいただきました関係の皆様方に深く敬意を表します。

さて、近年、地球温暖化を要因とする気候変動や生態系への影響、また、マイクロプラスチック等による海洋ごみ問題など、地球規模での新たな環境課題が顕在化する中、持続可能な開発目標、ＳＤＧｓを掲げる「持続可能な開発のための2030アジェンダ」や地球温暖化対策の新たな枠組みであるパリ協定が採択をされるなど、国内はもとより国際的にも持続可能な社会の構築に向けた機運は高まっています。こうし

た中、本日、海と陸の諸問題について、過去・現在・未来という視点から意見交換が行われますことは、問題の実態を理解をする上で、大変意義深いものであると存じます。

また、本日は、シンポジウムに加えて、ミニコンサートやファッションショー等が開催され、地域の方との交流に加え、地域文化、芸術、デザインの創造におけるヒントを探られると、お伺いをいたしております。日本の伝統的な生活文化がサステナビリティの特徴を持っていたことに目が向けられ、その価値が発信をされることで、未来への希望につながる新たな地域文化が花開くものと大いに期待をいたしております。

私ども県議会といたしましては、本県において、脱炭素化を着実に進めるとともに、その取組を本県産業のさらなる発展につなげるための調査研究を行う特別委員会を先日設置をしたところでございます。

今後とも持続可能な社会の構築に向け、全力で取り組んでまいりますので、引き続き皆様の御支援、御協力を賜りますようお願いを申し上げる次第であります。

結びに、本日のシンポジウムの盛会と御参集の皆様方の御健勝、御多幸を心より念願をいたしまして、お祝いの言葉といたします。

令和３年７月11日、山口県議会議長、柳居俊学。

おめでとうございました。（拍手）

○秋元　柳居議長、ありがとうございました。

続きまして、御来賓であり、山口県立大学企画デザイン研究室との共同研究として、企画・運営に携わっていただいております安倍昭恵様より御挨拶をいただきます。

○安倍昭恵　前内閣総理大臣安倍晋三夫人

皆さん、こんにちは。御紹介いただきました安倍昭恵でございます。

本日は、コロナ禍にもかかわらず、こうしたすばらしいシンポジウムを開催することができますことを私も大変うれしく思っているところでございます。

今日は、本当にお忙しい中、環境省から中井次官に、そして、安倍家と大変縁の深い宗像大社から葦津宮司に、そして、今最も環境業界というんですか、環境の中で注目されている日本環境設計という、後で、どういう会社か、皆さんにはしっかりと今日知って帰っていただきたいと思いますけれども、日本環境設計という会社から岩元会長にお越しをいただきまして、この後、すばらしいシンポジウムが開催をされると思います。

私自身は、2011年の東日本大震災の後に、いつ、食べ物がなくなるか分からないということで、自給自足の生活をしましょうと皆さんに言っていたんですけれども、ただ、言っているだけでは説得力がないので、下関でお米づくりを始めました。そのときに、やはり、もっと農業に対して若い人たちに関心を持ってもらいたいと思って、山口県立大学の水谷教授と共に、ここで「アグリアート・フェスティバル」というのを開催して、ファッションショーを通して、農業をもっと楽しいものにしていこう、そんな思いで続けてまいりました。

その後、Ｇ７の伊勢志摩サミット（2016年５月26日27日）、そして、大阪で開催されましたＧ20大阪サミット（2019年６月28日29日）のときに、配偶者のプログラムとして海洋環境を取り上げさせていただき、多くの配偶者の方たちが本当に真剣にその海洋環境に対して関心を持ってお話をしてくださって、それ以来、私も海洋環境をもっとこの日本の中でも広げていかなくてはいけない。やはり、島国である日本、海に囲まれている日本は海を大切にしなくてはいけない。特に、この山口県は三方が海に囲まれておりますので、しっかりと、陸の環境だけではなくて、海の環境を考えていかなくてはいけないということで、昨年よりBlue & Green Art Projectというのを立ち上げさせていただきました。

本日残念ながら会場はいっぱい入っていただくことは、このコロナ禍からできませんでしたけど、この後のアーカイブで配信いたしますので、今日よかったなと思われる方は、多くの方に、また、今日の感想等々を伝えていただければなというふうに思います。

それでは、この後、最後まで皆様お楽しみいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

○**秋元**　安倍昭恵様、ありがとうございました。

【シンポジウムの部】

続きまして、パート１、シンポジウムを開催いたします。

パネラーの皆様、御登壇ください。

モデレーターは、山口県立大学国際文化学部長、水谷由美子教授が務めます。

水谷教授、進行をよろしくお願いいたします。

○**水谷由美子　山口県立大学教授**　皆様、こんにちは。ただいま紹介を受けました山口県立大学の水谷由美子でございます。

本日は、モデレーターをさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速始めさせていただきます。

このシンポジウムにつきましては、趣旨はもう既に御挨拶の先生方がおっしゃっていただいたので、私が多くを語ることはいたしませんけれども、本日お越しいただいた皆様は、本当に、全国あるいは世界で環境の問題を生活の中に、そして、産業の推進、そういったところで、御活躍でいらっしゃる皆様が、今日こうやって、長門の油谷に来ていただけたことは、大変幸せなことでございます。本当にありがとうございます。

また、御登壇いただいている江原市長、そして、先ほど御挨拶いただきました柳居議長、県や市のレベルで、今日のこのシンポジウムの内容をヒントにして頂ければ幸いです。また、我々が実際にこの地で何ができるか、よりよい未来にどのようにつなげていけるかなどを探求すすることを趣旨としております。私はデザインの活動をしておりまして、我々の精神文化を何か形にしていく。そういうために、こんなそうそうたる方々にお勉強の機会をいただけるということは、大変もったいないぐらいで、うれしく思っております。それでは始めさせていただこうと思います。

早速ですが、環境省の事務次官をしていらっしゃいます中井徳太郎様から、環境で地域を、地方を元気にする地域循環型共生圏というお話をしていただきます。

○**中井徳太郎　環境省事務次官**　ありがとうございます。

○**水谷**　どうぞよろしくお願いします。皆さん、拍手をお願いします。（拍手）

○**中井**　御紹介いただきました環境省の中井でございます。

Blue & Green Art Project 2021というすばらしい催しに呼んでいただきまして、お話させていただく機会をいただきましたこと、本当にありがとうございます。

私のほうで、ちょっとスライドを使いながら、冒頭お話させていただきたいと思います。

「環境で地方を元気にする地域循環共生圏」、こういうことなんですけども、問題意識は、この気候の危機、豪雨で自然災害、人災になっている、この異常気象。この状況と私たち本当に苦しんでいるコロナ、この２つの危機、世界中を覆っているわけなんですけども、この気候危機とコロナ危機という、環境省としては、これは別の問題ではないと実は考えております。大きく言いますとこの250年ですか、産業革命ということ、人間がいわば便利さ、豊かさを求めて、大量生産、大量消費、大量廃棄、こういう形で経済、都市をつくってまいりました。そういう中で、地球が傷んで、自然、生物界とのボーダーというんですか、こういうものがどんどん狂う中で、異常気象と同時に、このコロナも、ほかに言うと、伝染病でも、デング熱、エボラ出血熱とか、いろんなことがあるわけで、今回、コロナの次も、人間社会がちゃんと変わらないと、次のパンデミックがあると、気候変動も同じだという、同時解決という発想を持っております。

今回もSDGsのテーマになっているということなんですけども、SDGsは17のゴールがあります。海の豊かさの14番、陸の豊かさ15番、気候変動13番、それ以外に人間の平等や、飢餓、貧困、飢餓、いろんな対応がありますけど、SDGsの考え方は、今がこのままだと地球に人間が住めなくなりますって発想なんです。環境と経済と社会と、従来は、ばらばらに考えていたもの、これを人間の活動を変えて、経済、社会

の仕組みを変えて、そして、今、異常気象やいろんな自然のしっぺ返しが来ている状況を人間が変えていくんだと、こういうことがＳＤＧｓの考え方なんです。

経済、社会のシステム、人間のライフスタイルを変えることによって、システムが変わって、地球が今傷んでいると。言ってみると、人間の体と地球というのは一つの生命体と考えられますね。地球生命体が毎日お酒飲み過ぎて、肝臓に負担がかかって、肝硬変になったら、肝癌まで行ってしまうと、それをお酒抜いて、健康維持することをやっていれば、また、次の日、飲めると。繰り返し繰り返し、もう250年傷めつけているんで、慢性病ですね。その症状が、この異常気象であり、伝染病だと。したがって、人間の考え方、人間がみんな変わっていかないかんと、地球との、そういう考え方です。

その問題意識がパリ協定という、気候変動では、２℃目標、1.5℃目標という大変画期的な合意をしているわけなんですけども、これはいわば大量生産、大量消費、大量廃棄という化石燃料、地球の内臓を傷めるような形で、地下からほじくって持ってきているわけです。大量に移動して、大量に燃やして。人間でいうと肺の機能に当たる。熱帯雨林とか植物は二酸化炭素を酸素に変えてくれますよね。それを全部伐採して、都市の空間を造っている。自然を傷めつけるのではなく、自然のメカニズムを活かしてCO_2が人為的に増えないようにしようとすることがカーボンニュートラルです。それを2050年までにやれば、1.5℃の目標が達成します。今、実は、平均的には１℃温暖化が進んでいると言われています。日本もうちょっと進んでいるんですけども、あと、0.5℃で、30年間のうちにそういう状況に、健康体に病気が治れば、すぐには止まらないんですけど、0.5℃で止まるかもしれない。もしそれをやらないと３℃、４℃と上昇してしまうということの中で、世界が大きく動いているということです。

このことを日本政府としても、しっかりと今受け止めて政策が打たれるようになりました。昨年の10月に、2050年カーボンニュートラルだということを菅総理が宣言されています。それで大きく日本の経済、社会が動いてきています。これは言ってみると、新しい健康体に移行するということ、つまり経済、社会が健康になること、同時に成長だと言っているんです。新たな成長戦略として、これをやるんだ。我慢合戦ではないんだよということなんですね。

実際は、この赤いところ（スライドを指して）がピークでして、日本の排出量というのは、144トン。東日本震災の後に原子力発電所が止まって、石炭火力中心のエネルギー構造に変わったんですね。そこで、わっと出ましたけども、日本人は真面目ですから、ここに至るまで、６年連続で減らしてきているんです。それをあと30年しっかり減らしましょうと、あと10年で46％まで持っていきましょうと、こういう目標を掲げています。

もう、いろいろな皆さんが日々の生活で、異常気象おかしいということで、国はこういう方針を出しました。実は、暮らしや生活の現場である地域から、経済や暮らしの現場の地域の自治体から、もう2050年カーボンニュートラルをやりましょうという名乗りが上がっています。山口県に、もっと頑張ってもらいたいですけど。今、人口が１億1,000万なんですよね。ここに、ぜひ、長門市も入っていただきたいと思います.

成長、地域の活性化、地域創生などいろいろなこと言われていましたけど、こうした危機感で変えていく必要があります。これを国全体でやろうというのが今の方針です。従来の温暖化というのは、むしろ技術の問題だろう、つまり産業の供給サイドの問題だということで、経済産業省を中心に供給の仕組みを変えるというイメージです。今言ったような暮らしとか、生活、地域が変わるんだということで、目に見えるロードマップを作ろうということで、地域脱炭素ロードマップというのを、官邸の会議を環境省の事務局でやりまして作りました。少なくとも100ヶ所以上のゼロカーボンの脱炭素先行地域ですね。あと30年なんで、25年後に新しい技術ができて、５年で駆け込みセーフと、そうじゃなくて今できることから、どんどんやっていこうと、この５年、10年が勝負です。政策総動員して、地域の創発を盛り上げていきましょうと、こんな感じなんですね。

どういうイメージかというと、我慢合戦で、息止めて、みんな縮こまりましょうというんじゃないんです。健康のイメージというのは、環境省で森里川海という言い方していますけども、生態系サービスとい

う、ちょっと堅い言い方がありますけれど、要するに自然の恵み、水も空気も食べ物もエネルギーも観光資源も健康のことも、全部、この森里川海という自然の循環の仕組みの中にある。それらに人間が関わっていただいているものです。ところが、この循環が壊れているという発想なんです。これを戻すと。一次産業の活性化、海との豊かさの回復も含めて、都市と農村、そういう関係の中で、全部これを直したいと。

その構想が実は、ゼロカーボンになった健康体のイメージが地域循環共生圏という構想になっています。下に都市と農村の丸が２つあり、その背景に森里川海ってあります（スライドを指している）。森里川海の恵みを都市、農村がそれぞれで自立分散し、地産地消型で、資源はあるという発想をもう１回見直して、自分の活性、自分のポテンシャルを引き出して回していく。だけども、都市には人口集中して産業があって、ここはエネルギーも食料も足りません。今は地球を傷める形で、化石燃料を中東から持ってきておりますけども、見たら、隣の農山漁村というところは人がいなくなって、耕作放棄地が広がり、森林に手が入らず、そこは言ってみたら自然のエネルギーや自然資源の宝庫ですよと。この発想で、農山漁村では、地域を超えるものを農山漁村から都市に供給する。都市からは人とお金が入る。企業の研修やレクリエーションも含めて。今、ワーケーションと言っていますけども、もう豊かな農山漁村と連携してもらって、企業が１か月でも、農作の手伝いに来るとか、そういう中で、社員も健康になって、おいしいものを食べて、都市の空間でも豊かになれれば、災害があれば、支えさせてもらうみたいな、そういうような助け合いのイメージです。

このスライドでは人間の体に例えていますけども、人間の体って37兆分の細胞が、１個1個DNAがあって生きています。生きている細胞が自分の自活している力でネットワークをして、毛細血管につながって、栄養代謝し、電気の神経シグナルで伝わりながら、筋肉なり臓器になり、人間の体ができています。そういう発想で、１個1個の細胞が活性化するんだと、それがSDGsで１人も取り残さないという発想なんだというのを環境省が言っています。

みんなで頑張ろうということなんですけども、どこから手をつければいいのかと。１番下にも（スライドをさして）コミュニティベース、本当に学校区とかですね、小さい家族、企業１単位も含めて、エネルギー、１次産業と連携し、また観光もあります。要するに細胞が筋肉をつくり、筋肉が心臓や循環器をつくるとか、そういうイメージの階層性です。市町村や連携の流域レベル、さらに、その域へ行くとブロックの東北全体とか、中国地方全体とか、さらにいったら、環日本海、環太平洋とか、そういう発想で、みんな気づいたところから助け合いながら、自然の恵みを引っ張り出す。そこでは技術やDXやＡＩも使います。ブロック支援を使います。そういう発想で、健全な循環を戻そうということです。

その発想、政策、つまり、SDGsには17のゴールがあって、すごく抽象概念なんですけれども、私たちがそれを自分たちのものとして取り組む必要があります。地域循環共生圏、地域の視点で地産地消、自立分散、そういうキーワードで、１次産業の自然資源、エネルギー、観光、全部やりますねと。そういうものを広げる運動として、森里川海というプロジェクトを、実は昭恵夫人がこのプロジェクトを立ち上げたのです。当時、丸川大臣とイベントをやったりしたときにも対談をしていただいたということ、それ以来継続してやっていますけれども、国民１人1人、１社1社が関わるという運動と、地域、自治体、金融機関、企業も含めた地域循環共生圏の仕組み、それを広げるために、実はアワードという形で、大臣賞を出しています。だんだん年間10個以上出して、みんなお仲間でって言って、９回目に、100個以上の賞があると。

そういうことで、これらの活動の発想はですね、地域循環共生圏と言っていますけども、今の健康ではない状況から、早く、さっさと、あと30年、あと10年でめどをつけようということであります。地域にポテンシャルがあると、それを上意下達の行政が上から振ってくるような発想ではなくて、細胞１個1個の活性と言っていますけど、みんなで関わって、問題事を連携型でやっていく。それができるスマホもありますし、技術もある。時代がそうだっていうことだって、この長門市、大変豊かな自然の中で、こういうことを担ってやれるかなと思っております。ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。地域のことを知ろうということで、山口の大地と触れ合うために、今朝、油谷湾で水浴びもしていただいたようなんですけれども、この中井様と一緒に宗像国際環境会議も積

極的にやっていらっしゃいます葦津敬之様にお話をしていただきます。

宗像における取組について、どうぞよろしくお願いいたします。

○葦津敬之　宗像大社宮司　ありがとうございます。

本日は、このような席にお招きをいただきまして、大変光栄に存じております。

昭恵夫人のほうからも紹介がありましたように、宗像は安倍家の先祖の墓があるということで、今日このような場にお招きをいただいたのではないかというふうに存じます。

今日は、宗像国際環境会議という環境の取組をお話したいと思います。私はこの会議の副会長をいたしております。本業はちなみに神主でありますので、今日は神主の話というよりも、副会長としての話を進めていきたいと存じます。

私、実は東京に25年ほどおりまして、50歳、正確に言うと49歳のときに宗像に帰ったというか、戻りました。小学校までは宗像で育ったんですけれども、37年ぶりに宗像の地に戻って、風景は全く変わらないんですけれども、人も変わってなかったんです。大きくなったねと、おばちゃんたちに言われて、もう50なんだけどというのはあったんですが、そういう中で、宗像に戻って、風景は変わらないと。特に問題なのは、海は分からないんですよ、中身がどうなっているかということが。それで、地域の氏子さん、主に漁師の方々とお話をしていると、海水温度がここ数年異常に上がって、磯焼け、磯枯れが起こっていて、漁獲がここ10年で半減していると。それから海洋ごみがとんでもないというような話を聞いて、そうか、海はおかしいんだということで、その認識に至ったということでございます。これが宗像国際環境会議を始めるきっかけになったというものです。

それで、宗像国際環境会議、実際は、今年８年目を迎えますけれども、こういう実行委員会組織で、まさに企業、それから地元、それから行政を含めて、いろんな方々が交じり合って、実行委員会を形成しております。

宗像の玄界灘と言われるところの大きな特徴なんですけれども、何で、こんなにひどいんだろうということをつらつら考えていくと、水深が平均で５、60メーターしかないんです。つまり、温暖化の影響をもろに受けて海水温度が上がると。それから、御覧のように、朝鮮半島、中国大陸等々がせっておりますので、大量の海洋ごみが流れるという、こういう地理的状況にあります。

平成28年、もう随分前の海面水温データ、気象庁のデータなんですけれども、30℃なんですよね。実際もう既に30度を夏場超えていくんです。海水の温度が30℃を超えるというのは、当然、魚それから海藻にとっても異常な状態が玄界灘で見られるということでございます。

ここ数日、線状降水帯でいろいろ被害に遭われた方がいらっしゃいますけれども、心からお悔やみを申し上げたいと存じます。ここ近年、線状降水帯と我々が聞いたことないような異常な雨が降り続いております。これもいろんな要因があるというふうに言われておりますけれども、海水温度の上昇がそこに起因をしているのではないかというふうに言われていて、九州のほうも、こちらで言えば、広島とかもひどかったと思いますけれども、やはり、大水でやられると町というのはなかなか回復をしない。地震も大変なんですけれども、水害というのは、本当に凄まじいということを実感いたしております。

私、実は、環境問題というのは、かれこれ30年以上、取り組んでおりまして、もともと神社に関係する鎮守の森、まさに山の部分から入ったんですけれども、宗像に来て、その友人たちに、僕は海に改宗しましたよということで、それは、よくよく考えてみたら、地球全体の７割が海なんですよね。その海が異常をきたしているので、地球全体のバランスを欠いているということがよく分かって、これから海に特化しようと、神様が海とも関わりがあるということもあるんですけれども、そういう形で、今、取り組んでおります。

先ほど中井事務次官のほうからも、2050年のマイナス46％等々の話がありました。実は、CO_2を削減すると同時に、自然そのもののポテンシャルが下がっていますので、その自然をいかによみがえらせるかという、自然再生事業というのを昔やっておりました。森林に木を植えたり、海の磯枯れを回復するために海藻を植えたりだとか、いろいろな活動があったんですけれども、次官のほうには、こういうもののほ

うが大切じゃないというふうに言ったら、それは今後そういうふうになるよというようなことを聞いたんで、一安心しております。

宗像国際環境会議というのは、何をやっているかということなんですが、大きなシンポジウムを年に１回やっておりまして、海の再生、竹漁礁づくり、海岸清掃、それから、地元の中高生の育成プログラム、それから豊饒祭と言って、稚魚の放流行事、それから啓発活動等をやっております。

講師先生が多岐にわたっておりまして、ちなみに、中井事務次官はレギュラーでございます。隣の岩元様もレギュラーでございます。みんな仲間なんですけれども、本当に多種多彩な方がボランティアで出ておられます。

去年の講師スタッフが約50名おられますけれども、本当にボランティアで出ていただいております。昨日も誰かいい講師がいないかなという話があったんですけど、皆さんボランティアで出ていただけますので、後でチョイスをして相談があれば、こちらのほうにもいつでも出ていただけるかと思います。

竹漁礁というものは何なのかということなんですけれども、里山に竹の害、恐らくどこもあると思うんですけれど、宗像も同様にあります。地元に水産高校があって、子供たちがその竹を切って、漁礁を造って、鉄を重しにして埋めているんですね。これは非常にいいということで、我々が水産高校の子供たちに習いながら、今、この活動を数年やっております。このポイントは、竹そのものはどこかに飛んでいくんですけれども、そこに書いてあります溶融スラグ（鉄）というふうに書いてありますが、鉄分をコンクリートの中に入れて埋め込むわけです。

実は、山にはフルボ酸と鉄があって、それらが一体になりフルボ酸鉄になります。それが海に沈んで海藻を育成させているという生態系があるんです。これがなかなかうまくいかないということで、強制的に鉄を海に沈めることによって、藻場を再生するということで、海の再生事業をやっております。

これは、新日鉄さんが随分前、多分20年ぐらいになると思うんですけれども、ずっと各地で実証実験しております。それで新日鉄さんの技術をいただきながら、今、こういう活動をしているというところでございます。

ちょっとタイトルがビーチクリーンなんですけれども、山口県はどうでしょうか。玄界灘は湾がないので、ごみがストレートに入ってくるという状態です。取っても取っても、翌日にはさらにこういう状態になるという非常にひどい状態ということで、これもやはり地理的条件ですね。朝鮮半島、中国大陸が近いもんですから。とはいえ、１番多いごみは日本製なんですけれども、次に韓国、中国ですか、こういうごみが大量に来るという、こういう状況下でございます。

海洋ごみについては、答えは簡単で、捨てなければ、解決するんですけれども、なかなか、それぞれの国の事情があって、そうはいかないという状況の中で、海岸清掃をやっております。

それで、ここ数年、宣言を出しておりまして、それぞれ宣言を環境大臣のほうにお持ちをいたしております。

昨年は、宣言に合わせて、海の神殿「宗像」、山の神殿「富士山」ということで、両知事で共同声明を出していただきました。どういうことかというと、それぞれ世界遺産なんですね。今回のテーマに、これは非常に近いのかなと思うんですけれども、川勝平太静岡県知事のほうから、海の神殿「宗像」と山の神殿「富士山」で組まないかという話があって、それは非常にいいことですよねということで、福岡県知事とも合意が取れまして、まさに「海幸山幸」の世界なんですけれども、世界遺産で連携をしながら、海外の国際社会に積極的に発信していこうということで、昨年連携をいたしました。

実は、世界遺産って横のつながりが全くなくて、こういう取組というのが初めての取組なんですけれども、これから、これを使いながら、海と山の問題を訴えていこうというふうに思っております。

このような形で、環境大臣、また、たまたま地元の宮内議員が農水副大臣ということで、副大臣のところに持っていって、あとは、海外のほうに発信していただくために、駐日外交団長のマンリオ・カデロ駐日サンマリノ大使のほうにもお持ちして、各大使館にお渡しくださいということで、このようなことをしております。

これは地元の中高生向けの育成プログラムです。今、コロナの関係で、なかなかできないところはあるんですが、年間６回から８回、それぞれの先生をお招きして、育成プログラムをしているということでございます。

これは、平成29年に「第37回全国豊かな海づくり大会福岡大会」というのが宗像の地で、天皇皇后両陛下の行幸啓の下で開催されました。

それで、よく記念碑なんかを立てて終わるのですが、そういうのはやめようよということで、これは宮司の権限でやったんですが、初めて天皇皇后両陛下が宗像の地に入られましたので、豊饒祭というお祭りを新たにつくりました。お祭りというのは、多分、そうやめられないので、つくったらですね、後輩がやめない限りは、多分、100年、200年と続くと思うんですけれども、豊かな海づくり大会でつくったお祭り、ただ単に海だけではなくて、豊饒なる森里川海を願ってということでお祭りをし、稚魚の放流行事をしております。例年ですと子供たちが入るんですが、この年はコロナ禍で、大人だけでした。

抽象的なんですけれども、あなたたちは何を目指しているのとよく言われるんですが、「神々が棲む海」、「神が鎮まる海」、「神々しい海」を取り戻したいんだということで言っております。非常に抽象的なんですけれども、何となく伝わると、これが１番伝わるということで、このようなことをやっております。

宗像が世界遺産登録されるまで、結構苦労したんですけれども、実は国際機関が宗像を世界遺産に認めた３つのキーワードがあります。「スピリチャルSpiritual」、「アニミズムAnimism」、「エコロジーEcology」ということで、実は宗像というのは古い神社でありまして、社殿がない祭場が大きく２つあります。磐座、神籬というんですけれども、こういうものがあって、非常に古いアニミズム的なものがあるというふうな話をしたら、各国の大使が非常に理解を示しまして、そうなのかと。環境問題の取組も言ったら、それはすばらしいということで、ひっくり返ったんですね。これは、たまたま偶然だったんですけど、頭文字を取ったら、「SEA」になっていたという、これは偶然なんですけれども、

現在、環境会議は「常若」というものをキーワードにして、いろんな議論をしております。SDGsの話もありましたけれども、日本人からすると、何か、ちょっと違和感があるなと。もっと、精神的、文化的なもののほうがいいよなということで、現在「常若」という、これ実は定義はないんですけれども、我々で定義をつくって、社会、海外に発信していこうということでやっております。

「心」と「技」と書いておりますけれども、私は、実は、環境問題というのは、究極心の問題だというふうに思っております。どういう心を持って、技、技術をつくっていって、それを使うかと。そこがうまくかみ合えば、「常若」の社会が形成されるんじゃないかと。その心というのは何かというと、これ実は、アニミズムの世界というのは、別に宗教批判ではなくて、一神教が誕生する以前のかつての古い形は世界中にあったんですね。自然にも神様がいるだとか、いろんなところに神様がいるというのは、別にこれを押しつけるつもりはないんですけれども、そういう心を持って、技術だとか、技を使っていけば、「常若」の社会が実現するんじゃないかということで、現在取り組んでおります。

今年は10月８日から10日、宗像で国際環境会議がございますので、せっかくの御縁ですので、ぜひ、御興味のある方は御参加いただきたいとともに、皆様、発表の場もつくりますので、その際は、ぜひ、お声がけをいただきたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

もう本当にダイナミックな御活動もしてらっしゃる宮司様ということで、非常にユニークな存在でいらっしゃると思います。ありがとうございました。

それでは、引き続きまして、今度は産業界で大変御活躍の、本当に大変なイノベーションをされました、また現在進行形でいらっしゃいます日本環境設計株式会社会長の岩元美智彦様にお願いします。

○**岩元美智彦　日本環境設計株式会社会長（現 株式会社JEPLAN会長）**　日本環境設計（現：JEPLAN）の岩元です。今日はよろしくお願いします。

循環型社会をつくりたいと、１人ではできないということで、どんな社会がいいかなということで、会社をつくりました。

キーワードは、技術、みんな参加型、「正しいを楽しく」、この3つですね。こんな話をお話します。

会社概要については、ホームページをご覧下さい。

経済と環境が両立する循環型社会って不可能って言われていました。これをやりたいなというのが創業のきっかけです。

あとは、消費者、生活者が今までのリサイクルは自分ごとになってないんじゃないかなというふうに私は思っていまして、自分ごとになっていくといろんなことに気づいてくれるんじゃないかなと思って、これを消費者、生活者を中心にして仕組みを考えました。

３つのキーワードについて説明します。

一つ目は技術。弊社はPETケミカルリサイクル技術という独自の技術を保有していて、この技術で工場を商用稼働させているのはおそらく世界で弊社のみです。この技術は、PET素材を繰り返し何回でもリサイクルできる究極の技術と言われています。この写真は、北九州にある衣類（ポリエステル100%繊維）から衣類にリサイクルする工場です。私に服を１着預けてください。そうするとまた服１着ができるんです。それが10回でも100回でもリサイクルができる究極の工場です。

これは、ペットボトルの工場で、川崎にあります。これも同じケミカルリサイクルの技術です。１個ペットボトルがあると、もうほぼ一生リサイクルできるというのがケミカルリサイクル技術なんですね。この２つの工場で、循環型社会はこうあるべきだというのを世界に示しています。

技術は、水平リサイクルと言って、元と同じ物にリサイクルする。１つの物からまたほぼ同量に変換する。それを半永久的に循環させる、という考え方で技術開発をしています。

この技術で再生できる資源を地上資源と呼んでいます。皆さんの不要になったものを地上資源、石油を地下資源と表現しています。

石油を使わなかったら、CO２が半分になりますので、地球に優しいということです。

現在主流のリサイクル技術と我が社の技術は何が違うかというと、主流の技術は、リサイクル対象物を集めて、切って、洗って使うんです。けど、それが洗うだけなので、中の色とか、添加物が取りきれないので、モノが劣化し、リサイクルできる回数に限りがあります。我が社の場合は、分子レベルまで分解して不純物を除去するので、石油とほぼ同品質に再生することができます。ですので、繰り返し何度でもリサイクルことが可能なんです。

リサイクルは１回じゃないよ、２回じゃないよ、半永久的だねということが理想ですので、これを頑張っていきたいなと思います。

以前、消費者にどこでリサイクルしたいですかとアンケートを取ったところ、「買った店」が一番多かったんです。買った店、学校、よく人が集まるところ、ステーション、役所と、こんな順番でした。そこで買ったお店に回収ボックスを置いてみんなが参加して、循環型社会をつくるのが１番いいんだということで、各企業にお話をして、回収ボックスを置くようにしました。大企業と言われる会社さんも、仲間に入ってもらっています。これで、消費者や生活者は、今日は眼鏡で、来月は衣類とか、携帯電話とか、おもちゃとか、リサイクルを何回も体験することによって、自分ごとにしていくと。こういうスキームをつくりました。

環境に興味のない人とか、環境に興味があっても動けない、動かない人が約95％くらいと言われています。ですから、今までは、環境に興味があるとか、専門とか、専業とか、役所とか、学者とか、こういう人たちが一所懸命やってきたけど、消費者は動かなかったねということで、そこを動かすために、「正しいを楽しいに」というキーワードで、イベントをやりました。

それが「バック・トゥ・ザ・フューチャー」のデロリアンイベントなんです。

これは、すごく有名な「バック・トゥ・ザ・フューチャー」という映画があるんです。この映画の中に出てくるデロリアンという車型のタイムマシーンは、ごみで動くんですね。これをリサイクルの象徴だと

いうことで、我が社のリサイクル技術で古着から再生したバイオエタノールを燃料にして（※注：現在はこの事業は行なっておりません）デロリアンを走らせるイベントをユニバーサルスタジオの公式イベントとして行ないたいと、ユニバーサルスタジオ本社に提案しました。ユニバーサルスタジオには、地上のごみを資源に変えて循環型社会をつくりたい、戦争やテロをなくしたい、子供たちの笑顔を取り戻したいという話をして、やはり戦争やテロをなくしたい、という議論に時間を費やしました。戦争やテロの原因っていったら、地下資源の争奪なんですね。石油、金、ダイヤモンドと言われています。ですから、先ほどのPETケミカルリサイクルで循環型社会ができると、石油を使うことがないんです。そういうことで、地上資源でもあると。だから、戦争やテロがどんどんなくなっていくので、本当の子供たちの笑顔を取り戻せるよねということで、ユニバーサルからゴーを頂きました。そしてメインキャストのクリストファー・ロイドやこの映画の脚本家の方に、車の中にサインもいただいたんですよ。

このデロリアンの走行イベントの前に、全国で不用な服を回収するキャンペーンイベントを行ないましたが、リサイクルは環境にいいからみんな参加してよと言っても、なかなか来ないんです。でもこのイベントは、要らない服を持ってくるとデロリアンに乗れて写真が撮れるんです。平気で１時間待ちなんです。長いと１時間半とか、２時間なんです。この待っている間に、環境問題の気づきを得たり、や、リサイクルに参加するので自分ごとになったり、それを参加者がＳＮＳで発信してくれるなどして、短期間で１０万人ぐらいが参加してくれたイベントになりました。

デロリアンの走行イベントでは、メディアがたくさん来て、BBC、CNN、NHKなど世界各国に映像が発信されて、環境って楽しいほうがいいねとか、すごい技術だねとか、お前のところとやりたいなというメールが翌日から来てパンク状態でした。

それから飛行機、みんなで飛ばそうねというイベントもしまして、デロリアンと同じように回収した古着（綿素材）からジェット機の燃料を開発しました。10万着集める予定で、子供たちに着なくなった服で飛行機飛ばそうぜ、イエイ、イエイと言ったら、25万着集まりました。そして今年（2021年）の2月、羽田～福岡便でフライトしました。

大手ファストフードチェーン店で購入するとついてくるおまけのおもちゃがあるのですが、これも子供たちが使い終わったらリサイクルする、という文化にしていきましょうということで、今、約2,900店舗で、これをやっています。７年かかって、全店で実施するまでになり、子供たちは、今、約300万人参加しています。ですから、大人がですね、議論は尽くし、やることは分かっているのだけど、動かない、だんまりと。けど、子供たちは、リサイクルしようと、遊び終わったらリサイクルだと、もう文化になって、この数がどんどん増えていっているということですね。これはいい事例だと思います。

その他、衣類のリサイクルや製品作りも、様々なブランドと一緒にやっています。

こんな感じで、地上資源の経済圏をつくりたかったと。消費者と回収拠点を横でつないで、さらに技術を繋ぐと、地上資源が出てくる。そして製造メーカーをつないで製品ができてそれが店頭に並ぶ。消費者は、大人だけで500万人、子供入れて800万人以上参加しているんですけども、これは環境大事だねとか、楽しいこと好きだねとか、戦争、テロ嫌いだねという人が参加してもらっています。

回収拠点は、各社ばらばらの仕組みを一つにしましょうと。横串しを刺して、みんなが参加できるプラットフォームをつくりました。

技術は、うちでできないものは他社と連携しています。最初にやってくれたのは日本製鉄なんですけど、うちでリサイクルできないものを新日鉄さんの鉄を造るプロセスに入れてもらっています。世の中ごみってないですね。こんな感じで技術を連携すると、地上資源ができて、メーカーが安心して使って、商品が店頭に並ぶ。また消費者は、自分たちの不用なものを再生してできた地上資源で作られたＡ商品と、地下資源でできたＢ商品、どっちを使うんですかと言えば、Ａを買ってくれるんです。物がたくさん集まると技術に人と金が投資されて、たくさんの地上資源ができて、また、たくさんのメーカーが集まる。この地上資源の経済圏をみんなでつくろうということで、今、数百社が参加してもらっています。ですから、回収拠点や小売りさんには、このままいくと海洋プラスチック問題で大変だよとか、技術を連携しないと、

異常気象になって人間住めなくなるよとか、メーカーには地上資源を使わず人の犠牲の上で成り立っている経済って、これは本当の姿と思いますかと説明、説得をして、これがぐるぐる今、回り出しています。

画期的なのは2017年10月にワシントンでやった国際会議で、Ｈ＆Ｍは「2030年までに、私たちはもう地下資源を使わない。地上資源だけで服を作ります。もう新たな資源は使わない。」って約束したんです。

そうすると、翌年、他のたくさんのグローバル企業が、私たちももう地下資源を使わないんだと、地上資源だけでいかないと地球がもたないんだとコミットしました。今、循環型社会が本当にできているのは日本なんですね。このケミカルリサイクル技術を、各地域、国に導入しようと、今本当に急いでいます。

フランスは服を燃やさない法律をつくりました。

フランスの国営企業もですね、うちの代理店になってくれまして、今、一緒に世界中でプラントを造る動きをしてもらっています。

私は、最後に、自分たちの便利な生活の裏側には資源争奪戦争が起きていると、伝えたいです。

世界中、金とか、武器が欲しいとか言うけども、そうじゃなくて、循環型社会さえ、みんな参加型の循環型社会さえ形成できたら、やはり、地球にも、世界平和にもよいので、こういう事業をさせてもらっています。

以上でございます。ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

今、ファッション業界では、サスティナブルな取組をしていなければ、ブランドではないという、そういう視点がございます。まさに、あらゆるメーカーというかブランドは岩元さんの活動に触れておかなければならない状態になっているように思います。ファッション業界ばかりでなくそれ以外の業界でも日本環境設計がリサイクルで先導されているということですね。そして、参加型であり、「正しいから楽しい」という、そういうキーワードをいただきました。ありがとうございます。

先ほどの葦津様とともに、文化への貢献といいますか、まさに今回テーマにさせていただいているのは、この御２人の発表からサステナビリティな世界へというふうに考えたわけでございます。

それでは、ちょっとそれに関連しまして、次のスライドをお願いしてよろしいでしょうか。

岩元様のこの活動に安倍昭恵さんが一緒にやられたプロジェクトがありまして、ちょっとそれを紹介していただきたいと思います。

○**安倍**　先ほど御挨拶の中でも申し上げさせていただいたんですけれども、Ｇ20の２日目、大阪で開催をさせていただいた配偶者プログラムのテーマを海洋環境にいたしました。その2018年の伊勢志摩サミットの配偶者プログラムでも、海洋環境を取り上げて非常に盛り上がったので、私は、Ｇ20でも海洋環境を取り上げたいと言ったら、外務省はやや難色を示しまして、同じプログラムを２回やるのはいかがなものだろうかというふうに言われたんです。けれども、これは本当に世界の中で重要な問題なので、私は絶対にこれでいきたいというふうに強く言わせてもらって、海洋環境のプロジェクト、プログラムになりました。世界の首脳のパートナーの皆さんは、ほとんどが女性です。

皆さんには、後から同じ物を差し上げましたけれども、岩元さんのところで、これを作っていただきまして、皆さんにプレゼントをさせていただきました。御説明をさせていただいて、大変皆さんには好評をいただいて、喜んでいただきましたので、どのようなものなのかを、ちょっと岩元さんから御説明をいただければと思います。

○**岩元**　これは海洋プラスチックでできたスカーフでありまして、現在、世界的に海洋プラスチックが問題になっています。ですから、回収のイベントはすごく大事です。世界中、日本もそうですけども、海ごみを拾う。これはすごく大事な行動ですね、やってほしいですね。けども、ほとんどの国は、回収したごみを燃やすんですね。でも弊社は先ほど説明したケミカルリサイクルという技術がありますので、この海ごみをケミカルリサイクルの技術で石油と同じ品質に戻して、これに加えて日本の技術も見せようと思って、１番細い糸を作って、スカーフを海の色に染めてお納めさせてもらいました。これは海ごみがこういう素敵な商品になるということにまず、びっくりするだろうというふうに思って作りました。それと最先端技

術、これは品質がよくないと細い糸って作れないんですね。そういうことで、ここまでを表現しようと思って、今回作りました。これが、Ｇ２０のファーストレディー用に作ったスカーフなんです。

○**水谷**　ありがとうございました。すばらしいですよね。技術を持っていても、そういう出会いの背景がないと、なかなか売り込みが難しいですよね。リサイクルしたものがここまで美しいものに、また価値あるものに持っていくことは、なかなかできませんけれども。素晴らしいアップサイクルの事例をご紹介頂きましてありがとうございました。

それでは、江原市長の長門市の取組だったり、あるいは、今回のパネラーの皆さんのお話を聞いていただいて、コメントをお願いしたいと思います。

○**江原達也　長門市長**　今日は御三方大変ありがとうございました。本当にレベルの高い話を聞かせていただいて、これから、私がコメントをしながら、ちょっと長門市の活動についても触れさせていただきたいと思います。まず、中井環境事務次官がお話されたＳＤＧｓというお話なんですけれども、長門市も遅ればせながら取組を始めているところで、去年の８月に日本航空さんと連携協定を結ばせていただきました。こういうふうに、SDGsというのを一つの項目に入れさせていただいて、それから、日本航空の方に講師をしていただいて、職員のSDGsについてのいろいろな講習をしていただいたというところでございます。

そして、今年の2021年度予算のキャッチフレーズを「誰一人取り残さない新たなる日常への挑戦予算」ということでつけさせていただいて、SDGsを意識した予算にしているということを、初めて、そういったところを出しました。

そして、今回に合わせたわけじゃないんですけれども、７月１日にSDGsの推進指針をですね、市としての推進指針を出させていただいて、そして、７月7日に長門市役所としての「SDGsキックオフ宣言」というのをやって、これから長門市役所の総力を挙げて、しっかりとSDGsの理念とか、意義というのをしっかり勉強していって、これから施策運営にしっかりと17のゴールと169のターゲットを意識した施策運営をやっていこうということでございます。そして、持続可能なまちづくりをしっかりとやっていくということを宣言させていただいたというところでございます。

そして、その次のカーボンニュートラルという言葉が出てきていたと思うんですが、先ほど日本地図で多くの自治体の名前が載っていたと思うんですが、あそこには残念ながら長門市の名前が載ってないんですね。全国の40都道府県をはじめ、全部で420の自治体の名前が載っていたんですけれども、残念ながら山口県は、県の名前もないんですが、下関だけが、今、カーボンニュートラル宣言をしているというところでございます。

私どももカーボンニュートラルをしっかりやっていかないといけないという意識はあって、町内で議論を始めたところでございます。しっかり、できるだけ早く宣言ができるようにしていきたいなというふうに思っております。後でアドバイスいただければというふうに思っているところでございます。

あと、カーボンニュートラルをやるには、太陽光発電もしっかりとやっていかないといけないと全国でですね。こういう中で、環境省さんが規制を弱められた関係で、非常に今太陽光発電の申請が上がってきているというところで、国道沿いにも太陽光発電が目立ってきたというところで、それをどう私どもとして、観光都市として売っている長門市が、自然を大事にしている長門市が、国道沿いに太陽光が並ぶことについて、どうしていったらいいか、アドバイスをいただければというふうに思っているところでございます。

それと、２番目の葦津宮司様のお話でございますが、葦津宮司様がいつも言われているのは、海に国境はないというお話をよくされているというお話を伺っているんですけれども、その中で、私ども長門市も海岸清掃について２つの大きな海岸清掃をやっております。まず１つは、山口県主催の日韓海峡海岸漂着ごみの一斉清掃です。これのスタート清掃を毎年長門市でやっていただいているところでございます。残念ながら、コロナ禍で、今年もやってないんですけれども、前は大浦海岸であって、その後、二位ノ浜でやっているんですけども、現在は。安倍昭恵さんにも大浦のときには、何度か出ていただいたというところでございます。

そして、長門市独自の海岸清掃としましては、毎年２回、海岸清掃の日を決めて、海岸清掃をやっております。今年も７月４日に海岸清掃をやらせていただいて、約全市民で1,100人が参加して、７トンの海岸ごみを清掃したというところでございます。

葦津宮司のところでは、この後、稚魚の放流とか、竹漁礁の話とか、色々されているんで、後で、ちょっと質問させていただければというふうに思います。

そして、岩元会長のところは、本当にわくわくするすばらしい話で、話としては本当にすばらしい話なんですけど、なかなか科学的にリサイクルするケミカルリサイクル、そして、不純物ゼロのリサイクルという、言葉としては分かるんですけれども、実際どうやったら実現できるだろうというところ、ちょっとですね、分かる範囲で教えていただければと、思っております。

どうもすみません。時間取りまして。

○**水谷**　ありがとうございました。

そうしましたら、先ほどの江原市長の質問に、まず、中井様のほうからお願いいたします。

○**中井**　江原市長、ありがとうございます。

長門市がSDGsに取り組まれていると、カーボンニュートラルも、これからということなんですけども、ぜひ、SDGsとカーボンニュートラルって、セットで考えてください。SDGsって、17のゴールがありまして、それを頑張りますと言うのは、本当は2030年までにやるということで、とてつもなく、これもハードルが高い、本当に高いんです。けれども、ちょっとSDGsだけやると掲げているみたいな形になりかねないんですね。カーボンニュートラルの話は2050年にゼロを、SDGsは2030年までに実現する目標で、あと10年しかありません。カーボンニュートラルを46％にするように、国全体でコミットするということは、みんな、その重みがずしっと来ているのですよ。みんな、こんなことできるかというぐらいの感じで、経済界もなっている中で、これセットだと、世界中で、2015年と同じなんですよ。パリ協定もSDGsも同じ年から始まって、今の岩元さんの循環型経済って、全部根っこは一緒なんですけども、そういう５年、10年で、本当に、今、病気だから健康になろうという、そういう動きだっていう認識で進めていただきたいと思うのです。そのときにはエネルギーが大事だってことになってきて、地産地消型と言って、太陽光は間違いなく地域資源だと思うのですけど、それを地域の資源として受け止めて、地域の人が関わって、地域でも使い、地域にもお金が落ちて、地域の雇用やそういうものになるという発想で、それを行政任せとか、外から収奪されるとか、そういう捉え方ではないような勤をですね、ぜひ、この長門の中で起こしていただきたいんですね。そういう形のものを進めましょうという法律改正もしているのです。したがって、ぜひ、太陽光も、風も、バイオマスも、いろんなこと、まだまだ、あまり大きいものをいきなり外に頼って、土地をもう荒らすんだとかいう発想ではなくて、このビルでも屋上でも使えるわけですし、太陽光、本当、屋根はどんどん入れられるとは思いますけども、メガソーラーを外部資源、外部資本に収奪されるというものではない形。地元で関わって、身の丈にあるものを回すんだという、地域に利益があるんだという、そこをまず軸を立ててほしい。そこは、行政がそのメッセージを出して、地域のエネルギーをやられている事業者の方や地域のそうでない観光や異種産業をやっている方と組んで、地域のものを回しながら、それをまた外に売り込むというような、そんな感じのことを、ぜひ、自分の地域をよくするんだという発想の中で進めてほしいということなんです。

○**江原**　実際、長門市でも、当然、海があるもんですから、その海の問題というのは、よく考えておりまして、竹漁礁かどうかは、違うんですけれども、藻場の再生事業というのは、しっかりと今やっているところでございますし、稚魚の放流もやっているんですけれども、同じようなことをやられている中でお聞きしたいのは、そういうことをやりながら、宗像さんのほうでは、国際環境会議とかも開かれながら、将来に向かって、どういうふうにやっていることを持っていきたいか。さっき、「神が棲む」とか、そういう言葉で言われていたんですが、具体的にどういう方向に持っていきたいというふうに思ってらっしゃるかを聞きたいなと思います。

○**水谷**　ありがとうございます。地域に返ってきましたね。大きな問題が。

それでは、葦津様、お願いします。

○**葦津**　ありがとうございます。

実は今日も野心を持ってきているんですけれども、海辺の市町村だとかと組みたいのです。実は今月の７月22日の海の日に鎌倉でビーチクリーンをやろうとしていました。コロナの影響で中止にして、来年やってみようと思うんですけれども、実は鎌倉に行ったら、ごみがないんですよ。海ごみがですね。恐らく日本海側の、福岡もそうですし、九州もそうですけれども、北部九州、それから中国、それから北陸あたり、この辺が多分ひどいんじゃないかなと。でも、一方で、環境問題に意識の高い人ってのは都市の人なんですよね。つまり東京周辺の人たちなので、このことをあまり御存じないんじゃないかなということで、まずは認識をしてもらうということをやりながら、とにかく、ごみを海に捨てないでほしいと。それから、本当に中国だとか、韓国なんかに言いたいんですけれども、たどり着いたごみは、僕らも自分らで言っているんですけども、そこの市町村で処理処分をしようよと。これは誰々のせいとか言っても、なかなか収拾がつかないです。東北の震災のときに日本のごみがアメリカに大量に流れて、日本はお金を払いましたよね。あれも何かちょっとおかしいなと思うので、たどり着いた国が責任を持って処分すると。でも、それはきちっと世論に伝えながら、こういうことはやめませんかと、こういうことかなというふうに思っています。

○**水谷**　ありがとうございます。山口県、長門市も、清掃とかもやっていますし、ぜひ、連携をしていっていただければ、ありがたいと思います。

○**岩元**　次、私ですね。技術の話は、先ほどちょっと説明したんですけども、いかに不純物を化学的に取るかということで、説明が長くなるので、ここは割愛ですけども、やっぱり、１番大事なのは、みんなが参加して自分ごとになるイベントが、実は、初期には大事なんですね。自分ごとにする。例えば、ペットボトルからペットボトルへのリサイクルって、できてそうで、実はまだあまりできてないんですよ。リサイクルしやすいのにできていないと。ですから、皆さんと共にイベントをしながら、それを自分ごとにしていくとか。その他には衣類を集めて、例えば、地域の中学生や高校生の制服にしていきたいとかですね。そういう楽しい企画等をして巻き込んで、みんなの意識が変わっていく。そういう企画がすごく大事だと思っています。そして技術は、整ってきました。小さなプラントを地域に建てられるような可能性は十分、今出てきていますので、そのときは、また御相談させていただけたらなと思っております。

○**水谷**　ありがとうございます。

そしたら、今、江原市長は公務に出かけるために、あと３分しかないので、先に１分間の最後の、今の話を受けて、御発言いただいていいですか。

○**江原**　御回答ありがとうございます。本当に、今日教えていただいたお話は、本当に長門市だけじゃなくて、県そして国に関することまで全部つながっているので、しっかりと、国・県と連携しながら、こういったものをしっかりと取り組んでいかないといけないかなというふうに思ったところです。

今日はどうもありがとうございました。

○**水谷**　どうもありがとうございました。（拍手）

それでは、ちょっと時間が差し迫っていますけれども、安倍昭恵さんのほうでコメントをお願いしたいと思います。

○**安倍**　本当に御三方それぞれにすばらしいお話をありがとうございました。私も大変勉強になりました。

環境問題、私は30数年前にサンゴ礁保護協会という会の会員になったのが１番最初に環境に関わるきっかけだったのですけど、その頃は、環境は票にもならないしという、政治家にとって環境問題というのは二の次のような問題だったんです。今や環境を語れない人は政治家としても駄目なんじゃないか、世界中の政治家が環境問題をトップに上げるほど、世の中がすごく大きく変わってきたなというのを感じているところです。

そんな中で、中井事務次官は、もともとは大蔵省、外務省におられましたけれども、本当に環境を考えておられるすばらしい事務次官でいらっしゃるので、こういう方、もちろん小泉大臣もすばらしいと思い

ますけれども、また実務のほうで、こういう方が事務次官でいらっしゃるということは、本当に心強いことです。私は、先ほど神々の棲むというような話だったりとか、循環とか、ネットワークとか、とにかく、日本型の環境問題の解決というのが世界を変えていくと私は本当に信じているので、御三方には日本の中でリーダシップをとって、日本の中を変えて、長門市を変えていくとか、そういうもう問題ではなくて、世界が、もう、このままいくと地球が終わってしまうのではないかと、今、それぐらい危機的な状況にあると私は思っているんですけれども、そのリーダシップを取って、世界を変えていっていただきたいなというふうに思っています。

そんな中で、今日皆さんにお話を聞いていただいて、自分が何ができるかということをやはり考えていただきたい。自分ごとということは、さっきから何度も出ていますけれども、環境問題は心の問題というお話もありましたけれども、もっと人の問題だと思います。一人一人の意識がどれぐらい変わっていくかということによって、実はあっという間に環境問題というのは解決していくものではないかなというふうに思います。そこがなかなか、SDGsを掲げながらも、一人一人の意識が変わらないことには、環境問題は変わらないと思うので、ぜひ、今日何か感じられた方は、自分に何ができるだろうかということを考えていただきたいというふうに思います。

ビーチクリーンも、今日、柳居議長には、遠く周防大島からお越しいただきましたけれども、先日、周防大島のほうでも、実はビーチクリーンをさせていただきました。瀬戸内海側でビーチクリーンをするのは初めてだったんですけれども、広島からカキの養殖のプラスチックの棒のようなものが大量に流れてきていました。海というのは本当につながっているんだなと。なかなか、それが、広島が多分どうしていいか分からないので、お金を出して買い取っていただくだけという話を聞いて、行政も一緒になって、ただ、流れてきているものを拾うだけではなくて、じゃあ、どうしたら流れてこないようにするのかということを一緒になって考えていかなくてはいけないんだろうなというのを感じました。

時間なので、話したいことはいっぱいあるんですけれども、これぐらいにさせていただきます。

今日は本当にいいお話ありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

ちょうど、今、話題になったところで、フロアの御意見をと思ったんですけども、時間がもうあと３分になってまいりました。

それで、今、市のお話がされたんですが、県のお立場とか、周防大島の立場もあって、柳居議長にちょっと一言だけお話していただきたいと思います。予定外でございますけど、ちょっと光がないので、舞台上に御登壇下さい。

○**柳居**　いつも、アグリアートの照明係をずっと務めておりましたが、今日は発言の機会をいただきまして、ありがとうございます。

大島も周りが海でございまして、いろいろな環境の活動を続けておりますが、このたび、地家室のほうで、アワサンゴ、これを発見いたしまして、国の指定をいただきました。そして、これを育てながら、愛でながら、そして観察しながら、地域の発展につなげさせていただこうということで、いろんな活動をする中で、ちょうど、水谷先生、昭恵夫人より、こういったシンポジウムの開催をしていただきました。私ども地域の者どもが夢プランというのをつくりまして、それにやっていこうという矢先に、こういう機会をいただきまして、本当に力づけていただいております。

次は一緒においでていただいて、まずは水着になってサンゴを見ていただいて、それから、どういう活動をしていくかということを、先ほど来、お願いをしたところでございます。島ですから、海がきれいであるということが命でございまして、何とか環境を守りながら、自然と調和しながら、そこの恵みの中で、また新たな展開をしていきたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。突然振って申し訳ございませんでした。私たち、アワサンゴの美しさに惚れ込みまして、これを守る活動の一環として、ビーチクリーンを６月27日にさせていただいたところな

んですけれども、やはり、美しい自然を見て感動するという、その心から、やっぱり、環境を大事しなきゃという、そういうふうに持っていくという感じが、私たちのスタンスでもあります。ありがとうございました。

それでは、時間となりましたので、３名のパネラーの皆様に御一言ずつ、お言葉をいただきまして、閉じていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○**中井**　ありがとうございます。昨日の午後からこちらに寄せていただいて、長門は初めてですけども、本当に今日、自然の恵み、森里川海という言い方をさせていただきましたけども、すばらしいポテンシャルがあると実感しています。山口県全体がそうだと思うんですけども、ぜひ、自然、この上、すばらしい森里川海、この恵みをぜひ地域の皆さん、いろんな外の人の意見とか、外の見方とかも入れながら、貴重さを地域の人が実感していただいて、それをよりよくしていくという発想で、地域づくりをやっていただきたいと思います。

朝、泳いできましたけど、最高でした。ありがとうございます。

○**水谷**　ありがとうございます。

○**葦津**　やっぱり、連携をしていくということが非常に重要だと思います。長門市さんも、ほかの市町村ですね、そこで、いろんな声を上げていけば、中井事務次官も物が言いやすくなるということで、我々の意向を環境政策をつくってくれるんじゃないかというふうに思いますので、本当に連携を取っていくということが重要かなというふうに思います。

○**岩元**　私は、常々リサイクルは子供になりなさいとよく言うんです。大人も議論をするんだけど、動かないと。しかし、デロリアンだったり、飛行機を動かしたり、おもちゃを集めたり、これは全て子供たちが最後踏ん張って頑張ってくれたお陰なんです。子供たちは動くんです。結果が出ているんですね。大人は議論して動かないんです。ですから、リサイクルは子供になりなさい、そういう純粋な気持ちが大事だというふうに僕はいつも言っています。ぜひ、お子ちゃまになって、リサイクルに参加していただければというふうに思っております。今日はどうもありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、本当に今日は、それぞれ御一人ずつ１時間も２時間も話していただけるほどのコンテンツをお持ちの皆様に僅かな時間に贅沢ないろんな示唆をいただきまして、私たち大変勉強になりました。本当にありがとうございました。

じゃあ、これをもちまして、閉じたいと思います。

皆様、どうぞ拍手をお願いします。（拍手）

付録Ⅴ（2022）

Blue & Green Art Project BGAP 2022 in 周防大島
「民俗学者 宮本常一に学ぶ地域創生～地域循環がある大島町のライフデザイン～」
日時：2022年５月22日
場所：周防大島町橘総合センター（大島郡）
シンポジウムの部
基調講演
　新山玄雄（NPO法人周防大島郷土大学理事長）　「宮本常一にまなぶ」
パネラー
　新山玄雄
　中井徳太郎（環境省事務次官）
　岩元美智彦（日本環境設計株式会社会長）※現：株式会社JEPLAN（2022年６月に社名変更）
　藤本淨孝（周防大島町長）
コメンテーター
　安倍昭恵（ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会名誉顧問）
モデレーター
　水谷由美子（山口県立大学国際文化学部教授・学部長）

【挨拶の部】

○**司会**　皆様、本日はご来場いただきありがとうございます。ただいまからBlue＆Green Art Project BGAP in周防大島町。民俗学者 宮本常一に学ぶ地域創生 地域循環がある大島町のライフデザインを開演させていただきます。

　私達は本日の司会を務めさせていただきます周防大島高校３年來海彩芽（きまちあやか）と藤川由（ふじかわゆい）と申します。よろしくお願いいたします。まず主催者でありますブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会代表の水谷由美子より皆様にご挨拶申し上げます。

○**水谷由美子　BGAP実行委員会委員長**　皆様こんにちは、ただいまご紹介いただきましたブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会の実行委員長をさせていただいております水谷由美子と申します。皆様本日は、「民俗学者宮本常一に学ぶ地域創生地域循環がある周防大島のライフデザイン」に多数お越しいただきまして誠にありがとうございます。また本日は、ご来賓として、柳居俊学県議会議長そして防衛大臣岸信夫の首席秘書官の吉永隆様にお越しいただいております。ご挨拶をいただきますこと、誠にありがとうございます。また開催地として、周防大島町の藤本淨孝様におかれましては、スタッフの皆様に多大なるご協力をいただきまして、開催させていただくことができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。シンポジウムの開催については実行委員会の顧問、内輪ではございますが、コメンテーターとして安倍昭恵元内閣総理大臣安倍晋三夫人にお越しいただいております。また環境省事務次官中井徳太郎様、および日本環境設計（現：JEPLAN）株式会社会長の岩元美智彦様にパネラーとしてお越し頂いております。お忙しいお二人に二度も延期をしてしまいまして、もう今回は３度目の正直ということで実現いたしました。大変混乱させてしまい、誠に失礼いたしました。また地元からは基調講演講師およびパネラーとして宮本常一先生から直接教えを受けられましたNPO法人周防大島郷土大学理事長の新山玄雄様。また周防大島町を代表して藤本淨孝町長に来ていただいております。本日のBGAP実行委員会の事業が周防大島町におけるより良い未来社会デザインに役立てていただければ幸いでございます。さて今回の企画内容は、展覧会とシンポジウムとなっております。既に入場時にロビーでご覧いただいたと思いますが、昨年度に周防大島のご支援をいただきつつ、山口県立大学と周防大島高校が共同で取り組みました「アロハプロジェクト」および「周防大島町ハワイ化計画」という共同研究の成果が発表されているところでござい

ます。またお帰りの際にご覧いただければと思います。昨年度周防大島町、山口県立大学および周防大島高校が協力包括連携を締結いたしまして最初の成果とも言えます。本日は松尾量子教授の指導のもと、山口県立大学国際文化学部の文化創造学科の学生たちが展示および運営を担当しています。太田慎一郎校長の指導のもと、高校生の皆様が作品発表や司会まで担当していただきまして誠にありがとうございます。会場の皆様、どうぞリラックスしてこれからの企画を楽しんでください。それではこれをもちまして、主催者の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

○**司会**　続きまして、開催地を代表しまして、周防大島町長 藤本淨孝がご挨拶申し上げます。

○**藤本淨孝　周防大島町長**　ただいまご紹介を賜りました、周防大島町長藤本淨孝でございます。普段より皆様には町政推進にお力をいただき、ご協力を頂きまして御礼を申し上げます。この場をお借りいたしまして、お礼を申し上げます。本日はブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP2022in周防大島ということで主催の水谷先生そして昭恵先生のお力を頂き、このように盛大にシンポジウムと展覧会をお開き頂きましたこと、改めまして御礼を申し上げます。ありがとうございます。

そして、今日は環境省事務次官の中井徳太郎次官もお越しをいただいております。周防大島において、令和4年の予算で地家室園地という、ニホンアワサンゴを観察し知っていただくその拠点となる施設が、この夏から着工になる予定になっております。町の広報また議会などで皆様にこの取り組みをご披露しているところです。昨日このシンポジウムに出席していただく皆さんと一緒に、地家室園地の予定地の視察をさせていただきました。この地家室園地という施設を町内の皆様だけではなくて、町外の皆様、日本中、そして世界中の皆様に、ニホンアワサンゴそして周防大島の豊かな自然を学んでいただき楽しんでいただく施設の整備を進めているところでございます。

加えて、本日のシンポジウムの題材でもあります宮本常一先生の教えについても、取り組みをしているところでございます。周防大島町において、宮本常一先生から頂いた教えはとても大切なものであると思っております。宮本先生は民俗学者としてこの周防大島の生業を研究され、広く発信をされてこられました。これは今、周防大島や日本における様々な課題であります人口減少であったり少子高齢化であったりそういったことの1つの答えが、宮本先生の研究の中にあるのではないかと私は思っております。

本日このシンポジウムの中でさらに再確認をして、町民の皆さんが、前を向いて進んでいこう、生活を作っていこうというきっかけになれば大変嬉しいところです。本日このようになかなかお話を聞くことができない皆様に機会をいただき、町民の皆様にとっても、このように町内外からお越しをいただいたことが一つのきっかけとなって、新たなまち作りに進んでいくことを期待しております。結びとなりますが皆様のご健勝そしてご活躍をお祈り申し上げましてご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

○**司会**　ここで本日のご来賓の山口県議会議長、柳居俊学様よりご祝辞を賜りたいと思います。柳井様、よろしくお願いいたします。

○**柳居俊学　山口県議会議長**　本日はこうして大島でシンポジウムを開催していただきますことを本当にありがたく心より感謝申し上げます。水谷先生、安倍昭恵様そして今日ははるばる環境省の事務次官さらには日本環境設計株式会社会長の岩元さん、そして先日まで山口大学の学長をしておられました岡先生は今度県立大学の理事長にご就任をされまして、お越しをいただいております。ニホンアワサンゴは環境省の方で御指摘をいただきました。そして、これを、我々、ここに住む島民が人と自然の関わりの中、海から恵みをいただき、そして環境を整え新たな可能性を信じて力を合わせ、心を合わせ、そしてまち作りをしていこうという矢先にこのようなシンポジウムを大島での開催をいただきましたこと、本当にありがたく存じます。有意義なシンポジウムになり、そして皆さんとまた明日に向かって、島作りに向かって頑張っていくスタートになればと願っております。今日はありがとうございました。

○**司会**　柳居様ありがとうございました。本日は防衛大臣 岸信夫衆議院議員よりお祝いのメッセージが届いております。岸事務所の吉永様よりご披露頂きたいと思います。吉永様よろしくお願いいたします。

○**吉永隆　岸信夫防衛大臣首席秘書官**　ただいまご紹介いただきました岸信夫の代理で参りました吉永と申

します。本日はお招きいただきまして誠にありがとうございます。本来でございましたら、岸信夫本人が参りましてお祝いの言葉を述べるところでございますが、お話にございました通り、公務で出席は叶いませんでした。平素より特に周防大島町の皆様方にはお世話になっておりまして、この場をお借りいたしまして感謝申し上げますとともに、今後ともまたよろしくお願い申し上げたいということでございます。本人からメッセージを預かっておりますので読み上げさせていただきます。

「祝辞、主催者の水谷由美子実行委員長、安倍昭恵名誉顧問をはじめとして、官学公の連携、ご尽力により、ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP 2022in周防大島町の開催を喜び申し上げますとともに、これまでの活動に新ためて敬意を表する次第です。また、本日は周防大島町が誇る民俗学者の宮本常一先生について、新山様からの基調講演もあると伺っています。宮本先生が残された遺産を紐解きながら、自然豊かな海と山を併せ持つ周防大島町から理想の地域のあり方を作り上げて、各界各方面へ向けて発信していけるものと大いに期待いたします。まさに世界的に持続可能な開発目標に向けて取り組まなければならない現在、我が国も社会活動および地球環境保全のためにできることを考えて実践していくことが求められています。また、私自身、世界最大級のニホンアワサンゴ群生地と密接な関わりを持つNPO法人自然と釣りのネットワークの顧問を務めさせていただいており、エコツーリズムの推進により、地域活性化に皆様と一緒に取り組んで参る所存です。同時に防衛大臣として、国民の命と平和な暮らしを守るという重大な使命の中、国を守るという広い観点では、わが国古来から、歴史、文化、伝統を育みつつ、田園風景が残る自然、美しい日本を次世代に繋いでいかなければなりません。貴会の活動がさらに大きなうねりとなっていき、関わられた方々や地域が共に幸せを感じられるものとなりますよう、心より念願し、機会の発展並びにご関係、本日ご来場の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。令和４年５月22日、防衛大臣衆議院議員岸信夫でございました。本日は誠におめでとうございます。」

○**司会**　吉永様ありがとうございました。開会行事は、以上で終了いたします。基調講演の準備を行いますのでしばらくお待ちください。

○**司会**　準備が整いましたので、基調講演に移らせていただきます。本日の講師は新山玄雄様です。新山さまは、沖家室にある泊清寺のご住職であるとともに、旧東和町時代から一昨年まで町議会議員をお務めになられ、現在はNPO法人周防大島郷土大学理事長、白木半島地区コミュニティ協議会会長などの要職に就かれていらっしゃいます。本日は「宮本常一に学ぶ」、と題し、ご講演いただきます。それでは新山様、よろしくお願いいたします。

○**新山玄雄　NPO法人周防大島郷土大学理事長**　ただいまご紹介をいただきました新山でございます。このようなシンポジウムをこの場で開催していただきまして水谷先生、安倍様、本当に心から感謝申し上げます。宮本先生もたぶん喜んでいらっしゃるのではないかと思います。なくなってもう41年がたちます。1981年１月30日に、73歳でお亡くなりになりました。時間があまりありませんので、大急ぎでご紹介をしたいと思います。レジメにこの冊子が届いているでしょうか。この冊子にしたがってお話をしたいと思います。

ページをちょっと開いて頂きまして「宮本常一とは」と書かれています。宮本先生は周防大島の西方、今でいう長崎で明治40年にお生まれになられました。西暦で言うと1907年ということになります。西方尋常小学校を卒業されました。ここに年譜があります。いろんな人と宮本先生のことをおっしゃっていただいているのですが、司馬遼太郎さんから宮本先生が亡くなったとき、こういうメッセージを残していただきました。「宮本さんは地面を空気のように動きながら歩いて、歩いて、歩き去りました。日本の人と山河をこの人ほど確かな目で見た人は少ないと思います」。

日本人と、日本ということを考えたときに本当にもう地に足がついたような、そういう見方ができる。歴史的にも、そして現在、将来に向かって日本人と日本のことをですね、いろんなメッセージを残していただいた。司馬さんは晩年に「今の日本はこれでいいだろうか、芯になるものがない、今の日本には芯になるものがない。このままでは日本の国が溶けてしまうというような、溶解するというような」と言われました。

私はドキッとしましたけれども、そういうようなこともちょっと垣間見られるなと思います。そういう要素もあるとは思います。最後に司馬さんが「しかし私たちには宮本学が残された。それだけでも望外の喜びとしなければならない」っていう。それほどまでに宮本先生を高く評価していただきました。

ここに書いてあるように、歩いた距離は16万キロ。16万キロというと地球４周ですけども、有名な話にはなりますが、宮本先生は色んなところを渡り歩いているんですね。旅人。旅をするんですね。自分の足で歩いて、そして自分の目でその地方を見て、そしてその地域の人たちの話を聞いてそういうことを繰り返していた。日本の文化の発掘者であり、16万キロ歩いて来たことは有名な話でした。渋沢敬三さんというのが宮本先生の恩人であります。渋沢敬三さんっていう方が、渋沢栄一の去年「青天を衝け」の主人公ですが、その渋沢栄一さんのお孫さんです。

その先生に宮本先生が深いご指導をいただいた。その渋沢敬三さんは日銀の総裁とか大蔵大臣を務めるお勤めになられた。「宮本君の日本で立ち寄ったところ、赤いインクでペン先で日本地図に押したら、日本地図が真っ赤になった。青森行ったとか、北海道行ったとか、沖縄行ったとか、そういうことを押してみたら日本中が真っ赤になる」、それぐらい歩いて、歩いて、歩いたということであります。そして、民俗学者 宮本常一ということでありますけれども。その民俗学者としていろんな地域の人作ります。そして地域作り、今で言う地域共生、地方創生と深く関わっているわけであります。私から見たらスーパーマンみたいな人ですが、民話、文芸、生活史、農業技術、農村経済、塩業、そして漁業、考古学、開拓史、都市民俗、日本文化論、もうすごい、どれをとっても一流の仕事を残していただいております。

そして一方では、農業技術者、自分が長崎で生まれて、農家でしたから農作業をずっとやってたんですね。農業技者、離島振興、離島振興法は先生が作られた。日本の離島で行ってない島はないと思うぐらいでしょうね。もう日本の離島はたくさんありますけども。離島の振興、山村の振興、地域芸能の発掘、育成をした。有名な話は、佐渡の鬼太鼓座。鼓動ですね。太鼓集団。佐渡であっても世界中に通じる芸能ができるんだということです。すごい応援するんですね。今でも付き合いがありますけど。地域活性化のプロデューサー。まだ私がいろんな人と付き合いがあるんですけども、宮本先生にお世話になったということで、今でもネットワークがあります。

そして歌人でもあって、１万首ぐらいあったと思いますが、その歌人としての才能や文学者としての実績はあんまり知られてないんですけども。それもゆっくり話がしたい。教育者として、武蔵野美術大学の教授、58歳くらいでなられたと思います。晩年のことです。そし日本観光文化研究所の所長、日本近畿ツーリストの観文研といいますけども、この所長になって、観光というのは地域の光を見るという仕事をやっていこうということで、若い人をいっぱい育てるんですね。武蔵野美術大学でもそうです。いまだに宮本先生の影響を受けて、地域活動をされる方がたくさんおられます。

宮本先生は晩年、周防大島郷土大学の学長となられます。昭和55年３月25日です。表紙の写真が実は宮本先生の開校記念講演。この開講記念講演のご挨拶は今でもよく覚えています。大事なところは覚えています。それほど感動的な話でした。

そして全国各地でいろんなところで講演したり、講習をしたり。そして座談会で地域の人たちの話を聞く、そして自分も話す。私の島でも何度かそういうことがありまして。そして話を聞く、そしてシンポジウムをした。橋がかかる前ですが。そのときにもう話がすごいアグレッシブで面白いですよね。すごい心が奮い立つような話をしていただいて、そしてあのときにいた人たちがすごく感動してですね。今でも忘れませんが、あー今日はいい話が聞けてよかったのーという。これで安心して眠れる。そのときの雰囲気はやっぱりこれから地域がどうなっていくのだろう、高齢化していく、人が減っていく、若い人もたくさんいないというようなときに、宮本先生の話を聞いて、もちろんもう宮本先生だから説得力ありますね。いつもアジテーターでもあったんですね。今までのアイデアから、そして今、そして将来そういう話をなんかすごくリアリティを持ってお話をしていただいたんですけども。安心して眠れるって言った島の人たちの気持ちが私の島の意見ですが、手に取るように分かりますが、そういうお話ができる人だったということであります。

『私の日本地図』全15巻があります。それをみて司馬さんが『街道を行く』というシリーズを始めたんですよね。そしてその他はいろんな本をたくさん出されております。100冊をゆうに超えるというぐらい。これもすごい文章ですよね。それを残しておられます。わりと読みやすい語り口調が多いですね。これがやっぱり深い、広い、温かい、そういう人の文章であります。ここにもうちょっと持ってきましたからね。これは『民俗学の旅』。これはぜひ読んでいただきたいと思う。もうそして、それこそ日本と日本人ということを深く調査された本であります。

そして『私の日本地図　瀬戸内海Ⅲ周防大島』があります。故郷の周防大島のことを書いている本です。自分の故郷ですから、温かい目でしっかりと書いていただいておる。その今も私の日本地図の最後に、文化を守るについて「それぞれの地方の文化はそこに住んでいる者が守らねば、守りようがないものである。それが守られることによって、新しい文化を迎え入れる力を生ずるのが真の文化的発展ではなかろうかと考えています。文化の導入がふるさと創出への道につながるものであってはならないと思う。」

本当に先生の本はそういう本であります。そして10万枚を超える写真があります。ちょうど戦後から、戦前からの写真もずっとあったそうです。空襲で消えてしまった。10万枚の写真は戦後です。戦後の日本がどんなふうに復興してきたかっていうことが手に取るように感じられます。高度成長によって光とやっぱり影がありますよね。そういうものもしっかり見つめて、そして何を残していかなきゃならんのかっていうことを10万枚の写真が私達に語りかけてくるけれども、それは全部今は宮本記念館にあります。宮本家の皆さんから頂いたわけでございますが、宮本先生が常々言っておられたことはここに書いてあります。

「地域やそこに暮らす人々が、生き生きと元気になるほど愉快なことはない」、そうですから、その地域の人が元気になったりね、明るい笑顔があったり、そしてみんなが安心して暮らせる、そういうふうなことが私にとっては一番嬉しいことだということで。そういうことはもう作り物じゃなくて、人の喜びが、私の喜び、人の悲しみが私の悲しみっていうような、そういう感じでしたね。だから、まず人を渡せって、ここに書いてある。これは仏教の言葉ですが。

自分が渡るよりもまず人を渡せと書いてありますね。どこに渡すかというと彼岸の世界、理想の世界、仏様の住んでる世界。自分は後で。まず人を渡す。ずっとそういう生き方を生涯していた人だから、だから宮本先生は教育者である。私は真の教育者であると思うと同時に、やっぱり菩薩のようなところがあったように実は思いますが、私は足元にも及びません。

そして宮本常一記念館の事業ですが、宮本先生が亡くなられまして、宮本先生の志を継いでいこうということで、1987年から東和町で始まった事業であります。講演会やシンポジウムの開催をやったり結構いろんな方々に来て頂いてやりました。どうしたらこの地域が良くなっていくのかということを本当によくやったと思います。

撮影された10万枚のフィルムの複製をやったり、民具の収集、そして今話がありましたけれども、史跡案内板の設置をして、どこに文化財があって、それはこういう役割をしたんだっていう。

だから旧東和町と一緒に。会報「郷土」を作りました。大島から出て行った人たちもたくさん読者になってもらって、一緒になって郷土を考えてもらうために会報を送りました。また町誌を作ろうということで、これは記念事業じゃないですが、教育委員会の仕事でありますけども、やっぱり我々の骨子ということであります。宮本先生が『東和町誌』を１人で書かれたんです。岡本さんもちょっと書かれていますが、ほとんど１人で書かれた。これは大変なことです。そして文章もやっぱり素晴らしい。そしてふれあい祭りを起こした。これも実行委員会が別にあるが、やっぱり宮本記念事業の推進部会でやったのですが、私は推進部会長で、そして専門部会長は東京の米安先生です。

そしてその事業を起こしたのは、柳居俊学当時の町長。よく考えればすごいことだなと思います。もうやっぱり町政を、町を良くしていこうとするには、やっぱり自分っていうのがしっかりしないと駄目なんですよね。行き当たりばったりでふらふら、時流だからと。やっぱり軸というものをしっかりと定める。まさにこれはそれという役割を果たしたわけです。

そしてその努力というのが結実したのは宮本常一記念館、文化交流センターとなります。宮本家より寄

贈していただいた。宮本家の皆さんがこれも使ってくださいとていう宮本先生の蔵書とか2万冊、そして写真のネガが10万枚、それで残すべきものがたくさんある。そして、アルバムの中から資料もあります。宮本常一関係資料（フィールドノート、著作原稿、メモなど）、県指定有形文化財に指定されてきました。414点ありますが、ということですね。ぜひ宮本常一記念館も行っていただきたいという思いがあります。周防大島郷土大学というのを作られるガイドラインに、昭和55年３月25日が開校記念日ということでありますが、その方面の内容をまとめたのが『郷土の歴史とは何か』。８回ほど講義をして頂く。周防大島を、それをまとめたのがこれです。先生は少なくとも30回はやらんと、語りつくせない。本人もそのつもりで、私達もそのつもりで話をしておりました。８回で終わった。

これだけでも素晴らしいですが。郷土大学っていうの、それを受けてきたということでありますけれども、郷土大学っていうのはここに書いてあります。その地域に暮らす人々が自ら生活する場をもとにして学び、考え自らの生活と地域をより良くしていくことを選んだと。いろんな先生に来て頂いて、いろんな講義にいろんなシンポジウム、そしてその地域を回ったりですね、いろんなことをしてまいりました。ゆっくりお話しできたらいいんですが、あまり時間がありません。

これが郷土大学でございます。もう４年前なんですが、そのときの１年間を取りまとめると、講義を６回やっております。そしてシンポジウム、講演会を２回と座談会をしました。例えばですね涛良美智さん、移住して来た方、大学教授というのではないですが。「周防大島には山があり、そこに住んでいる人々の暮らしがあります。宗教的営みも継続しております。ここには人間の生命の尊厳に触れることができる場所であり、原点に戻れる場所です。」とても面白い講義でした。

小川先生はハワイに渡った漁師さんがどういう活動したか、ハワイに渡った先人の足跡をたどると、彼らの謙虚さ、諦めない、投げ出さない、力を合わせて取り組むことに生きる力をもらえます。その他いろいろ長谷川さんなんか、機織りに取り組むっていう話もしていただきました。大島には素敵なものがたくさんあります。その素敵な部分を活用すると街が元気になると思います。

知の地産地消ということをする。再生可能な世界であります。普通の人なんです。大学の先生とかそういうのではなくて、ここで生産しておる。ここで頑張ってる人たちのお話を聞きました。この他にもいろんなあらゆる方など。というふうなことでございます。今年は22年になりますが、そのSDGsとか、そして地域創生というようなことであります。宮本先生が言ってたのは50年前である。やっぱり今に重なるものがたくさんあると思います。そこから我々も学んでまいりたいと思います。それではちょっと長くなりましたが、基調講演とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○**司会**　いま一度新山様に多くの拍手をお願い致します。続きまして、私達周防大島高校をこの春卒業した先輩たちが取り組んでいました日本アワサンゴの飼育を通した探求活動について映像を上映させていただきます。では、ご覧ください。

○**映像**　周防大島高校普通科環境コースの山口、前田、上杉、小原、濵野、松本、福山です。よろしくお願いします。環境コースでは、２年次からスタートする環境科学という授業を中心に周防大島で起きている環境問題の解決に向けて、様々な活動に取り組んでいます。例えば、近年マイクロプラスチックによる海洋汚染が問題となっています。そこで、砂浜で回収したサンプルを調べたり、海で釣った魚を解剖したりして周防大島周辺のマイクロプラスチックの量を調査しています。また、ミカンなどの柑橘類の皮に含まれるリモネンにはプラスチックを溶かす作用があります。先ほどのマイクロプラスチックの問題を、周防大島の特産品であるミカンの皮を使って解決できないかと考えています。

そして、今年度、私たちが最も力を入れたのは二ホンアワサンゴの調査です。周防大島の地家室は世界最大級のニホンアワサンゴの群生地となっています。その地家室で昨年、ニホンアワサンゴの大量死が発見されました。その原因を突き止めることと、保護・保全の観点から校内の水槽でニホンアワサンゴを飼育できる環境を整えることを目的として活動しました。ニホンアワサンゴは岩礁域の岩に生息しており、地家室では水深３ｍから15ｍに生息しています。植物プランクトンの一種である褐虫藻を体内に取り込み、その褐虫藻が光合成して作った栄養分をもらって生活・成長しています。また、自分でもプランクトンな

どの有機物を捕まえて食べています。

次に私たちが行ったことについて話していきます。実際に学校で飼育するためのニホンアワサンゴを取りに行った様子がこちらです。まず、船に乗りニホンアワサンゴの生息地である地家室に行き、ニホンアワサンゴを採取しに行きました。ニホンアワサンゴを海中から空気中に取り出す際、水温の変化や空気に触れることを苦手とするため、ジップロックに入れて海中から取り出しました。また、クーラーボックスに入れて持ち帰る際は海水の温度に気を付けてニホンアワサンゴが死なないように持ち帰りました。採取したニホンアワサンゴを学校の生徒昇降口に設置している水槽に入れました。ジップロックからニホンアワサンゴを取り出すとき空気に触れさせないようにジップロックごと水槽の中に移しました。

これは実際にニホンアワサンゴを飼育している水槽です。今から簡単に紹介します。水槽内で見えるのはニホンアワサンゴです。水槽の水は学校近くの海水を使用しており、中の岩も近くの海から取りました。水槽の下にある銀色の大きな装置は水温を一定に保つためのヒーターで、その温度は地家室の平均水温を参考に20度で設定しています。その隣の小さな水槽は水槽内の水を循環するための装置です。水槽内の右上にある黒い装置は、現在使用している水流を作るための装置です。水槽の上には水槽用照明とアワサンゴ用光源があり、実際の日照時間を想定して、朝の６時から夕方の18時までつきます。このような飼育環境をベースに、ニホンアワサンゴにとってよりよい環境を作るために次のような比較を行いました。

まず換水頻度を１週間から３週間ごとに60Lまたは90Lの換水の量をどちらが適切なのかを比較しました。次にアワサンゴ用光源を一基にするか二基にするかを比較しました。最後に水流がエアーポンプと水流装置のどちらがよいか比較しました。まず換水頻度についてです。交換頻度は、換水後にポリプを引っ込めて元気がないことからあまり頻繁でない方がよいことがわかりました。しかし、３週間では水の濁りが発生するため、２週間が適切であるとわかりました。換水量は環境の変化を少なくするため、1/3水量である60L変えることが適切だと分かりました。また、光量については二基のほうが褐虫藻の光合成が活発になり、触手が伸びることがわかりました。エアーポンプでは気泡がポリプに接触しポリプを伸ばさないことがあったため水流装置のほうがよいことがわかりました。

以上のことから、ニホンアワサンゴは環境の変化に左右されやすい生物だということもわかりました。いきなりですがここでクイズです。この写真の生き物はなんでしょうか？正解は３のケンミジンコでした。この微生物は水槽内のコケから見つかりました。４番のニホンアワミジンコは存在しません。他にもオヨギソコミジンコやソコミジンコなどの微生物も見つかりました。これはニホンアワサンゴの子供でプラヌラ幼生といいます。通常、水温が約26℃になると産卵を始め、プラヌラ幼生が排出されます。しかし、学校の水槽は水温を20℃に保っているにもかかわらずプラヌラ幼生が生まれていることを発見しました。普通では発生しないプラヌラ幼生と水温との関係を調べていくため、水槽内で隔離して観察を続けています。この研究に際して、御覧の方々にご協力をいただいております。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

○**司会**　ここで、昨年度、周防大島高校を卒業しました小原実月が一言申し上げます。

○**小原実月**　今ご紹介いただきました小原です。私は環境コースで多くのことを学びました。日本のアワサンゴの生育に関しては、観察をする中での少しの変化にも気付けることが大事だと考えました。また、ニホンアワサンゴの飼育以外にも様々な地域の方と連携した取り組みも行ってきました。そこで私は専門学校に通っていますが、看護師の勉強をする中でも、地域の方へ感謝する気持ちや少しの変化にも気づけるといった観察をする力が大切だと思います。今回の環境コースで学んだ取り組みは、将来の仕事にも生かすことができると思います。なので後輩たちにはこの環境コースを通して地域の方へ感謝する気持ちを忘れずに、またニホンアワサンゴの飼育をまたもう一度してほしいなと思います。ありがとうございました。

○**司会**　周防大島高校の活動報告は以上です。本日はロビーにおいて周防大島高校と周防大島町、そして山口県立大学が連携して行ったファッション＆観光土産の提案について展示をしております。お帰りの際にご覧いただきますようご案内申し上げます。この後、シンポジウムに移らせていただきます。準備を行いますのでしばらくお待ちください。

○**司会**　準備ができましたので、シンポジウムに移らせていただきます。シンポジウムはブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会水谷由美子より進行いたします。

○**水谷**　はい。大変素敵な高校生の研究活動、そしてコメントをいただきまして、感動いたしました。それでは今からシンポジウムを開催させていただきたいと思います。テーマは当初から言っております「民俗学者 宮本常一に学ぶ地域創生 地域循環がある周防大島のライフデザイン」というものでございます。ここでテーマで民俗学者とわざわざ書いていますが、一般的にはそのように認識されておりますが、宮本先生は大変幅広い活動をされておりますので後ほどお話したいと思います。まずこのシンポジウムですけれども昨年度周防大島町と長門市で開催させていただいたシンポジウムを継承、発展する形で開催させていただきたいと思います。元々長門市の事業に柳居俊学県議会議長をご来賓としてお招きいたしました、それと安倍昭恵様との関係で、今回このようなパネラーをお招きさせて頂きました。周防大島町の自然資源の代表はニホンアワサンゴですね。これは主には陸の整備というものも大切だというふうに山口県東部海域にエコツーリズムを推進する会の藤本正明会長からもお話を伺っております。また昨年の長門市のシンポジウムにおきまして、パネラーとしてお越しいただいたNPO法人森は海の恋人 理事長 畠山重篤様から、東日本大震災の気仙沼でのお話を伺いました。気仙沼で牡蠣の養殖をされているんですが、もう壊滅的な被害を受けられたんですけれども、その年は駄目なんだけれども、それが次の年には牡蠣が食べられないほどのプランクトンが育ってきたと、それはその海に流れ込む川の上流の広葉樹林もちゃんと整備していたという話を伺いました。気仙沼では漁業に携わってらっしゃる方が山で植樹祭をやっておられます。さて、ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会は顧問であり共同研究者である安倍昭恵さんと立ち上げたものでございます。2013年から19年は陸、つまり農業文化の振興を目的に活動を実施して来ました。2020年から海と陸を繋げて開発していく、先ほど言ったようにですね、そういったことから地域創生していくということの重要性を感じましてこういった角度からのアプローチで今後進めていこうということでございます。新しい地域の未来創造に貢献するというのが当BGAPの目的でございます。

そこで海と陸の発展に現場感覚を持って貢献された方に宮本常一先生がおられます。宮本先生は民俗学者の枠を超えて全国の農業や漁業さらに地域社会の文化の振興に幅広い活動をされました。ここ周防大島町のご出身です。現在宮本先生の業績評価は全国的に高まっております。周防大島町のですね、宮本先生の膨大な資料が保存され、研究もされている、宮本常一記念館ございますので、大変興味深いところでございます。そこで今回のテーマとさせていただいたわけでございます。県立大学は、名誉教授で93歳の福田百合子さんがおられますけれども、この先生、今日のシンポジウムの話をしたら、「私は30歳前後の頃に宮本先生とフィールドワークにご一緒したんですよ。夏休みに３年間続けてですね」、そういったことをされて農機具などが保管されている納屋に皆さんが泊まられて、そして調査をされたんですね。そんな話で直接触れた方が身近に県大にいらしたって私もちょっと驚いたりうれしかったりしております。そこで新山さんの「宮本常一に学ぶ」という基調講演を受けつつ、それぞれのパネラーの皆様に現在ご活躍されていることをご自身の自己紹介を含めてお話を伺っていこうと思っております。日本の行政の最先端の考えや活動、さらに企業による地域にやさしいサステナブルの最先端活動ですね、これを聞いてですね。この周防大島町の順番なんですね。そういったライフデザインにどういうふうに今日は話が展開できるか、そういったところを大変楽しみにしているところでございます。

ここでコメンテーターとして、また共同企画をしていただいてます安倍昭恵様にお話しいただきます。

○**安倍昭恵　ブルー＆グリーン アートプロジェクト実行委員会名誉顧問**　ありがとうございます。本日は周防大島町でこのようなシンポジウムを開催することにいたしましたところ、柳井議長に大変お世話になりますが地元の町長を始め町の皆様方に大変お世話になりました。またこうしてたくさんの皆様にご来場いただきまして開催することができましたことをまずもってお礼を申し上げます。ありがとうございます。先ほど水谷先生がおっしゃったように、2013年から私ども共同研究という形でいろいろなプロジェクトを行ってまいりました。当初2011年東日本大震災のときに東京で地下鉄に乗っていたんですけれども、その後ですね東京のコンビニやスーパーから食料がどんどんなくなっている現状に、何かあったときに本当に

都会は弱いんだなということを身をもって体験いたしました。

そしてその年から、下関なんですけれども下関の植村さんと一緒にお米作りを始めました。とにかくお米だけ持っていれば何とかなるだろうとお米と野菜を交換してもらったり魚を捕ったりすれば買うことができなかったとしても生き延びていくことはできるのではないかとそんな思いから米作りを始めました。しかし農業の現状を見た時に後継者不足であり、また耕作放棄地が増えているという問題が様々ある。もう少し若い人たちに、農業に関心を持ってもらえないかなというところからファッションショーをしてみようという非常に安易なんですけれどもかわいい農作業着を着た女の子たちが農業をしていれば、若い男性たちもきっと農業に関心を持ってくれるのではないかという安易な発想のもとにですね、水谷先生と共同でかわいい農作業着を作ってですね、あのデザインして、そしてそれのファッションショーをしましょうという。そしてファッションショーにとどまらず実際に農業体験をしてみたり地域活性のためにいろいろなアイディアを出したりということをしてまいりました。私はあの海洋環境にも元々関心がございまして主人が総理のときに島サミットであるとかG20であるとか配偶者のプログラムを実施するんですけれども、そんな中で何とか世界中の首脳の配偶者の皆様方と海洋環境について話し合う場がございました。そして今回、去年一昨年から、水谷先生と一緒にブルー&グリーンアートプロジェクトという形で森と海、陸と海に。海というのはやはり元々生命の発祥の場所です。海を大切にすることは陸も大事ですということで環境は両者一体となって考えていかなくてはいけないということで、こういうプロジェクトを始めたところでございます。昨年は、あの今日もお越しいただいている何人もの皆様方と一緒に周防大島の海岸の清掃等もさせていただきましたけれどもこれからもこの活動を広く続けていきたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。今日は素晴らしいゲストの皆様にお越しいただいているのでゆっくりお楽しみいただき、何かしら感じていただければ嬉しく思います。

○**水谷**　安倍昭恵様、どうもありがとうございました。それではパネルディスカッションに入っていきたいと思います。最初はですね、環境省事務次官の中井徳太郎様に、「宮本常一と地域循環共生圏によるニホンアワサンゴについて」ということをお話していただきたいと思います。

○**中井徳太郎　環境省事務次官**　はい、ありがとうございます。ご紹介いただきました環境省の事務次官の中井でございます。周防大島に来させていただきましてありがとうございます。周防大島について先ほど高校生の発表もありましたが、瀬戸内海国立公園、世界でも貴重なニホンアワサンゴでこれをしっかり盛り上げていこうということです。

これちょっと今日お話しする地域循環共生圏。これ日本、世界と未来を開かなければいけないというときに、やはり地元や私達の身の回りの良さをもう１回見なきゃいけないということだと思うんですけども、そういう意味で宮本常一先生が残されたものというものが本当にヒントになると思っています。そういうお話をしたいと思います。

ちょっと状況としてはやはり気候危機といえるような災害が起きている状況、そしてコロナは新型コロナパンデミックが起きたわけですけども、この二つがですね、大きな意味で同時解決が必要な環境問題だというふうに環境省は考えております。

その考え方はですね実はここにありますように人間が産業革命というですね250年前から、非常に活動を肥大化して来たわけですね。いろいろ技術も発展し人口も増えて大量生産、大量消費、大量廃棄というそういうことを、地球の地下資源、化石燃料、そういうものに頼って地面から持ち上げて、燃やし捨てる。

そしたら海にはプラスチックは2050年の推計では、魚の量よりもプラスチックの方が多くなってしまうと言われる。それはどういうことかというと、この左側の円錐の一番上に私達の人間の活動があります。

真ん中に経済社会システムという、そのベースとして私達の生存を支えている自然ですね、地球の基盤である自然。私達が便利を求めて便利になってきたわけですけども、そしたら基盤が揺らいでるということになってしまったと。今世界で言われてるのはこの人間の活動のあり方を、経済、社会の仕組みを変えて地球が今はやんでいる病気の状況ですけど、健康体に戻そうとこういうことなわけです。

そういう地球全体の危機の中で人間の活動を変えなきゃいかんという、そうしたときに気候変動につ

いてはですね、パリ協定ということで。今21世紀の後半の段階でCO_2が増えない状況にするカーボンニュートラル、これを今2050年までにやれば、この２度目標というのと、今1.5度の目標というのがあります。1.5度ならできるんじゃないかこういう状況なんですね。そういう日本としてそれが本当にできるのかということで１昨年の全菅内閣において日本は世界の大きな国と一緒にこれを進めます。

2050年のカーボンニュートラル、いうことを表明して進んでいる。こういうことなんですね。これもハードルは高いんです。あと30年で、いろいろもう増えないようにするということですので、あと10年、2030年という中間段階では46%まで減らさなければならない。ハードル高いです。今18%まで減ってきてます。

この減りながら経済、社会、どうなんだろうというところで、実は地球は今病んでいます。やればやるほど、経済は実は我慢して、経済がシュリンクしてやっぱり生活が壊れるんではなくて、やればやるほどみんなが健康体になります。

病気から健康に向かってるってのを実感できるということを目指して今やっているってことですね。このような動きを今自治体がどんどんどんどん手を挙げていただいています。全国の人口は１億1000万人を超えるぐらいで、地域から健康体になりましょうという、自治体側の表明がされているということなんですね。

そういうことを受けて国としても、地域からの声を受けてですね、この地域からカーボンニュートラルということをテコに、いわば地域の活性化も含めて地域の課題を解決していこうということで、ロードマップというのを作って今展開するということであります。

そしてその根幹にはですね、自然のシステムですね、森里川海という言い方を環境省もしておりますけれども、この自然の水の循環に象徴される森、山に雨が降り、川に流れ、海に行き、また雲から山に戻るという循環の中で私達の人間の暮らしがある。今の活動があるこのバランスをですね、いかにこの自然のメカニズムとして健康な状態に持っていくかということが根源である。このことをやるのに再生エネルギーを地域で掘り起こして、地域資源として活用する。

またゴミも含めて資源として活用して例えば生ゴミであったらそういう物を堆肥として使い農業に活用する。ありとあらゆる私達の身の回りの暮らしをもう１回。今までは大量生産、大量消費、大量廃棄を全部地球のどっかにあるものを安く買ってきましょうという大きな動きになってました。

そうしたら今回のようなサプライチェーンが切れるみたいな状況があります。私達の自然のシステムとして人間もその位置づけは事前にシステムとして、これが健康で、ここから私達の力を引き出す。

人間が関わることで、この自然の循環の力をいただいて明日はちゃんと繋げるんだという感覚の社会、経済に変えるこれを環境省が目指している地域循環共生圏という環境基本計画で、閣議決定して進めている構想になります。

周りに森里川海というですねことがある中で私達の都市とか農村、漁村も含めて、こういう地域環境共生圏ということになりました。このポイントはですね、今度は先ほど申しました森里川海から、エネルギーや食べ物や観光資源が私たち１人1人の健康のアクティビティの活動のもと、そういうものをうまく引き出し、それは宮本常一さんがいろいろおっしゃった世界の日本の良さというのももう１回ここで掘り起こしてですね、今度はそこに技術、今、の段階ではデジタルなどやはり様々な進んだ技術が使えます。

それをうまく使うことで、この自然の恵みを地産地消型自律分散型にしていくと。この構想が実は日本版のSDGｓという地域循環共生ということになります。私達の人間の体と地球を最初に比べましたけど、地域も全て生き物。私達、人間は37兆個の細胞からできておりますけど、その細胞が人間の体が元気になれば、血の巡りが良く、足の指の先までですね、毛細血管まで巡り、神経伝達がちゃんと行くような、そういうような健康な食べ物であり運動であり、そういうふうなことを地域でやり、ひいては国全体でやる。それを世界というのがですね、この地域循環共生のことなんで、まず私達細胞から元気になっていこうという、そういう発想なんですね。

それをちょっと図式化しますと、ベースには、この集落とかコミュニティベースでのエネルギーや食や

観光という循環、その上にはもう少し流域というような市町村単位っていうか、その上にはさらに、東北全体とか四国全体とか地域全体とか。その上にはさらにアジア全体だとか、こういう繋がってる循環系というものを意識しながらいろいろ地震がいろんなことが起こって災害が起こってどっか切れるわけですが、まずベースの循環というものが常にあるということで。私達の地域にはないということで買ってくるという発想で始まるのではなく、あるという発想がどうしても必要な時代です。そういう意味で環境省の進めている地域循環共生圏ということをやるのにベースでは１人1人がもうまさしく宮本先生が歩いてこられたようなことを、大事さを心で感じるような運動として、実は森里川海プロジェクトというものをやっております。

そういうことで、地域循環共生圏ということで、このカーボンニュートラルの話が日本の経済界、金融界でも大きく動いて世界が動いております。これも止まりません。でもそれはCO_2を減らせばやはり地域が元気になるっていうことをどうやったらいいのか、もちろん地域のポテンシャルがないという発想じゃなくて、もう１回あるんだっていうそれがアワサンゴであったり、まさしく宮本先生がたくさん残された民具であったりそういうようなことにデジタルやいろんな力を合わせてみんなで関心を持って。災害があろうが新型コロナ感染症のパンデミックや戦争があろうが、何とかやっていくんだよということを、目指す時代に入ったとこういうことで冒頭の話をさせていただきます。ありがとうございます。

○**水谷**　ありがとうございました。地域にある循環を地域の生活に活かしていく、また地域にあるポテンシャルの可能性についてお話をしていただきました。

それでは、続きまして、日本環境設計株式会社会長の岩元美知彦様にお話をしていただきます。

現在、国内外の有名ブランドのリサイクルに取り組んでおられますが、多くは岩元会長の開発された技術の上に成り立っております。この近くですと、北九州にプラントを造られ、ポリエステルの半永久リサイクルをやっておられまして、昨年度のオリンピックの金銀銅メダルが携帯電話のリサイクルでつくられたということも有名でございます。

これらのプラント技術は岩元さんが世界に輸出されているという、大変御活躍の方でいらっしゃいます。

それでは、岩元美智彦様、よろしくお願いいたします。

○**岩元美智彦　日本環境設計株式会社（現：JEPLAN）取締役 執行役員会長**　こんにちは。日本環境設計（現：JEPLAN）、岩元です。

今日は、リサイクルはここまで来ているということの理解と、これからの想像ができると思います。これからの資源循環は、皆さんと一緒に手を携えてやっていくことが大事だと思っております。10分程度、お付き合いください。

今日のキーワードは、「みんな参加」型、やっぱり社会を変えるのは１人ではできない、みんなで手をつないでいきましょうと。そして、技術は「無限大」、「地上資源」、「正しいを楽しいに」、「リサイクルを積み重ねる」、「経済と環境と平和」というのもキーワードです。

この話は、15年前からほぼ同じ話をしてます。ですから、聞いたことのある人は何回も聞いているんですけども、15年前からこんな話をしてたっていうことです。15年前に言ったのは、経済と環境と平和を両立したいということです。こんなことを小さなベンチャー企業、2人でつくった資本金120万円の会社がいきなり言うと、大丈夫かとか、もうこんなこと言ったら笑われちゃうよとか、そんな感じでした、15年前は。

しかし、これをやりたいなということで、3つの循環のトライアングルを考えて、それを実行してきました。

まず、技術です。世界にごみは存在しないということを技術で証明しようと。今主流のリサイクル方法は物理的リサイクルっていうんですけども、リサイクルできる回数は、世界で平均1回ぐらい。1回リサイクルすると、次は燃やしてしまう。それは、物理的リサイクルだとその物質が劣化したり、色などの添加物が取れないということなんですけども、これを化学的リサイクル、ケミカルリサイクルをすると、リサイクルが何回でもできちゃう。これが全然違う点です。ですから、この技術を確立しようということで、

プラントを造りまして、北九州でポリエステル繊維のリサイクルをしています。これ、１着の服から、またほぼ１着の服ができちゃうんです。弊社の技術だとリサイクルしても劣化しませんので、繰り返し何回でもリサイクルできちゃうということです。

携帯電話リサイクルもさせてもらってまして、弊社では金、銀、銅、レアメタルを取り出すための工程の一部を担っています。

また昨年度（2021年）におそらく世界唯一のペットボトルのケミカルリサイクルの商用工場を再稼働させました。

これ、分かりやすいですから、ちょっと説明します。

今主流の物理的リサイクルは、リサイクルするものを砕いて洗ってリサイクルします。このリサイクル方法だと、色などの添加物がついていたり、リサイクルを繰り返すと劣化していきますので、リサイクルできる回数に限りがあります。

これに対して弊社は、リサイクルするものを分子レベルまで分解するんです。これを、解重合といいます。そうすると、色や添加物などの不純物が取れて、石油由来のものとほぼ同じ品質のものができるんです。物理的リサイクルか、化学的リサイクルかによってリサイクルのプロセスが全然違います。弊社は、何度でも循環できるケミカル（化学的）リサイクルの技術開発を行ないました。

リサイクル技術の開発目標は、水平、かつ1:1、かつ半永久的。

水平というのは、おもちゃからおもちゃ、文具から文具、服から服など、元のものと同じものをつくることを水平リサイクルといいます。かつ元の量をほぼ減らさずにほぼ1:1の割合でのリサイクルですね。それを半永久的に循環させる。これがケミカルリサイクルのいいところなのです。CO_2も半分減ります。

リサイクルは1回や2回じゃなくて、半永久的だ。だから、地球のごみは存在しないというのは、ケミカルリサイクルだから言えることなんです。

ペットボトルのケミカルリサイクルの商用工場は、世界では弊社しか保有していません。だから、日本はすごく今、最先端の考え方、工場、技術を持っていると言われています。

次、循環トライアングルの２つ目は、みんな参加して世の中を変えていこうということです。

以前にどこでリサイクルしたいですかっていうアンケートを取ったところ、「買った店」が1番でした。だから、みんなが参加したいところに回収ボックスを置くことにしました。

今は、この回収プロジェクトにたくさんの大企業さんも入ってもらっています。これ、いいことが２つありまして、1つは、みんなで課題を早く出していきましょうということ。課題を出して、仕組みで解決、技術で解決、課題解決に繋げることが１つ目です。

2つ目は、行動変容です。人の行動や意識や気持ちを変えるのは相当時間がかかるんです。だから、リサイクルを何回も体験してもらうと。だから、今日は眼鏡、３か月後におもちゃ、次は服、次は携帯電話、文具、などと次々とリサイクルを体験することで自分ごとにしていくために、各業界のトップにお願いして、回収ボックスを広めました。

次は、95っていう数字で、これはリサイクルに興味のない人や興味があっても動かない人。基本的に動かない方です。やらないといけないと思う人はいっぱいいます。けれど、やっぱりあまり行動してくれないということです。ですから、リサイクル工場があって、回収拠点があるのだけども、あまり動かないです。

それで、キーワードを「正しいを楽しい」に決めました。難しいことを言うんじゃなくて、それを楽しく演出していこうということで、最初にバック・トゥ・ザ・フューチャーに登場する車型のタイムマシーン「デロリアン」を動かそうと思ったんです。これは、見た方は、多分ストライクゾーンの方、いると思うんですけども、これは、パート１が1985年の映画で、パート１は30年前の過去に、パート2は30年後の未来に行くんですが、パート2では燃料がごみなんです。タイムマシーンにごみを入れて、未来に行きましょう。行って、事なきを得て帰ってくる。これがリサイクルの象徴だということで、ハリウッドに地上のごみを資源に変えて、循環型社会をつくりたいと。戦争やテロをなくしたいと。子供たちに笑顔を取り

戻したいと、提案したんです。

戦争やテロをなくしたい、という話は、相当時間かけて議論しました。戦争やテロの原因って、やっぱり地下資源の奪い合い、地下資源の関係だよねと。だからケミカルリサイクル技術の力を使うと地上資源で回るじゃないかと。そうすると、地下資源をどんどん使わなくなって、本当の子供の笑顔を取り戻せるよねと。だから、力を貸してねっていうことで、ユニバーサル公式のイベントを行えることになったんです。

デロリアンはお前が持てということで、映画仕様のものを購入しました。「リサイクルはすごく大事だから、ぜひ参加してよ」って言っても、実は人はあんまり集まらないんです。でも、リサイクルに参加するとデロリアンと一緒に写真が撮れるイベントをすると、平気で１時間待ちなんです。この前も横浜のJR横浜駅でやったら、90分待ちでした。その90分、1時間の間に、環境の気づきを得たり、環境課題が自分ごとになる。そしてそれがSNSで伝播して、どんどん参加者が増えていくんです。

その他には、着なくなった服で飛行機を飛ばせというキャンペーンをやったんです。世界で初めて、古着から再生したバイオジェット燃料の製造許可をアメリカで取って、ボーイングを調整し、ＪＡＬと国を調整して、飛ばしたんです。古着を10万着集める予定が、1か月で25万着も集まったんです。このフライトイベントには子供たちを200名御招待するつもりだったんですけど、コロナで中止になってしまいましたが。

これは羽田～福岡便の通常便でお客さんが普通に乗る飛行機を、古着から作ったバイオ燃料で世界で初めて飛ばしました。

その他には、大手ファストフードチェーン店で購入するとついてくるおまけのおもちゃのリサイクルを、実は10年前からやっているんです。10年前の子供の参加者は300人でした。今、回収拠点が2,800か所あります。今、どれくらいの子供が参加していると思いますか？300万人以上、330万人ぐらいだったかな。これ、すごいんです。子供たちの遊び終わったおもちゃをリサイクルする。これが文化や習慣になってきたということです。これは子供たちの行動変容で、文化や習慣つくることができた成功事例なんです。

このおかげでこの企業のグローバルのSDGｓ担当や副社長が「日本の子供たち300万人の行動のおかげで、私たちは気づきました。日本に教えられました。日本の子供たちのおかげです。ありがとう。」と言ってくれました。そして2025年末までには世界で販売されるおもちゃの素材はリサイクルのものしか使わないと、コミットしたんです。

日本ってすごいなっていうふうによく言われます。弊社はペットボトルのリサイクルもさせてもらっています。ペットボトルは、日本は60万本使っていて、回収率は90％以上で、ヨーロッパの倍、アメリカの３倍集まっています。

回収されたペットボトルは何になっていると思う？と子供たちに質問したところ、ほぼ「ペットボトル」という答えでしたが、実際は20％ぐらいしかペットボトルにリサイクルされていません。半分は海外に輸出されています。やっぱりこれ、おかしいよねと。弊社のリサイクル技術を使えば、ペットからペットに何回もリサイクルできるんだから、子供たちが思い描いているリサイクルを実現したほうがいいんじゃないですかっていうことで、京都市さんは、京都市で回収したペットボトルを全量、弊社でリサイクルすることにしました。今のままでは、子供たちに説明がつかない為です。

理想とする設計図は、経済と環境の両立。一番上は消費者。次は回収拠点と小売店、次は技術と地下資源、メーカー。こういう設計図を描いています。

みんなにはやっぱり環境大事だから参加してよ、楽しいこといいよねとか、戦争、テロは嫌いだよねということで、たくさんの人が今どんどん参加してくれてます。回収に参加してくれる企業は、例えばイオンさんもセブンさんも、これはみんなが参加するインフラだから、みんなで手をつなごうぜっていうことで参加してくれて、今では数百社になりました。

次、技術がおもしろいのは、物を作るプロセスを、実はひっくり返したり一部改良すると、リサイクルプロセスになりやすいんです。それを最初にやってくれたのは新日鉄さん。うちでリサイクルしてできな

かったものを新日鉄さんに入れて、リサイクルしてくれています。

消費者にこう聞きます。自分たちの不要なものでできた地上資源で作られたＡ商品と、地下資源でできたＢ商品、どう違うんですかと。これ、何度も話してきました。品質は同じです。そしたら、みんなＡを買うんです。Ａを買うと、次に回収拠点にまた物がたくさん集まる。物が集まると、技術にヒト・モノ・カネが投資されて、また地上資源ができて、たくさんメーカーが参戦して、自走式の地上資源の経済圏が、今、回り出してきたんです。これ、日本だけなんです。ぐるぐる回ると、CO_2が減るんです。地上資源でできた商品が、今、店舗に並んでいます。それを買えば経済が回って、CO_2が削減されて、戦争やテロをなくせるっていうことで、経済と環境と平和、これが大切だよね、ということです。

最後です。これはすごいです。

ワシントンであったグローバル会議で、H&Mは2030年までに二度と石油を使わない、地上資源だけでやるって言ったんです。CO_2減らして、平和な社会をつくるんだと。

その翌年、他のグローバル企業も、俺たちも地下資源を使わないぜと宣言しました。

最後に、私たちの便利な生活、その裏側には地下資源を奪い合う資源争奪戦争がある。それを世界中、金とか武器が欲しいとかいうけども、わくわく・ドキドキの循環型社会でいいんじゃないかということで、15年間同じ話をしてます。ありがとうございました。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。リサイクルというと、何かとても生真面目な話のようでございますけれど、とにかく目指してらっしゃるのは、わくわく・ドキドキするという、楽しくやるということと、やっぱり子供さんのプロジェクトをやられて、未来の可能性に人材育成されてるという非常にすばらしいお話でございました。

それでは、周防大島町の藤本淨孝町長から、ニホンアワサンゴの拠点施設を生かした地域振興とアウトドアフィールドについて、お話頂きたいと思います。

○**藤本淨孝　周防大島町長**　周防大島町長の藤本でございます。よろしくお願いいたします。

今、環境の話を岩元会長より頂きました。周防大島も、環境について、これから力を入れていきたいと思っております。

皆さんにおかれましては、もう既に環境に大変御尽力を頂いているところでございますが、周防大島はごみの分別がほかの自治体に比べて非常に厳しいです。これは、焼却炉の能力の問題もあり、地域の皆さんに細かい分別をお願いしております。ほかの自治体でもこれからだんだん分別を細かくしていこうという動きがある中で、周防大島町はもう既に、分別の最先端を行っているところでございます。皆さんにおかれましてはお手数をおかけしますが、分別をさらに頑張っていただき、環境のために尽くしてまいりましょうということを、今、岩元会長のお話を聞きながら思っておりました。

そして、お題で頂戴いたしましたニホンアワサンゴの拠点施設を生かした地域振興とアウトドアフィールドについて皆様に御案内とお話をさせていただきたいと思います。

現在、周防大島町は人口が15,000人を切っております。毎年400人の人口が減っていくというようなことでありますが、高齢化率も55％を超えようというところでございます。そして、町全体に生まれる子供の数、出生数ももう50人を切っております

その中で、町でも移住定住を皆さんに呼びかけ、そしてＰＲを重ねているところでございますけれども、ちょうど折しも今コロナ禍であります。どうしても出産に向かおうという思いの皆さんも、なかなかこのコロナの中でというようなことで躊躇されるという状況もあります。ですので、人口を増やしてまいりたい、そう私も思っておりますし、そのように努めてまいりたいというところでありますが、なかなか課題はたくさんあります。

そのような中で、明るいニュースの１つが、このニホンアワサンゴ拠点施設というものです。

先ほど、周防大島高校の皆さんもニホンアワサンゴの飼育ということで発表していただきましたけれども、周防大島の地家室の沖にニホンアワサンゴの世界最大級の群生地がございます。このニホンアワサンゴというサンゴは最北に育つサンゴであります。ですので、大変貴重なサンゴであり、そしてまた、皆さ

ん、姿を見られたこともあるかと思いますけれど、大変美しく、きれいなサンゴです。

周防大島町の中の地家室という地域の沖に、ニホンアワサンゴがおります。このニホンアワサンゴを錦の御旗といたしまして、多くの皆さんにPRをして、そして知っていただき、学んでいただいて、この周防大島を盛り上げようというのがこのニホンアワサンゴの拠点施設です。

先ほども御挨拶のときにお話をさせていただきましたけれども、令和4年度予算として議会の承認も頂きまして、町だけではなく、山口県、そして環境省の皆さんと共にこの拠点施設を造っていく場所は、地家室のアワサンゴトンネルのすぐ隣にあります。もともと地蔵小学校という小学校の跡地であり、そこに拠点施設を夏には着工して、今年度中には完成を迎えるというところでございます。町民の皆さんにも、この着々と進む様子は、また広報等々でお知らせをしたいと思っているところでございます。

拠点施設が着工に至るまでの経緯を少しお話をいたします。私は町長に就任をさせていただいて、まだ１年半になろうというところでございます。このニホンアワサンゴの施設、地家室園地というこの施設は、私が町長になる前、前椎木町長の頃より動き出したプロジェクトでございます。椎木町長、そして柳居県議会議長、環境省の皆さん、地域の皆さんと一緒に取り組んできたものを私も引き継がせていただいています。そして私も、岡山に環境省の事務所や東京の環境省のほうにも出かけさせていただいて、要望を行い、ようやく着工に至ることができました。私もその一部に汗をかかせていただいておるところでございます。

経緯はそのような経緯でございますけれども、その施設をどういうふうに活用していくのかが今後の課題です。この地家室園地というニホンアワサンゴをメインとする施設は、広さでいいますと600㎡の大きな施設であります。そこで、学習展示であったり、屋外学習であったり、管理事務所があったり、倉庫があったりというところでございますけれども、何より新しい人の流れをつくるということでございます。町民の皆さんはもとより、町外の皆さんにもぜひとも集っていただいて、そこを拠点に、もちろんニホンアワサンゴの勉強、そして、すぐ近くには、新山先生がいらっしゃる沖家室島もございます。地域の様々な歴史、そして海だけではなくて、先ほどからもお話を頂いております海と山の大切さを学んでいただくということでございます。

ニホンアワサンゴが育つ環境づくりというのは、藤本正明さんからも日々、教えていただいていますが、山がきれいでないと、海がきれいにならない。よって、海がきれいで、その伏流水がニホンアワサンゴの成長に非常にいいのではないかという話があります。海をきれいにしてその環境を守るだけではなくて、山の環境も一緒に考えていく必要があります。

それだけではなくて、地家室園地を拠点としまして、そこから自転車に乗ったり、走ったり、山に登ったり、そしてきれいな景色を見たり、いろんなアクティビティーに出かけていただくことができるのではないかという施設でございます。

そして、老若男女の方に集っていただきたいので、拠点施設の中で、ニホンアワサンゴを水中ドローンなどの技術も発達しておりますので、足がなかなか歩けないな、潜れないなという方でも、そこでニホンアワサンゴに触れていただける、学んでいただけるという施設を造る予定でおります。

何分、皆さんの御理解を頂きながら、そして、施設を盛り上げてまいりたいと思っています。

そして、今日は宮本常一先生の教えについても、新山先生より、今、お話を頂いたところです。

この周防大島は2018年、もうすぐ4年になりますけれども、2018年の10月22日に、ドイツの貨物船が大島大橋に衝突をしました。衝突により送水管が切断され40日間、断水をしました。これまで大島大橋を何度も行き来を何気なくやっておりましたけれども、ああ、周防大島は島なんだということを、改めて感じました。この大島大橋というものが本当に命綱であるということを、改めて町民の皆さんもお感じになられたと思います。

それは、この環境のことにもつながっておりまして、やはり水の大切さ、そして生活、なりわいについて、やはり皆さん、その40日間の苦労の中で、あらゆることを感じられたと思います。

生活をするうえで、水というものの大切さ、そして、先ほど安倍先生もおっしゃっておられましたけれ

ども、食べることの大切さも感じました。やはり物流がストップしてしまうということもありましたので。そこで、自分たちは何ができるのだろうかということも、私も考えました。皆さんもお考えになられたかと存じます。

私は改めて環境というものを大切にしてまいりたいと思います。ごみ問題もあります。そして、海と山の環境ということもあります。そういったことも、皆さん意識を高くお持ちになられておられるということを、私は大変誇りに思います。

先般、大島大橋の事故の賠償の一連の手続が、ようやく終わったところであります。ですが、希望する額がやはり国際法の関係で、大きくそれよりも減ってしまうというところがございましたけれども、町民の皆さんはそれにも負けず、しっかりと前を向いておられます。ぜひ皆さんと共に、環境についても取り組んでまいりたいと思います。

その環境についても、この周防大島で環境に取り組むということは、大きな工場もない周防大島町でどうしたらいいのかという疑問がございます。

それは、各家庭、各一人一人の皆さんが環境意識を持っていただいて、カーボンニュートラル、工場だけがカーボンニュートラルをするわけではなくて、各家庭からのカーボンニュートラルを取り組んでいきたいなと思っております。

先ほど、岩元会長さんからも、物はリサイクルが延々とできるというすばらしいお話を伺いました。そういったことも、周防大島町でも取り組んでまいりたいと思いますし、そういった宣言もどんどんしていきたいと思っております。

拠点施設のお話から少しそれてしまいましたけれども。やはり一番は、このニホンアワサンゴ拠点施設、地家室園地、これが、人が呼べる楽しい施設でないと、意味がないと思っております。

「あそこに行ってきたんよ。行ったら楽しかったんよ」という皆さんが、周防大島の方だけではなく、島外の皆様へ、そして、日本中の皆さんが、「あの周防大島に行ってきたんよ」「ああいうところがあったんよ、よかったよ」というようなふうに言っていただけるような、そして、町民の皆さんが誇りにできるような施設にしてまいりたいと思います。

そのためには、町民の皆様の御理解と応援がないとできませんので、ぜひともまた、御支援をよろしくお願いをいたします。

私からは以上でございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

これからできるニホンアワサンゴをめぐる拠点施設で、いろんな環境問題の学習とかニホンアクサンゴの実践的な学びができるということで、楽しみにしております。

それでは、本当に時間が大変押してきておりますので。新山様は、先ほどのお話に付け加えるようなことで、何かございましたらお願いいたします。

○**新山**　どうもありがとうございます。先ほど、中井先生、岩元先生、先進的な取組とか今の環境の実情について、本当に勉強になったし、よく理解ができました。

そのことをお聞きしながら、また宮本先生ですが、宮本先生がよく言っていた言葉は、「人間は伝承の森である」と。伝承というのは、普通、歴史とか文化とか伝統とか、そういうことになるけれども、環境もそうなんです。環境こそ大事なんです。

次の世代にどういう環境を残しておいてやれるかというのも、大きなテーマになるわけです。そういうことを、宮本先生は常におっしゃっておられたと思います。

ですから、今、町長さんがおっしゃいました、今度、拠点施設ができるということになります。地家室に、地家室園地。

そこでいろんな環境のことを勉強しようとか、楽しくそれをやっていこうとか。やっぱり、そういうことを常に考える機関とか、場所とか、人とかがいないと、もう、ぐだぐだになるというか、前に進まないんですが。

やっぱり、大島は環境を大事にする島であるという、そういうために、環境省からもちゃんとたくさんの予算を頂いて、あれができたわけでありますので。ぜひ、そういうふうな方向に導いていただきたい。地元の１人としてお願いを申し上げます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、次は、もう１分ずつぐらいになってしまいますけれども。

昨日は、先ほど来からお話ししていただいている、ニホンアワサンゴの拠点施設の視察、それから、今日は宮本常一記念館を、先生方には訪問していただきました。

そこで、この地域との関わりで感じられたことを、簡単に御紹介いただければと思います。中井さんからお願いします。

○**中井**　ありがとうございます。本当に周防大島、今までの、島民の昔のなりわいからずっと来ているものというのが、宮本先生がたくさん残されていますけれども。アワサンゴも含めて、もう一回、この未来に向けて、地域の意味での自然資源・地域資源にして、私たちが暮らして健康にして、みんなが豊かになるために、大きなポテンシャルがあると感じました。

世の中には本当、高度成長期やった、戦後頑張った、地球全体が今、大変なんだけど、これから行く方法って、さっきも言いましたけど、３つのポイントなんですよ。

エネルギーっていう、全てみんなエネルギーを使わないと動けないんですけど。それを今まで地下の化石燃料をほじくって燃やしたんで、CO_2が増えちゃったということで、そこをバランスさせるというのが求められます。

エネルギーを地球に負荷がかからないように、自然の地上資源、そういう再生エネルギーにうまく使うと。地下から燃やしちゃうと、CO_2が増えて、こんなのになっちゃうので。それを、エネルギーっていうメルクマールで健康にしようっていうのが、2050年までのポイントです。

もう一つは、岩元さんが言った循環っていう話。僕たちは無限に物があると思って、持ってきて無限に海に捨てて、大丈夫だと思ったらとんでもなかったっていうことが分かって。ごみ前提だっていう頭に日本人、まだまだ環境省も行っていないところがあるんです。直さなきゃいけない。

ごみっていう発想もやめたほうがいいです。実は、全部資源なんです。全部つながっているので。森も砂漠も川も海も、全部つながっているので。１回、これを資源だと思って、次にどう生きるんだっていう発想で全てを見ていく。つまり、その話を岩元さんがされたんですけど。

そういう、物がつながって、また再生されて有効になっているかっていう、物のつながり方。エネルギーっていうことの見方。

もちろん、物は無限に発散して、なくなっても大丈夫なんじゃない。全部つながって、有限にある中で、うまく回さなきゃいけないんだっていうメリットもある。

もう一つは、分散型とか言われるんですけど。自然の地の利とか、自然と調和する形で空間を使っていたんですよ。それを都市空間にみんなビルに一極集中したので、コロナのときには、３密を回避するみたいにリスクが高まってくる。当たり前ですよね。それ、実際に地震が来たら、一気にみんなが倒れちゃうと。

デジタルも使える、Wi-Fiも使えるってことになったら、このときだからこそ、自然に調和した空間の使い方ができているかっていうことを、もう１回できるんです。

エネルギーと物がつながっているという、物のつながり方の見方と、空間を一極集中したら、もうリスクがあるのは決まっているので。自然の地の利に合わせて生態系と調和するっていう。

この３つが、みんながそれぞれ技術とか技とか、うまく引っ張ってやるときの、いにしえに学ぶ時代に、やっぱりなっちゃったと。もう一回、自分の足跡を見たら、実は、宮本先生の記念館にたくさんヒントがあったというようなことだというふうに思っています。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。みんな全て資源なんですよね。１つキーワードとして。ありがとうございました。

それでは、お願いします。

○**岩元**　私は、環境を今後、伸ばしていくのは人材だと思っています。それは、やっぱり中学・高校の人材が大事だと思います。

いろいろな人たちと話をするんですけど、やはり、私が九州の、もうど田舎の出身です。だから、自然にDNAが入っているんです。ですから、環境のことを実は真剣に考えているのは、自然の豊かなところで育った方が中心になるんじゃないかなと、僕は思っています。

ですから、先ほど、周防大島高校の、僕はビデオを見て、これはいけるんじゃないかと。こういう人たちが、将来の社会を確実に変えていくと。循環型社会ができるんだというふうに感じました。

ですから、町長、ぜひ、こういう教育を、まだまだ頑張っていただいて、世界のために子供たちを育てて、いい町にしてほしいなと。

以上です。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは、もっとお話を伺いたいところでございますけれども、町長には、最後にまた、まとめていただくということで。飛行機の関係もございまして、少し急ピッチにお話をまとめていきたいと思います。

それでは、私がまとめる前に、今までお伺いしていて、安倍昭恵さんのコメントをお願いしたいと思います。

○**安倍**　お２人からも、また町長や岩元さんからも、すばらしいお話を頂きまして、ありがとうございました。

今日、ほとんどの方は、周防大島町の方なんでしょうか。周防大島町の方、ちょっと手を挙げていただいてもいいですか。ほとんどそうだと思いますけれども。

私、何回か来させていただいて、本当に美しいところだと思います。でも、これは周防大島町に限らないんですけれども、田舎に行くと、「うちの田舎は何もなくって」って皆さんおっしゃるんです。いいえ、そうではなくて、この美しい海や美しい山がたくさんあるじゃない。この美しい空気や、温かい人間関係や。

でも、地元に住んでいらっしゃる方は、意外とそれに気づいておられない。ここではなくて、ほかの地域で清掃活動なんかをやっていると、意外と漁師さんたちが海に、そこの漁港に捨ててしまったりみたいなことがあったりとか。

なので、この地域が、本当に美しい自然が残っている。経済発展の中で、もしかしたら遅れていた部分があったのかもしれないけれども。でも、だからこそ残っているこの豊かな自然、この生態系が、どれほどこの国にとって宝物なのか。皆さんだけの宝ではなくて、国にとっての宝なんだっていうことを、ぜひ、この町民の皆さんに御理解を頂きたいなと思います。

これが、これから人を呼んでくる最も大切な観光資源にも、私はなってくると思いますし。海外の方たちとお話ししていると、本当に「日本の豊かな自然の中に行きたい」っていうお話をたくさんいただくんです。どこにお連れしていったらいいのかなって。なかなか海外のものすごい富裕層がいらっしゃって、意外と本物の自然を求めている方たちがいらっしゃるので。

このアワサンゴは、十分にそういう方たちを呼び込める観光資源にもなってくると思うので、ぜひ、皆さんお一人お一人が、自分がアワサンゴ大使だと思って、この地域にはこんなにいいものがあるんだと自信を持って、ほかの地域の方たちに発信をしていただきたいというふうに思います。

「うちの地域は何もなくて」っていうことは、今後ぜひ言わないでいただきたい。こんなにすばらしい地域なんですよっていうことを、外の方たちに自信を持って発言をしていただきたいなというふうに思います。

昨日は結構遅くまで、中井次官とも楽しくお酒を飲んでいたんですけれども。今朝、もう早くに、次官は外に出て海で泳がれました。そして、次官について来られた、やはり東京の環境省の岡野さんは、山に登られました。東京にいたら、仕事の前に泳いだり山に登ったりっていうことが、絶対できないんです。

ここにいるからそういうことができる。

皆さんも、どんどん自然が身近にあるので、そういうことを自分たちで体験し、子供たちは危ないからあそこに行っちゃいけないっていうふうではなくて、もちろん見守らなくてはいけないと思いますけれども、田舎に住んでいるからこその体験を、子供たちにはたくさんさせてもらいたいなというふうに思います。

先ほどからもお話がありましたけれども、人間は自然の一部であると思います。欧米の文化が入ってきてから、人間が一番偉くて自然をコントロールできるものではないかというふうに、人間が錯覚をしてしまっているのが間違いの始まりなのではないかと私は思っているんです。

日本人は、八百万の神があって、その中で全ての自然を崇拝して、そして、自分もその中の一部なんだという文化を持っていると思うので。それを私たちは、やはり、いま一度、思い出さなきゃいけないときなのではないかなというのを、お２人のお話を聞いていて思いました。

以上です。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。大変感動的なお話です。

要するに、身近なものを違った視線というか新鮮な目で見ていくと、宝物だったみたいな。そういうことを、もう一回みんなで確認し合いたいというような、そういったお話であるかと思います。ありがとうございます。

それでは、本当に時間が迫ってまいりました。まとめとして、もう２分と言いましたけれども、もう１分程度で、お一言ずつ、中井様からお願いいたします。

○**中井**　ありがとうございました。今、昭恵夫人からすばらしいお話がありましたけれども、私も本当にそう思います。ぜひ、島民の皆さんに、大島の自然のパワー、これを自分のものとして体に、もうふだん入っているというふうな。もう一回、さらにバージョンアップして、自然の力を体に注入して、生命力を高めてください。

私は今朝、本当に目の前のすばらしい浜で泳ぎました。今日、まだ海水浴解禁していないから泳いじゃいけないとか、そういういろいろ固定観念がありますよね。何だかんだ近代になって、多分、川に行っちゃあ子供は事故があるから行ってはいけないとか、そういうふうに、もうちょっと本当は、目の前にある自然に触れて、パワーを自分の体に入れて健康になると。本物のいりこを食べて、本物のおいしい野菜を食べて、ミカンも食べてと。ちょっとそこら辺がベースになると思います。それは本当にみんなも羨む、本当にすばらしい世界だと思います。（拍手）

○**水谷**　岩元様、お願いします。

○**岩元**　私は、残念ながら海パンを持ってきていませんでして（笑声）、ぜひ次回は海パンで泳がせていただいて。

今日は、町長にこれを贈呈します。ぜひ。この粘土は食べ物のかすでできていますし、アルカリをもってきていますので、畑とか海に非常によいですので。これを子供たちと一緒に遊んでいただいて。

やはり、子供たちがキャーキャー言っている、そういう社会からスタートすると、大人は必ずついていくと思いますので。ぜひ、次は粘土をくにゃくにゃにして、子供たちと遊ばせて、僕も行きますので。あと海パン持って行きますので、次回もよろしくお願いします。

以上でございます。（拍手）

○**藤本**　今日は本当に元気を頂きました。皆さんもそう思われたと思います。ここ、周防大島に住んでいる、それはすばらしいことということを改めて感じることができました。

中井事務次官には、この大きなポテンシャルがあるということを、この自然と営みに対してもお話を頂きましたし、岩元会長から、子供たちが自然のことを考えるのは自然で育った人ということであること、こちらも大切に育ててまいりたいと思います。

また、安倍先生からも、周防大島町のすばらしさをしっかりと感じて、誇りをもって前を向くというお話を頂いた思いでございます。

うちは子供が３人いますので、さっそく今日帰って環境について一緒に遊んで学ぼうと思います。本日はありがとうございます。（拍手）

○**新山**　ありがとうございます。本当にすばらしい企画で、すばらしいシンポジウム、ありがとうございました。

テーマを与えていただいて、改めて私、考えたんです。大島の人たちは、よくやっているなと。今度、拠点づくりの話が今、ありましたけれども。こちらから言うと、なぎさ水族館、そして星野記念館、宮本常一記念館、八幡生涯学習のむら、そして、ハワイ移民資料館です。まさに循環なり持続可能な社会をつくるための施設です。

ですから、その施設をしっかり連携して、そして意欲的に、またしっかり結びついて、いろんな実験を重ねていけば、もう今、中井先生がおっしゃった、いろんな可能性というのがまた開いてくるのではなかろうかと思います。

今日は何かそういう、いいきっかけになったような気がいたしまして、本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

今日は基調講演の講師でもあられましたけど、この地元の市民代表として、新山さんからそういったおまとめを頂いたのは、よかったです。

やっぱり、地域がわくわくする島だということを住民の皆様が自覚して、そして、その売りとしての自然が豊かであって、先ほどおっしゃった、自然の持っている力を自分の体に感じて。そして、そういうことから自然と人間の心と体の循環というか、食べ物もそうでしょうけれども、そういうことも改めて、いろんなお話から伺いました。

また、子供さんの教育を通じて、この島の元気が発展していくというか、じゃないかとそういうようなことを感じました。

今日は地域の未来ライフデザインに向かっていくシンポジウムでしたけれども。様々な角度からのサジェスションや、現在の国や、そして企業の中で行われている最先端の話を伺いながら、それは自分たちの身近なところに実は取り入れられるというか、あまり遠いところを見るんじゃなくて、身近なものを評価するところから実践していけるものではないかなというふうに感じさせていただきました。ありがとうございます。

それで、もう本当にリミットなんですけれども。今日のこのシンポジウムの始まりのきっかけでもあるし、また、運営や企画、それぞれに大変御協力いただきました柳居俊学様に一言。やってみて、御成果についてどのように感じられるか、ちょっと上に上がっていただきたいと思います。

今日の映像は後ほどアップさせていただきますので、またお友達などにもお伝え下さい。

○**柳居**　今日は本当にありがとうございました。このようなすばらしいシンポジウムを御開催いただきました。水谷先生、昭恵さんには心から感謝を申し上げます。

それから、もう日本の環境責任者の中井事務次官、それから最先端で、世界で頑張っておられる岩元さん、本当に恐縮です。

40年前に町民憲章をつくった、その１つが、自然を守り、環境を整え、美しい町をつくりますというものです。

この島で生まれたことを、今、大変誇りに思っております。力を合わせて、島づくり、皆さんと一緒に頑張りたいと思います。

「また来てあげる」って言いましたよね。（拍手）時々、島も変わっていくと思いますので、よろしくどうぞ。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。

それでは町長、本当に一言で。こういうテーマでやらせていただいて、町長として未来に。先ほど、もうおっしゃったんですけども、一言で。

○**藤本**　先ほど申し上げたとおり、勇気を頂きました。しっかりと前を見て、環境にも取り組んでまいりたい。皆さんのために取り組んでまいります。

今日はありがとうございます。本当にお疲れさまです。ありがとうございます。（拍手）

○**水谷**　ありがとうございました。昭恵夫人も私も、周防大島町のファンでございまして。そして、また今日ここに、東京からもお客様が来ていただいたりなど、遠方からもたくさん来ていただきました。本当にありがとうございます。

みんなでファンになって、この地域に来た交流人口、定住人口もありますけど、交流人口もたくさん来ていただいて、そして拠点施設ができて、そこで私たち、子供さんたちと一緒に環境のことを考えたり、我々の命とか、体とか、循環とか、そういったことをしっかり感じて、そして実践していけるような、そういう未来を希望しながら、今日のこのシンポジウムを閉じたいと思います。

それでは、皆さんどうぞ、今日のパネルラーの皆様に拍手を。（拍手）

それでは、マイクを周防大島高校の皆さんにお返ししたいと思います。ありがとうございました。

○**司会**　水谷先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日の全日程を終了いたします。

皆様の御協力により、スムーズに進行ができましたことを感謝申し上げます。本日はありがとうございました。（拍手）

お帰りの際は、お忘れ物がないように、お気をつけてお帰りください。